

西条・岩船遺跡発掘調査報告書

1997. 3

中野市教育委員会

西条・岩船遺跡発掘調査報告書

1997. 3

中野市教育委員会

例　　言

- 1 本調査報告書は中野駅南口区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 調査は平成元年から平成6年度まで、断続的に実施された。
- 3 調査者は関孝一・郷道哲章が中心となって実施した。
- 4 本調査報告書は関孝一・郷道哲章の指導を受け、中野市教育委員会がまとめたものである。
- 5 土器の実測図は1/4、住居は1/60、土坑は1/40に原則的に統一してある。
- 6 平成2年度に既報を刊行してあるが、遺構番号等は改めてつけてある。

目　　次

第1章 遺跡の概要	
第1節 位置と地形	2
第2章 弥生時代遺構	
第1節 中期の遺構	11
(1) 竪穴住居	11
(2) 掘立柱住居	19
(3) 溝	19
第2節 弥生時代後期の遺構	20
(1) 竪穴住居	20
(2) 土坑	38
(3) 墓・壙棺墓	48
第3章 平安時代	
第1節 遺構	71
(1) 竪穴住居	71
(2) 土坑	78
第4章 中世	
1 遺構	87
(1) 検出状況	87
(2) 溝と区画	88
2 一括埋納錢	89
3 墓	90
4 井戸	90
5 小結	90
第5章 第1号埋納錢について	
1 1さしの枚数について	99
2 さしと重さの関係	101
3 錢種について	102
4 加工錢について	105
5 錢さしの組成について	107
6 まとめ～出土遺物の意義	109

第1章 遺跡の概要

第1節 位置と地形

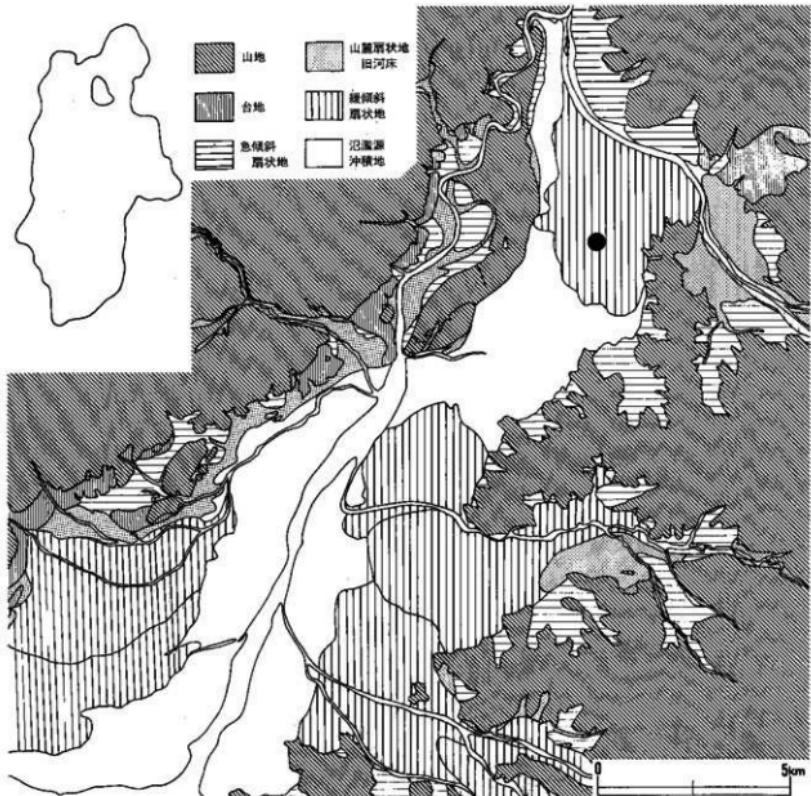
西条岩船遺跡は長野県中野市大字西条及び岩船地籍に位置する。中野市は中部高地最大の長野盆地の最北端、紡錘形の盆地が収束しようとする直前に位置する。

長野盆地の低地には東西を画する山地から流れ込

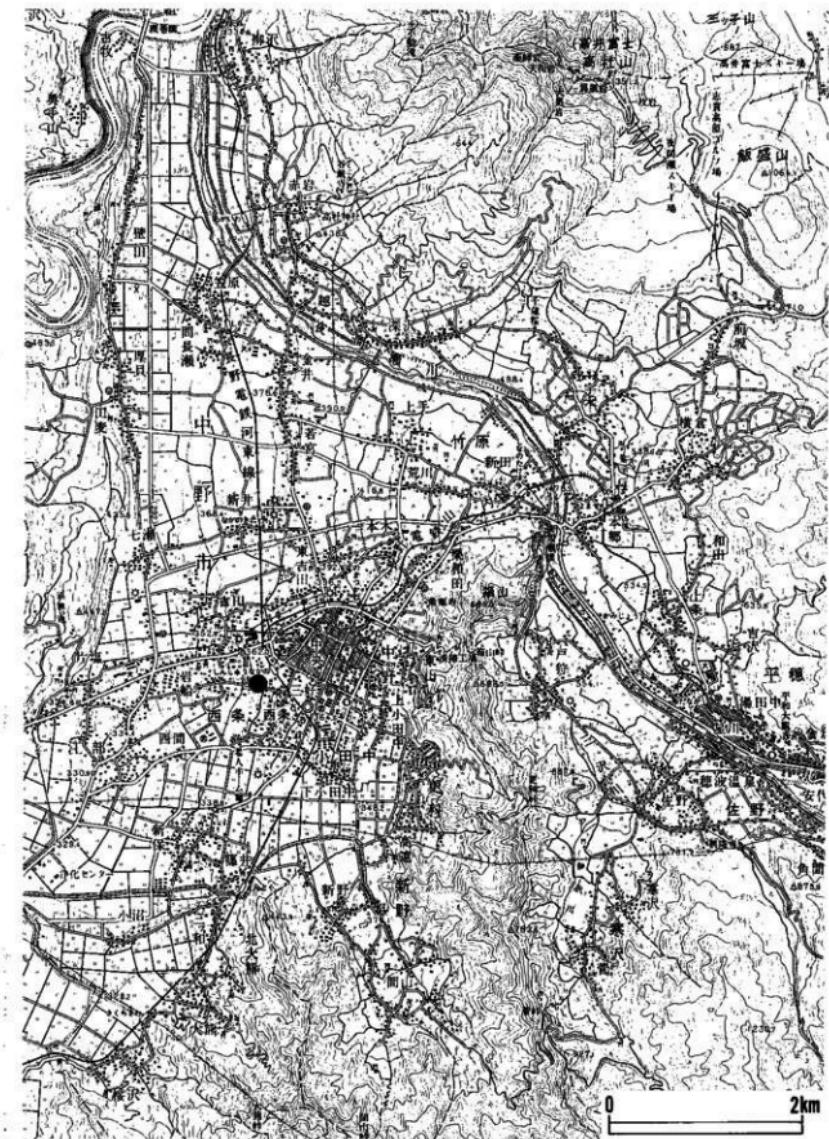
む河川によって、いくつかの典型的な扇状地地形が発達する。

中野市もそうした扇状地の一つである中野扇状地に立地している。中野市の地形は大きく東を画する山地、西を画する丘陵、及び市街地をのせる扇状地、扇状地の南に広がる低地からなる。いうまでもなく、市域の大半を占めるのは扇状地である。

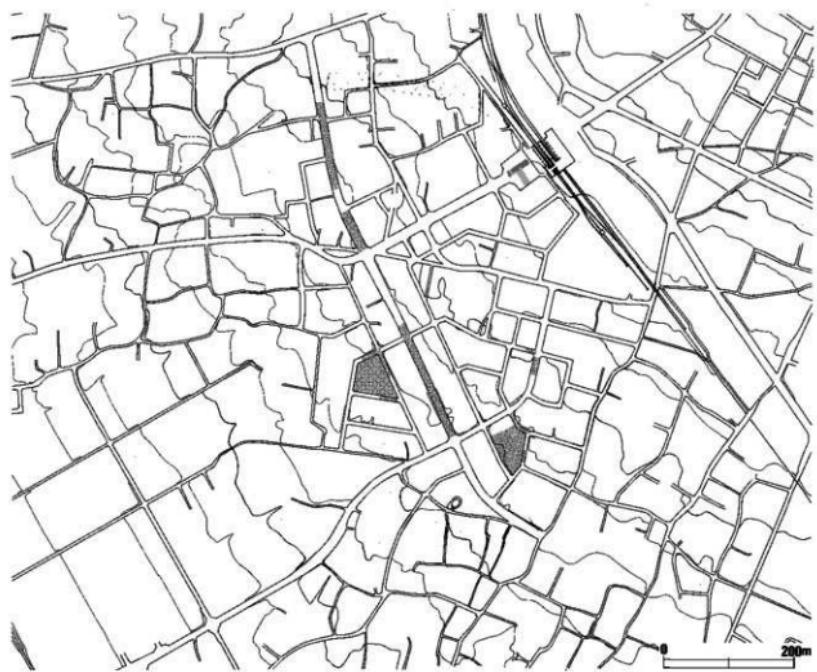
西条岩船遺跡は中野扇状地の南側先端近く、低地部から程遠くない地点に立地する。遺跡が立地する地点は等高線に沿って弧状に分布する扇状地の湧水



第1図 遺跡の位置（I）

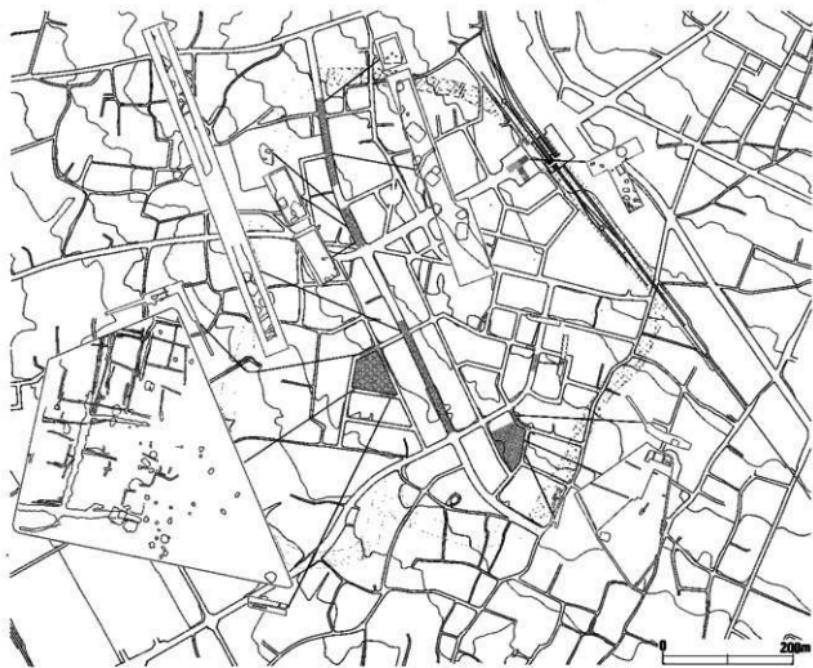


第2図 遺跡の位置(2)

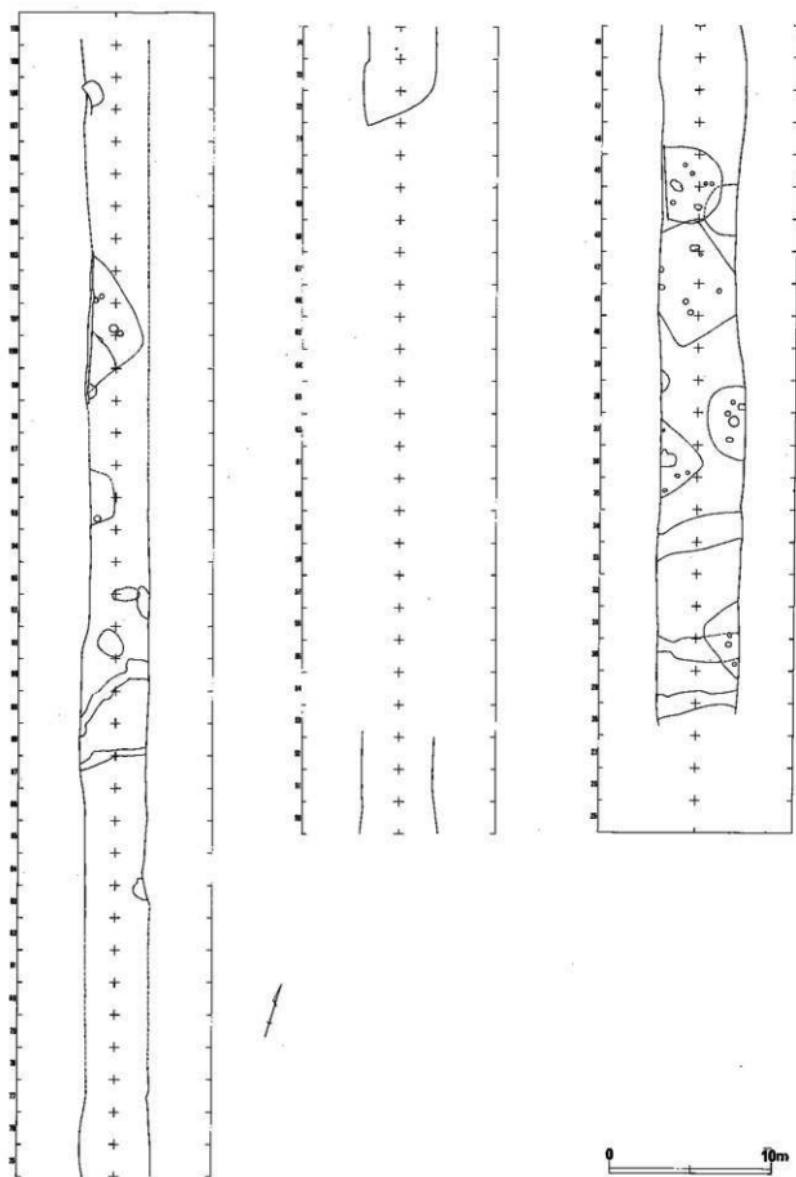


第3図 遺跡範囲

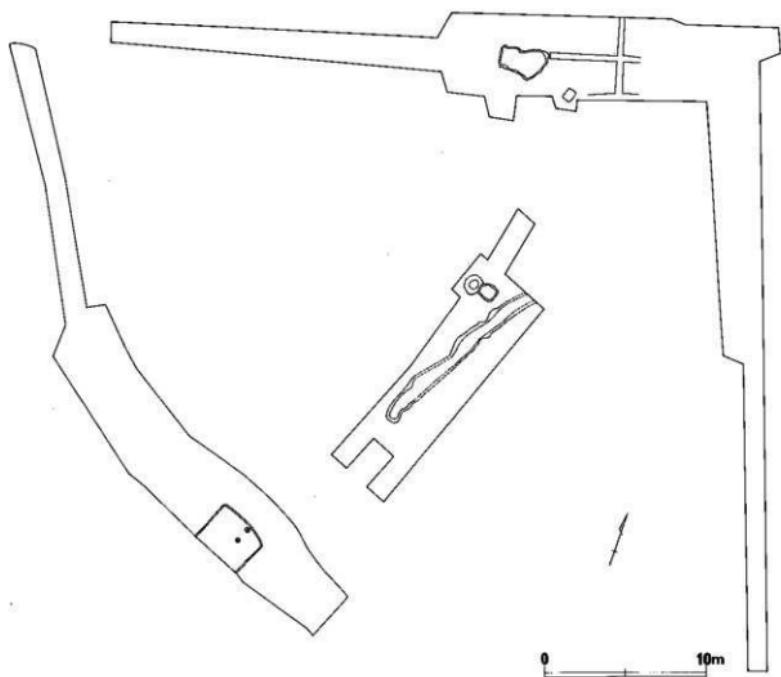
帶にあたる。



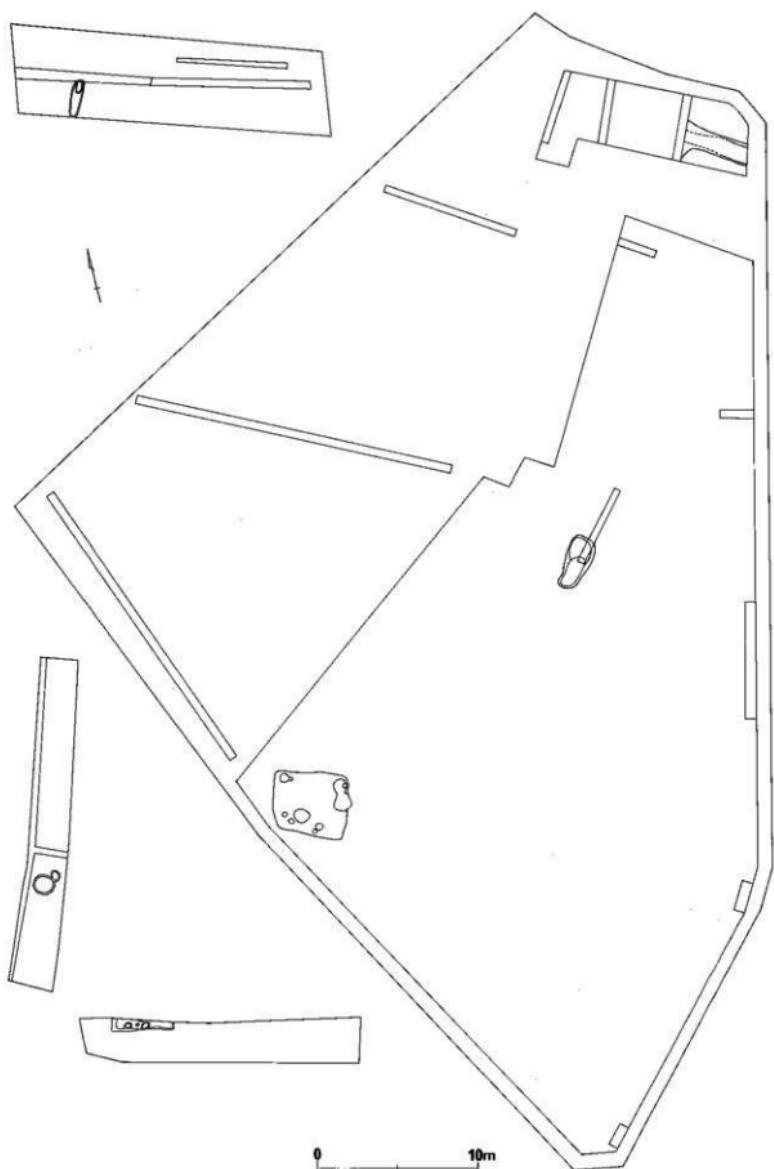
第4図 遺跡範囲とグリッド配置



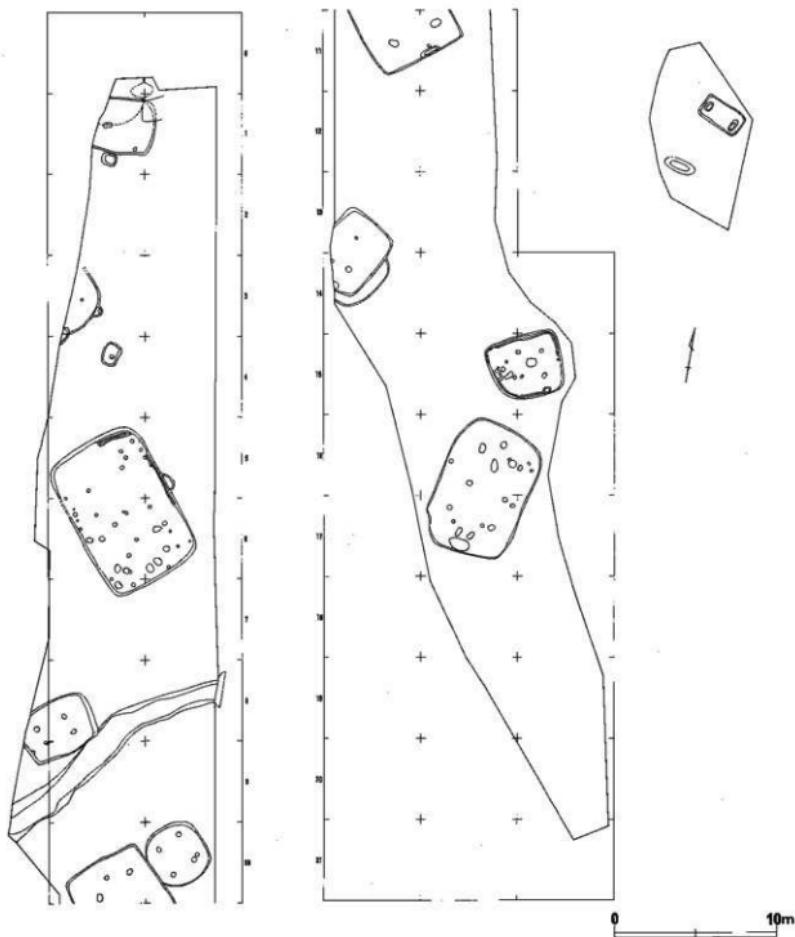
第5図 89年調査区(1)



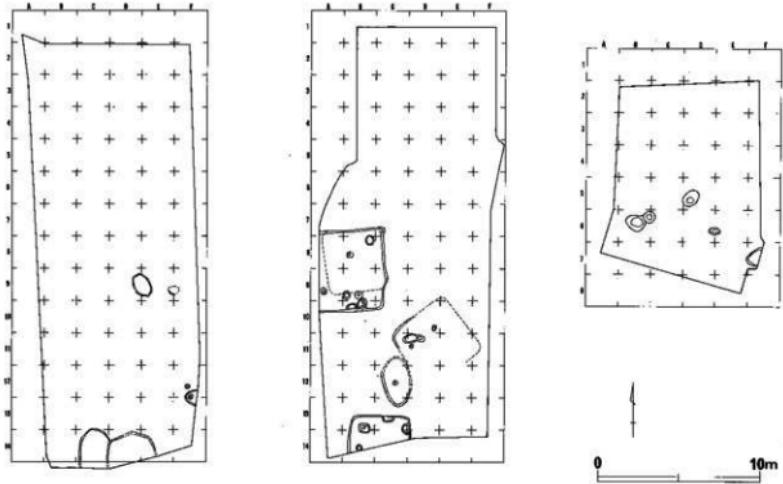
第6図 89年調査区（2）



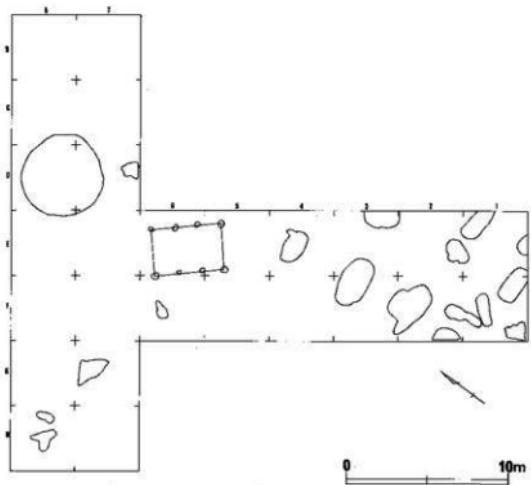
第7図 90年調査区



第8図 92年調査区



第9図 93年調査区



第10図 94年調査区

第2章 弥生時代遺構

第1節 中期の遺構

(1) 穫穴住居

第1号竪穴住居（92年トヨ2区 第14号住）

位置：92年度調査区トヨ2区、15グリッド

検出：検出当初は黄色土が落ち込みを覆うように認められ、何らかの擾乱と考えられた。落ち込みの平面プランを確認するために、検出面を掘り下げた。その結果、ほぼ方形の平面プランを確認し、住居と認定した。

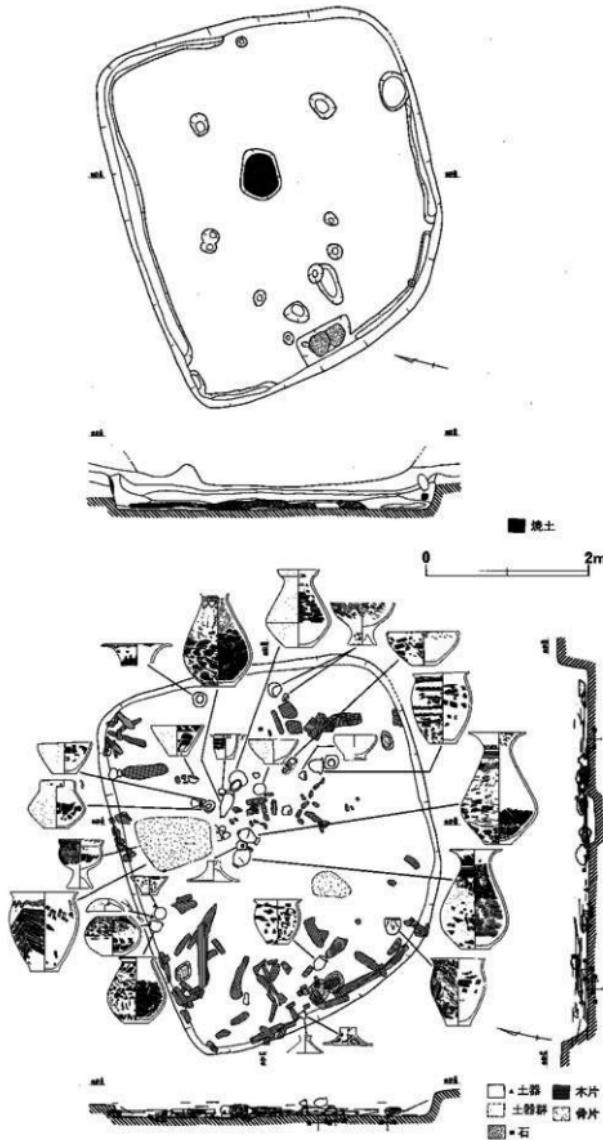
遺構掘り下げ途中で、大量の炭化した木材とともに焼土層が確認され、焼失家屋であることが判明した。

平面形態：北隅が円形の住居のように丸くなる $4.5 \times 3.5\text{m}$ の不整形である。周溝は北東隅を除く、全壁直下に認められるが、細い部分や太い部分、あるいはとぎれる部分があり安定しない。

東壁のほぼ中央部分では周溝の幅が広く成り、直径約30cmの川原石2個が並ぶように埋設されていた。

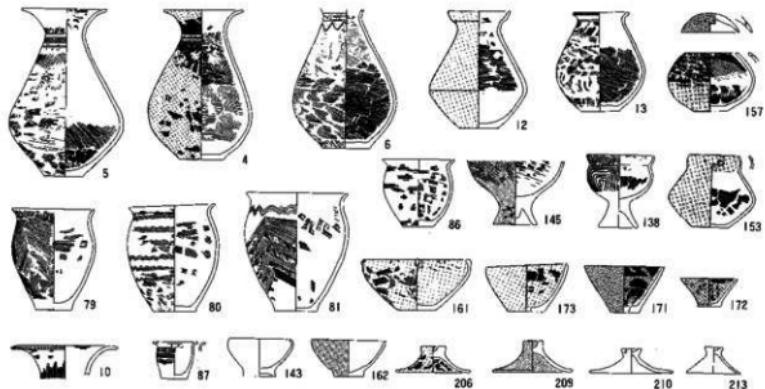
炉：直径約60cmの円形の地床
炉が住居のほぼ中央に検出されている。

柱穴の配置：合計11個の柱穴



第11図 第1号竪穴住居

が検出された。南壁際ほぼ中央からは171の壺形土器、6の壺形土器、157の球形状の土器が近接して出土している。



第12図 第1号竖穴住居出土土器

が検出されているが、いずれも直径が小さい。おそらく、4本の柱が方形に配置されたものであろう。遺物出土状況：24個体のほぼ完形になる土器が検出された。出土位置は焼土層準であり、床面に密着したり、床面からわずかに浮いた状況である。

焼失家屋であることから、それぞれの土器が住居の使用されていた往時の原位置を保っていた可能性が指摘できる。

第12図10の壺形土器頸部以上の大型剥片は口縁部を下位にして、逆位に出土した。土器をのせるための台に転用されていた可能性が高区、住居使用時の原位置を保っていた可能性が高い。また、完形にちかい土器は口縁部を上にしたり、転倒したような状態で出土している。こうしたことから本住居の遺物はほぼ住居使用時の原位置を保っていると考えてよいであろう。

平面分布をみると、壁際から出土しているものと、ほぼ中央、炉の付近から出土したものに、大きく分けることができよう。

東壁際では第12図10の壺形土器の頸部以上が逆位で、やや北に距離をおいて、145の台付カメ形土器

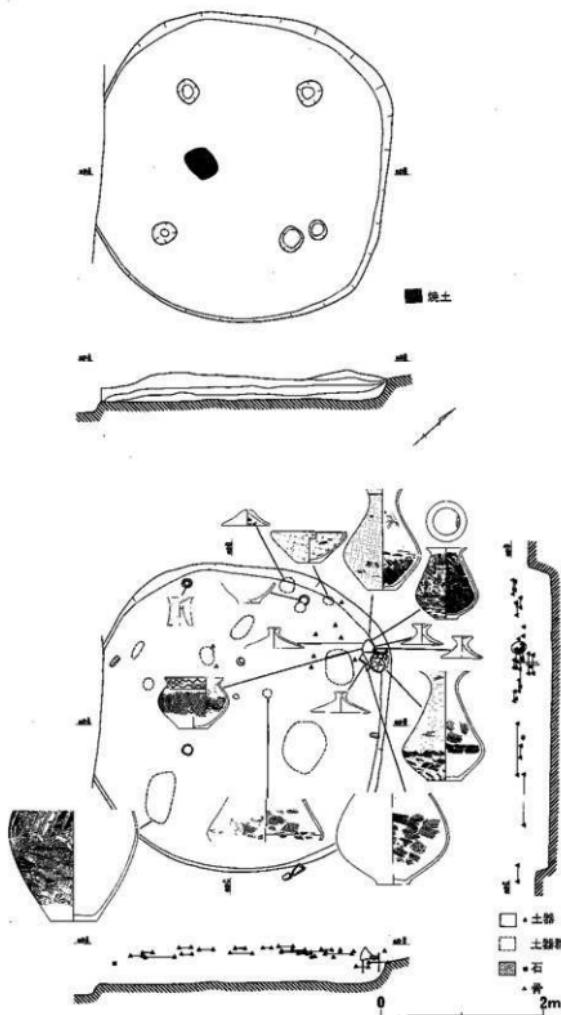
西壁際、ほぼ中央からは蓋形土器が2点、北コーナー付近からはカメ形土器79が出土した。

中央の炉付近から壺形土器4、5、6、12。カメ形土器80、81、87。鉢形土器162、163、167。壺形土器173が出土している。

遺物：壺形土器、カメ形土器、鉢形土器、蓋形土器が出土している。先述したようにいずれもほぼ完形にちかい状況で検出されている。

第12図4から6の素口縁の壺形土器は口縁部が大きく開き、最大径が胴下半部にあるがそれほど大きく張らず二、全体として細身な印象をうける。紋様は頸部に集約する。おそらく、壺形土器第4類に分類できよう。12は受口口縁の壺形土器で、頸部以下の器形は壺形土器第4類と同様である。13は無頸壺形土器、口唇部に網文、頸部に沈線が1本施紋される。

カメ形土器は頸部がくびれ、胴部最大径がほぼ中位にある。79や81はやや最大径が上位にあり、カメ形土器第6類への移行を示すのであろうか。紋様も頸部に波状紋、その下位に縦走羽状紋が施紋され、第6類の祖形とも考えることができる。



第13図 第2号整穴住居

第付カメ形土器138は典型的な
栗林式土器期のもの、145は胴上
半部を欠くが強い刷毛痕が残り、
栗林式土器とやや印象を異なる。
鉢形土器162、163、167はいづれ
も内湾するように立ち上がる器形
となる。167にはこぶ状突起と小
穴が認められる。

瓶形土器にはやや内湾するもの
と直線的に立ち上がるものの二者
がある。

備考：不思議なことではあるが、
どの土器にも著しい第二次焼成を
受けた様子は認められない。住居
の覆土内には明確に焼土が存在し
ており、焼土が土器を覆うように
堆積しているにも関わらずである。

家屋の上部構造のみが焼燃する
ために床面の土器は影響を受けな
いのであろうか。

平面分布で大きく分けた壁際と
中央の炉付近の二者のうち、後者
が本来的に住居の使用時とは関連
せずに、焼失後に住居内に持ち込
まれた可能性も考えられ、住居の
廃絶に伴う何らかの行為を示唆し
ているのであろうか。

第2号住居 (92トヨ2区10住)

位置：92年度調査区トヨ2区、グ
リッド

検出：他の遺構に切られる。検出
当初、平安時代の遺物が纏まりを
もって検出され、遺構の存在も考
えられたが、遺構は確認できなか
った。平安時代の遺構を確認する
ために検出面を下げたところ、検
出面から中期後半の土器が集中し



第14図 第2号竪穴住居出土土器

遺物出土状況：
検出面で確認した土器集中の範囲がほぼプランと一致するため、それらを本住居に伴う遺物として取り扱っ

て検出された。そのため、弥生時代の遺構が存在するものと考え、検出面での土器を遺物集中として取り上げ、さらに遺構検出を進めたところ。ほぼ円形のプランを確認した。検出された住居の掘りこみは深く、壁の立ち上がりは明確に確認された。

平面形態：直径約3.6mの方形にちかい円形である。周構は確認されなかった。壁は西側を別の遺構で切られていたが、他の部分は明確に確認できた。

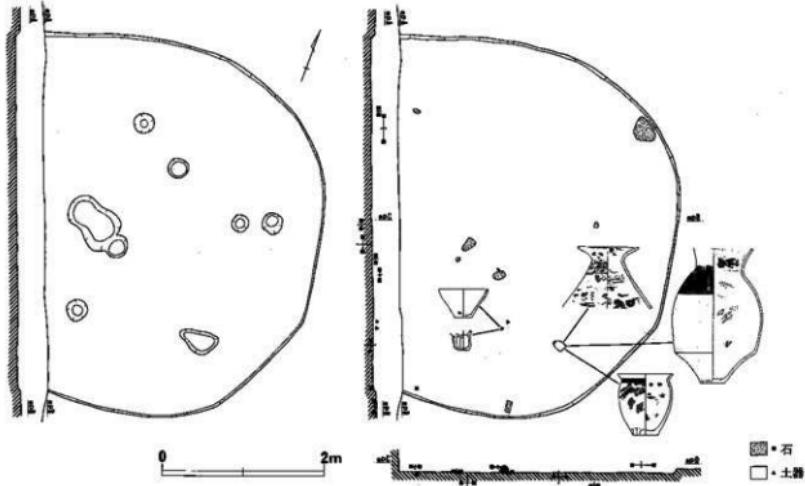
炉：住居の中央よりやや南に偏った部分に確認された。焼土の下位には皿状の落ち込み確認された。

柱の配置：合計5箇所に柱穴が検出されたが、一つは補助柱、あるいは建て替えのためと思われ、四本の主柱が方形に配置されたと考える。

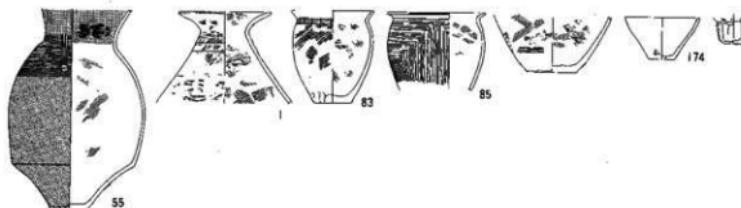
たが、問題が残る。

遺物は床面より高いレベルに、ほぼ水平に堆積している。又、住居の北隅部分には壺形土器3個体、鉢形土器、蓋形土器3個体がほぼ完形あるいは完形の状態で纏まって出土している。単に覆土内の出土状況とはやや異なり、床面から纏まって出土例に似ている。

遺物：壺形土器第14図7、8は両例とも口縁部を欠くが、最大径が調下半部にあり、器形全体としては壺形土器第4類に分類できる。15は頸部の内側に張り出しが付されている。器形的には無頸壺形土器にできよう。160は内湾する鉢形土器で赤色塗彩される。



第15図 第3号竪穴住居



第16図 第3号穴住居出土土器

ほぼ
中央に
3個の
柱穴が
切りあ
ったよ
うな不
整形な
落ち込

壺形土器211、212は口径が小さく、開きも小さい。

みが確認され、土器が検出されている。

第3号住居（89トヨ214住）（第15図）

位置：89年度調査トヨ2区

周溝は確認されていない。先述したように、壁の立ち上がりは10cmに満たない。

検出：弥生時代後期の床面を精査する段階で、床面の硬度の違いを確認し、そのプランを追求したところ、ほぼ円形となった。

炉：確認されていない。

実際に調査したところ、床面からの壁の立ち上がりは10cmに満たない状況であり、上部の大半を後期の住居によって壊されている。

柱穴の配置：合計7箇所に柱穴状の落ち込みが確認されているが、すべてを柱穴とすることはできないと思われる。全形を知り得ないこともあり、柱穴の配置は不明である。

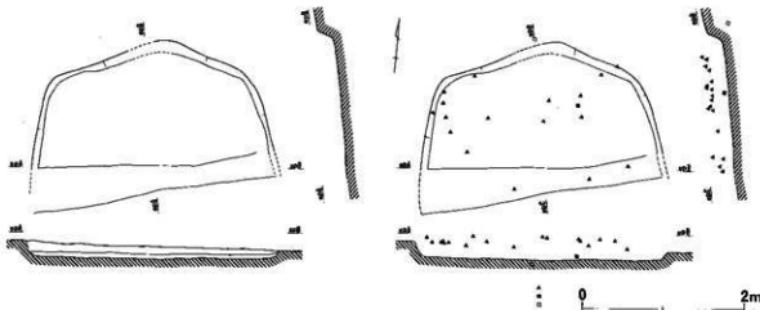
プランの形状も、弥生後期住居の床面の硬度の差異を頼りに検出を行っているために、やや明瞭さに欠くことは否めない。

遺物の出土状況：覆土が浅いため、遺物の出土量は少ない。第16図83のカメ形土器は南東コーナーちかくの不整形な柱穴状の落ち込みから、ほぼ完形の状態で出土している。また、85のカメ形土器は底部が書けているが、床面に潰れたような状況で検出した。

平面形態：約1/2が調査区外にあるため全形を知り得ない。円形とするにはやや円弧の曲がりがゆるい。小判形の形状になるのであろうか。確認できる壁間は約4.5mを計測する。

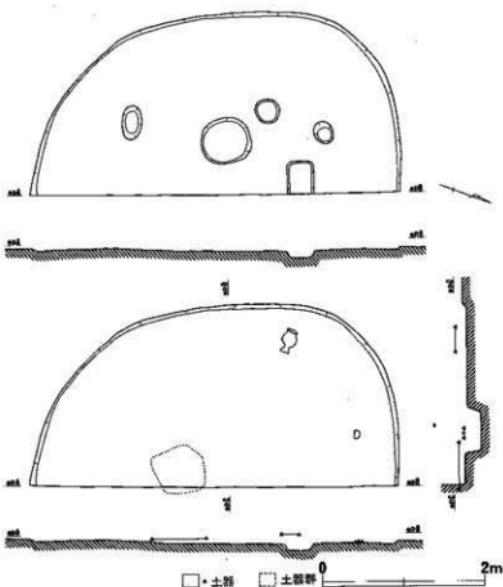
1の壺形土器はほぼ中央の不整形な土坑の中から、破片の状況で出土している。

なお、55の壺形土器は箱清水式のもので、明らかに本住居の他の土器と時期が異なる。上層に箱清水



第17図 第4号穴住居

中央に
3個の
柱穴が
切りあ
ったよ
うな不
整形な
落ち込



第18図 第5号竪穴住居

期の住居が検出されていることから、床面の土坑等が確認されず、本住居の覆土内に残存してしまったものであろう。

遺物：壺形土器、カメ形土器、瓶形土器、ミニチュア土器がある。

壺形土器第16図55は先述したように箱清水式土器であり、混入したものである。口縁部を欠くが、頸部と胴部の外形は明確な屈曲で連続し、胴部はしっかりと肩をもち、底部へとつながる。胴部と底部の接合部には明瞭な稜が形成される。外面及び口縁部の内側が赤色塗装されている。

1は栗林式土器の壺形土器であるが、胴部の開きが大きいく、希な器形である。口唇部に繩文が施紋され、頸部に繩文と二条の沈線による紋様が施紋される。

83は口縁部が「く」の字状に外反し、弱い肩をもって、底部にいたる、胴部には繩文が施紋され、頸

部に簾状紋がめぐる。器形的にはカメ形土器第4類に相当する。85も同様な器形があり、いわゆる「コ」の字重紋が施紋されるタイプである。

第4号住居 (93トヨ2区2住) (第17図)

位置：93年度調査区

検出：不整形の落ち込み出あり、その平面形態を明瞭に把握できなかった。そのため、トレンチを設定し、落ち込みを確認した。

確かに、落ち込みは確認でき、壁部分の立ち上がりが鋭角であったため、遺構と判断した。

しかし、壁の立ち上がりは低く明瞭ではなかった。
平面形態：1/2以上が調査区外のため全形を知り得ないが、1辺3mの方形か、短辺3mの長方形プランではないかと推測している。

炉：存在しなかった。

柱穴配置：柱穴は確認できない。

遺物出土状況：覆土中より、小数の小さな土器片が検出されたのみである。

備考：本遺構は一応、住居として説明したが、平面プランも明瞭ではない。また、掘りこみも浅い。柱穴も検出されていない。

こうしたことから、本遺構は住居の可能性は薄いと考えている。又、時期的にも弥生時代のものでない可能性もある。

第5号住居 (89年調査区トヨ1区、第18図)

位置：89年調査区トヨ1区

検出：検出面で炭化材が集中して検出され、焼失家屋ではないかと思われたため、急速、落ち込みのプランを精査した。

わずかに、不明瞭な円形プランを確認したが、すでに床面の直上の状態であり、明確に平面プランを

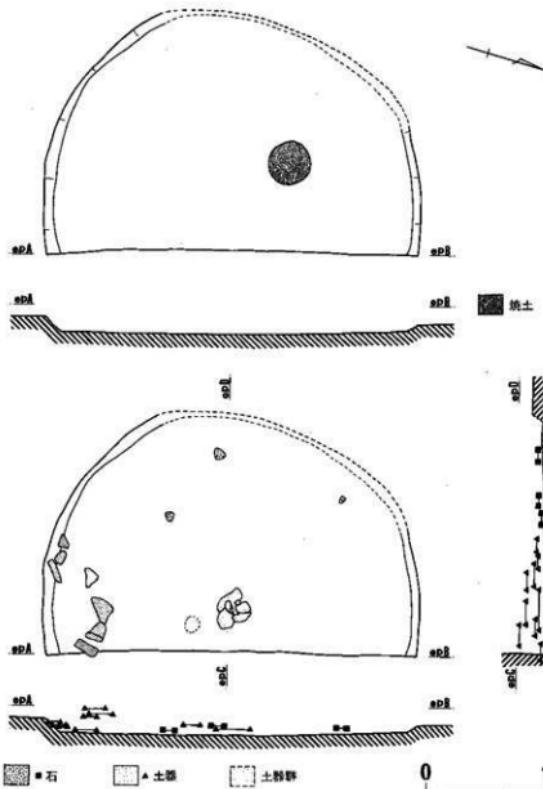
確認できなかった。

床面に付近には大量の小さな炭化片が散在していた。

一部に大型炭化材が認められた。

平面形態：1/2以上が調査区外にある。おそらく、直徑約4.5mの円形になるもと予測される。壁の立ち上がりは10cm未満であり、周溝は確認できなかった。

ほぼ中央に径約60cm、深さ20cmの土坑が確認された。



第19図 第6号竪穴住居

た。また、中央やや北側に短辺30cm、長辺40cm以上の長方形の土坑が検出されている。本住居に伴うものかどうか若干疑問が残る。

炉：確認されなかった。

柱穴の配置：柱穴状の落ち込みが合計3箇所に検出されているが、その配置は分からぬ。

遺物の出土状況：掘りこみが浅いためか、極端に遺物出土量は少ない。ほぼ中央に壺形土器の底部破片が、西壁側、中央よりやや北には完形の台付きカヌ形土器が検出された。いずれも床面よりやや浮いた状況であった。

遺物：壺形土器大型破片はもうろく、復元できなかった。また、台付きカヌ形土器は整理中の不手際から実測できなかった。

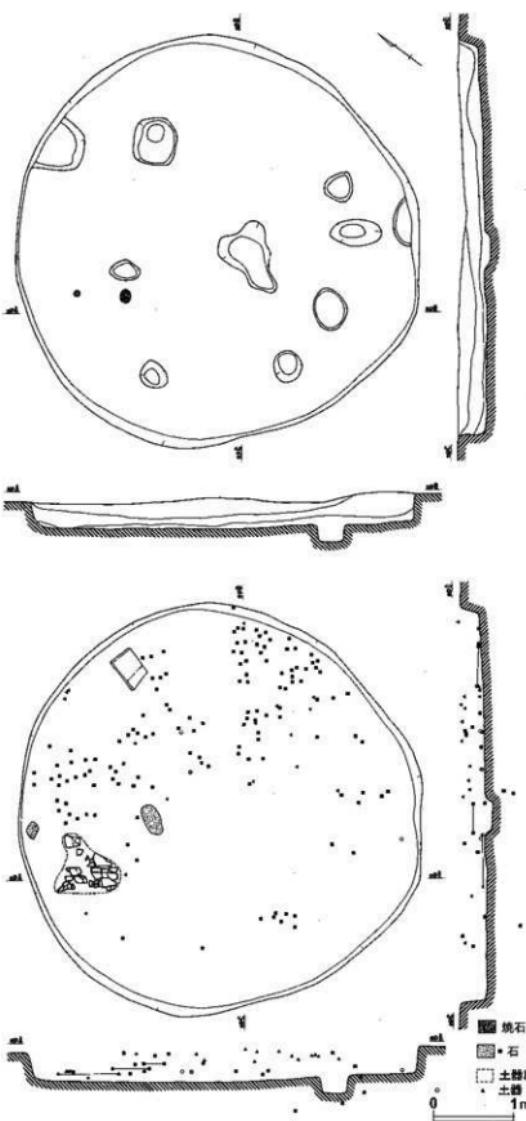
第6号住居（89トヨ1小竪穴、第19図）

位置：89年度調査トヨ1区

検出：1/2以上が調査区外のため全形を知り得ないが、直徑約3m弱の円形プランツの落ち込みとして検出した。平面形態：直徑約3m弱の円形出あるが、柱穴や周溝は検出されなかった。床には黄色の粘土が貼られて折り、中央やや北側に赤く粘土層が変質した部分が認められた。

遺物出土状況：土器は床面よりやや浮いた状況ではあるが、高杯形土器や中型、小型のカヌ形土器が検出された。

遺物：第82図186は高さ約33cm、口径約33cmの大きな高杯形土器である。杯部は縁をも



第20図 第7号竪穴住居

ち、大きく外反する。

脚部は長く底部で短く外反する。透かしはない。弥生後期に編年される。備考：この遺構を住居とするべきか否かは判断に迷う。概報では床を掘らずに、直接柱を建てた小さな家屋を想定し、一般住居とは異なる用途（祭礼、出産、葬式など）に用いられたのではないかと推測している（藤沢、千葉・1991）。

用途はともかくとして、このようなやや小型の家屋が弥生時代に存在するとすれば興味深い。今後の検討課題である。

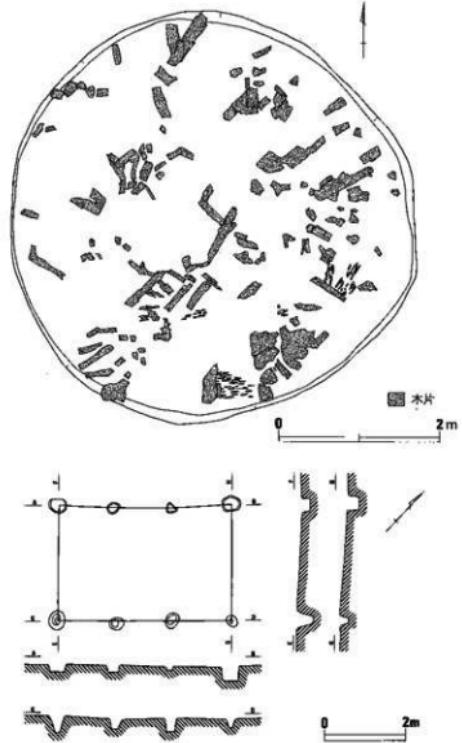
第7号住居（94第1号住居）

位置：1994年度調査区

検出：94年度の調査区では極端に困難な地区であり、本住居も検出面では黒色の中に落ち込んだものであったが、焼土粒子と円形につながった焼土から平面プランを確認した。また、検出面や黒色の覆土がベルト状を呈してほぼ円形に分布していた。

覆土中には焼土粒子やブロックが大量に含まれていたが、層状をなすことはなかった。また、焼土とともに、大量の炭化材が検出されている（第21図）。いずれも、床面からやや浮いた状態であった。茅状の植物（未同定）が方向をそろえて、約2から3cmに堆積したものが発見されている。屋根材あるいは床を覆っていたものではないかと考えている。

検出面での検出は困難であったが、検出面下位には黄色の粘土層が堆積しており、壁や床面の確認は比較的容易であった。



第21図 第1号掘立柱建物

平面形態：直径約5mの円形を呈する。検出面から
の掘りこみは約30cmと比較的深く、良好に検出する
ことができたが、床面は明確に確認できたが、柱穴
や炉はうまく検出することができなかった。周溝は
確認することができなかった。

柱穴の配置：床面にいくつかの柱穴状の落ち込みを
確認したが何れも断定することはできなかった。こ
うした柱穴の不明瞭な住居は栗林式土器の円形住居
には比較的多く見られる。一方、栗林式土器から吉
田式土器へと移行すると竪穴住居の平面形態も変化
すると同時に、柱穴の配置や炉が明確になるという

傾向がある。この理由ははっきりしないが
今後検討すべき課題である。

炉：ほぼ中央に不整形な土坑が検出されて
いる。丁度、炉の位置と考えられるが、焼
土などは確認できなかった。

遺物出土状況：小さな剝片が覆土内から、
溝遍なく出土している。北西部分に大型の
剝片が集中した部分があった。

また、住居の北側に30×30cmノ偏平な川
原石が検出された。川原石のレベルは床面
より浮いており、その下位が空洞になっ
ていた。

遺物：実測図を作成できるものはなかつた。
いずれも栗林式土器である。

(2) 掘立柱建物

第1号掘立柱建物（94第1号堀立柱建物・
第21図）

位置：94年度調査区

規模：1×3間、柱間

備考：94年度調査区第7号住居の南側に位
置する。狭い調査区ではあるが、周辺には
柱穴は認められない。土器が出土していな
いため、はっきりしないが栗林式土器出あ
う。

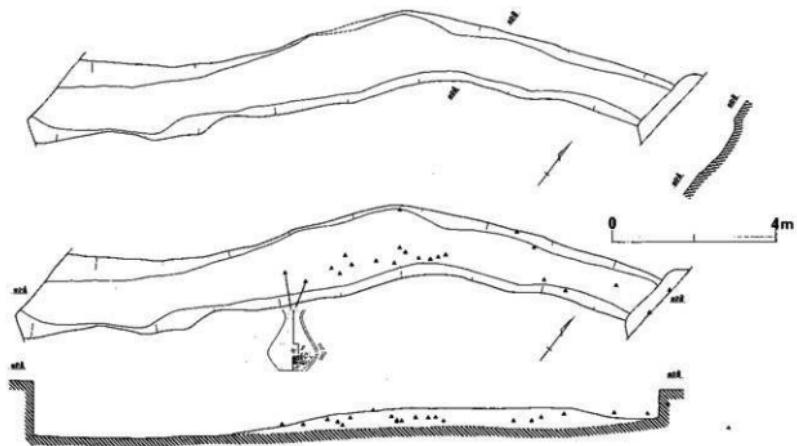
(3) 溝

第1号溝（92トヨ2区 SD1・第22図）

位置：92年度調査区トヨ2区。この調査区は南北に
のびる道路工事に伴うもので、幅約10mの狭い調
査区である。周囲には中期及び後期の竪穴住居が比
較的集中している。

検出：遺構検出面からの掘り込みが浅く、検出も困
難であった。溝は調査区を横切るように東西に延び
ており、検出できたのは調査区の幅でしかない。

遺物出土状況：溝の覆土から出土しているが、その



第22図

量は覆土が浅いせいもあって少ない。1点、実測可能な注口土器が出土している(第80図153)。全面赤色塗彩され、最大胴部径が胴下部にあり、口縁部を欠いているが頸部の傾きをみると大きく開く器形となるものとおもわれ、壺形土器第4類の段階に分類できようか。

第2節 弥生時代後期の遺構

(1) 穫穴住居

第8号竪穴住居(92トヨ2区3住・第23図)位置:
92年度調査区

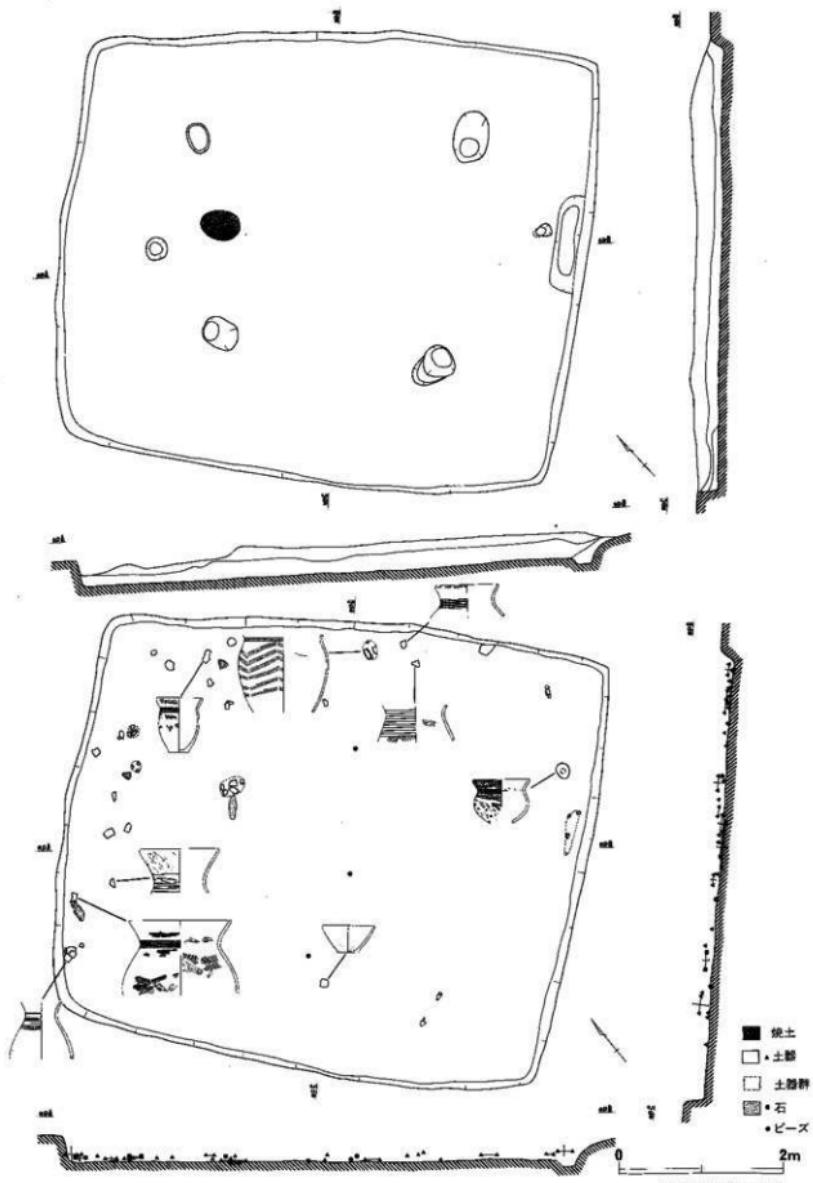
検出: 検出面は乾燥すると落ち込み層が同化して、しまうため平面プランの確認には時間要した。

平面形態: 6×6mの方形住居である。壁の立ち上がりは約30cmと比較的深く、明確に確認された。

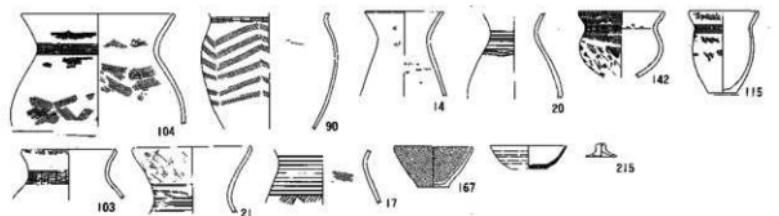
周溝: 検出されなかったが、北壁直下に幅約30cm、長さ約120cmの溝が検出された。

近くに小さな柱穴が存在する。栗林遺跡の調査例では同様の場所に柱穴が2個並んでいた例があり、本遺跡でも第16号竪穴住居に形態は異なるが土坑のが検出されたり、第1竪穴住居例では川原石が二つならべられていた。入り口に関連するなんらかの施設が想定される。

炉: 中央南側に偏って、柱穴の間に50×30cmの長円形の地床炉が検出されている。



第23図 第8号整穴住居



第24図 第8号住居出土土器

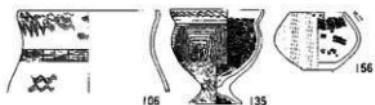
欠くが
頸部に
は沈線
がめぐ
らされ
る。壺
形土器
第7類
に相当

柱穴の配置：合計6箇所に柱穴が検出されているが、直徑の大きい柱穴がほぼ五角形に配置されている。
遺物出土状況：遺物は床面の直上部分に検出されている。

遺物：壺形土器、カメ形土器、鉢形土器がある。14の壺形土器は口縁の開きがゆるく、胴部も直線的な形態になるものと推測され特異な形態である。21の壺形土器は頸部に沈線紋がめぐらされ、口縁端部がつまんだように内湾する。17、20は口縁部と胴部を

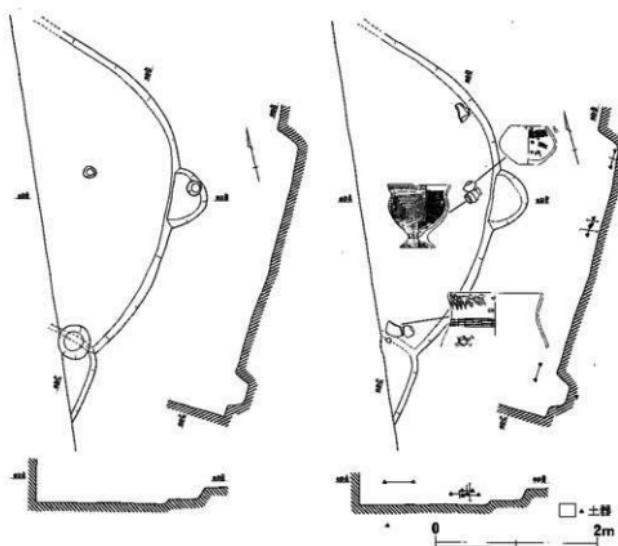
しようか。

カメ形土器は115を除いて、いずれも一部を欠いている。90はカメ形土器第6類、他は第7類に分類できようか。



第25図 第9号住居出土土器

なお、須恵器杯は混入で
ある。



第26図 第9号竪穴住居

第9号竪穴住居 (92トヨ)

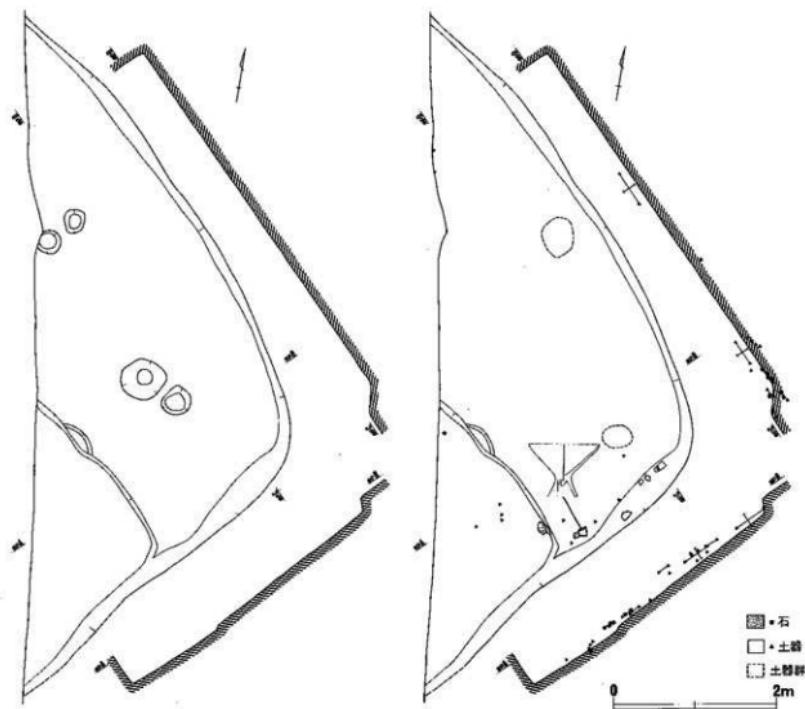
2区2住・第25図)

位置：92年調査区トヨ2区

検出：大部分が調査区の外側に存在し、二つの住居が切り合う。プランは明瞭に確認された。

平面形態：大部分が調査区の外側にあるため全形を知り得ないが、ほぼ方形を呈するものとおもわれる。

柱穴の配置：柱穴が二箇所から検出されているのみであり、その配置は不明である。



第27図 第10号竪穴住居

遺物の出土状況：カメ形土器2個体、球形の土器が検出されている。135と156は完形で隣接して検出されている。

第10号竪穴住居（89トヨ1区1住・第27図）

位置：89年度調査区トヨ1区

検出：大半が調査区の外側に広がる。当初、検出した落ち込みは1件の住居と考えて調査したが、床面を精査したところ、段差が認められたため断面を観察したところ、二つの住居の断面であることが判明した。

平面形態：大半が調査区の外側にあるが、両住居とも方形であると思われる。両住居とも周溝は認めら

れなかった。

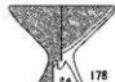
炉：検出されなかった。

柱穴の配置：柱穴は合計4ヶ確認されたが、その配置は不明。

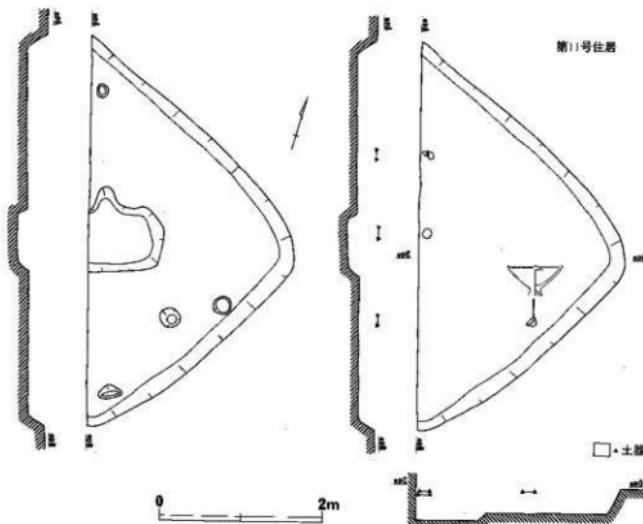
遺物出土状況：床面よりやや浮いたレベル及び床面直上に検出されているが、特に住居の使用時に関連するものとは思われない。

遺物：高杯形土器が1点図示した。

脚部を欠く、杯部が直線的に立ち上がり、口縁端部がやや内湾する器形となる。赤色塗装される。



第28図
第10号竪穴住居
出土土器



第29図 第11号整穴住居

第11号住居 (89トヨ1区5住・第29図)

位置：89年度調査、第1区。

検出：比較的容易に落ち込みが確認できた。検出面からの影り込みも深く、壁は良好に検出できた。

平面形態：大半が調査区外にあるため全形を知りえないが、方形ないし長方形のプランをなすものと思われる。壁の立ち上がりは良好であった。周溝は認められない。

ほぼ中央に幅約85cm、長さ90cm以上、深さ約10cmの長方形の落ち込みが検出されている。

炉：確認されなかった。長方形の落ち込み部分に炉が想定される。

柱穴の配置：五カ所に柱穴状の落ち込みが検出されたがいずれも小さなものであり、柱穴とは断定できない。

遺物出土状況：遺物の出土は極端に少ない。出土した遺物はいずれも確認面レベルであり、床面より高く浮いている。

第11号住居

第30図
第11号整穴住居
出土土器

造物：高杯形土器1例が発見された。脚部を欠く、杯部は直線的に立ち上がり、口縁端部に四単位の小突起がつけられる。

第12号住居 (92トヨ
2区5住・第31図)

位置：92年度調査、
2区

検出：検出面では平安時代の遺物が比較的まとまって認めら

れ、平安時代の遺構の存在が予想されたため、検出面を精査したところ、ほぼ方形の落ち込みを確認した。また、北東隅部分にはほぼ長方形の落ち込みが認められた。検出した方形の落ち込みを掘り下げたところ、予想した平安時代のものではなく、弥生時代の住居であることが明らかになった。

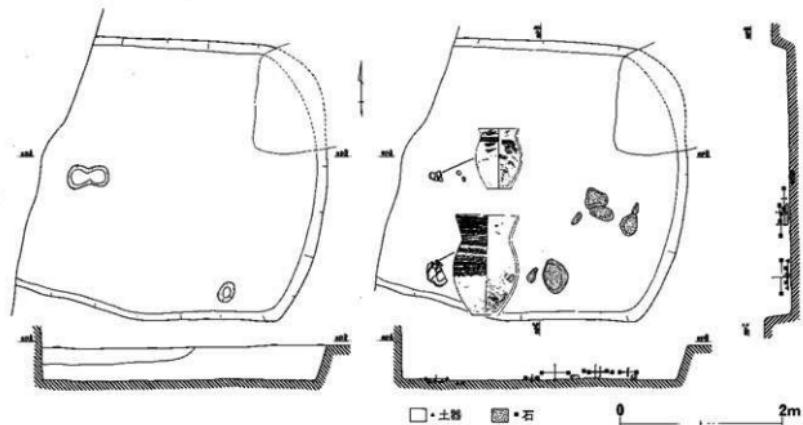
平面形態：調査区外に遺構が広がるため、全形は明らかでないが、短辺3.5m、長辺5m以上の長方形になるものと思われる。検出面からの堀り込みはcmと深く、壁の立ち上がりは明瞭に把握できたが、周溝は認められない。

炉：確認できなかった。

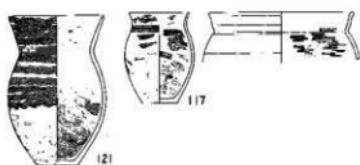
柱穴の配置：二カ所に柱穴状の落ち込みを確認したが、柱穴であるかどうかが判然としない。

遺物出土状況：覆土中には小さな土器片が認められた

が量は少ない。床面直上よりやや浮いて、121、117の土器が出土した。また、ほぼ同レベルに河原石が



第31図 第12号竪穴住居



第32図 第12号竪穴住居出土土器

認められた。また、覆土から検出されたと注記される土器は上面の平安時代の遺構に伴うものが混入したためでろう。

遺物：變形土器2個体を図示した。117は口縁部は短く、やや直立気味に外反し、頸部のくびれは弱く、最大径は胴部のほぼ中位にある。頸部に簾状紋が巡り、下位に波状紋が背紋される。

121は口縁部がやや長く、直立気味に立ち上がり、頸部のくびれは弱い。最大径は胴部中位にある。口縁部には波状紋、頸部には簾状紋、胴部には波状紋が施紋される。

117は口縁部が直立気味になるなど、器形全体としては弥生中期的なあり方から脱却し、箱清水式への過渡的な様相をみせる。121はすでに口縁部が長くなり、いわゆる箱清水式の變形土器に移行していく

が、最大径が胴部中位にあり、全体として細身な感じを受ける。

第13住（92トヨ2区 住・第33図）

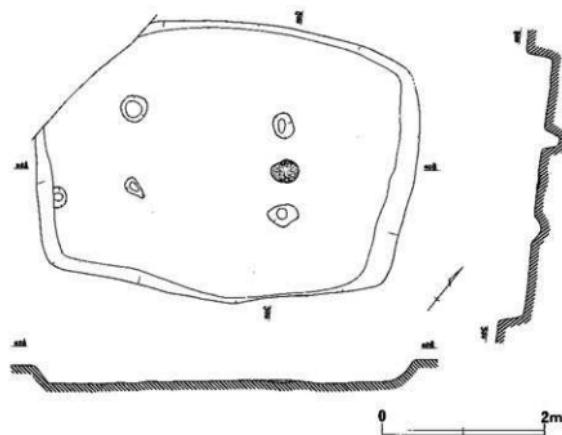
位置：92年度調査区。

検出：弥生時代中期の第1号溝に隣接して検出され、住居の北東部が調査区外にある。検出面での遺構確認は比較的容易であった。検出面からの堀り込みも比較的深く、壁の立ち上がりも明確に把握できた。平面形態： $4.8 \times 3.6\text{m}$ の長方形を呈し、やや小さめである。壁の立上りは明瞭に確認にできたが、周溝は確認できない。

炉：中央北よりの柱穴間に $30 \times 25\text{cm}$ の地床炉が検出されている。焼土の下位には皿状の落ち込みが確認された。

柱の配置：合計5個所に柱穴が検出されている。四ヶの柱穴はほぼ中央に四角形に配置され、主柱穴を形成している。

遺物の出土状況：小さな土器片は覆土内から万遍なく出土している。やや大型の土器片が床面よりやや浮いた状況検出されている。また、北西隅には数個の川原石が集中していた。



第14号竪穴住居 (92トヨ2区)

8住・第35図)

位置: 92年調査、第2区。

検出: 約10×6mの大きな落ち込みであったため、複数の住居の切り合ったものとも考えたが、精査した結果1軒の竪穴住居と判明した。

平面形態: 約9.5×6.3mの隅丸長方形である。東壁のほぼ中央に径約120cmの半月形の土坑状の落ち込みが確認されている。土坑と住居の切合い関係の可能性もあるが、確認段階ではそうした傾向は認められず、本住居と一体化したものと考えられる。

検出面からの掘込みは深いところで30cm、浅いところでも20cmを測り、立上がりを明瞭に把握できた。周溝は北壁および東壁の一部にわずかに検出されたことにとどまる。

また、焼土の堆積が四個所に確認されている。住居の中央からやや北側に偏った部分に120×80cmの大きなものと、60×40cmのものが確認された。

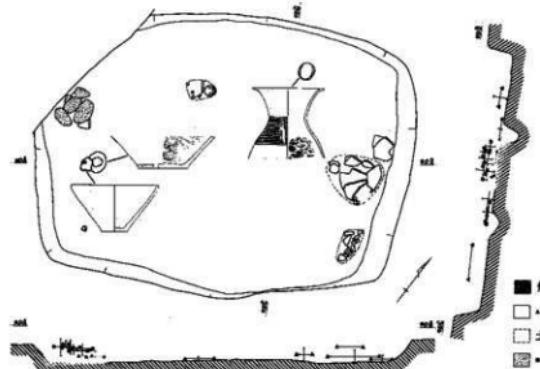
特に大きな焼土は厚く堆積している。

これらは炉とは異なると同時に、焼失家屋に伴う焼土ともことなると判断される。

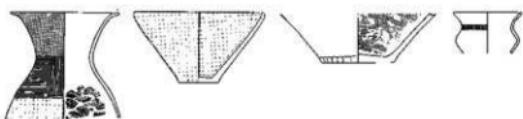
実測可能な土器は焼土のある北側に偏って出土しており、こうした遺物の出土状況と関係する可能性もある。

炉: 確認できなかった。

柱穴の配置: 床面には多くの柱穴状の落ち込みが

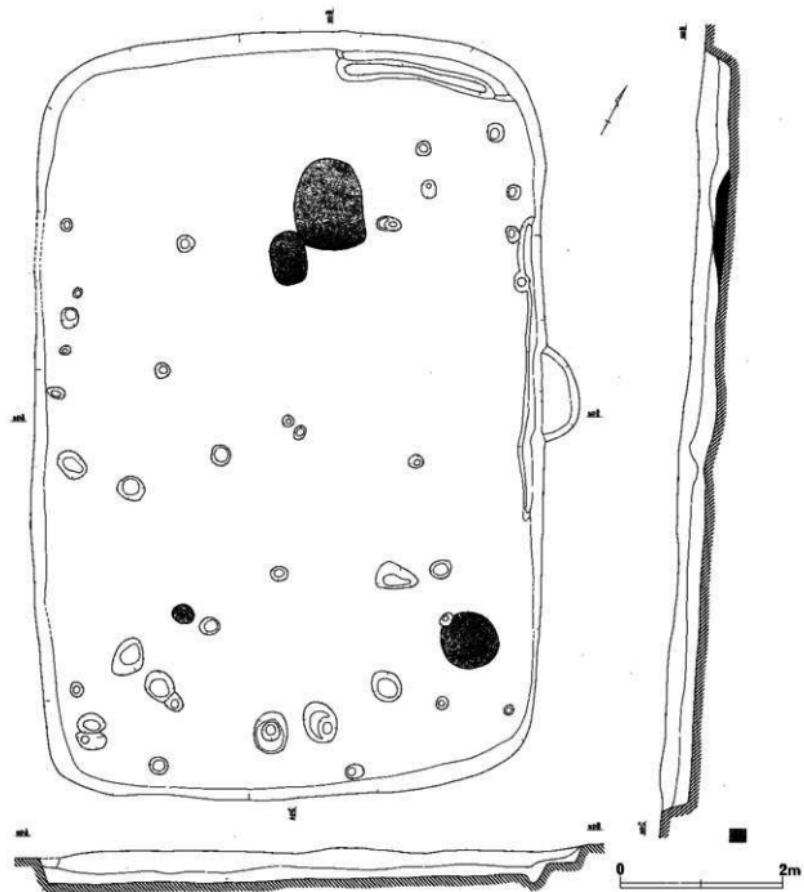


第33図 第13号竪穴住居



第34図 第13号竪穴住居出土土器

図69は壺形土器の頸部以上であるが、床面から出土しており、土器の固定台として利用されていたものかも知れない。



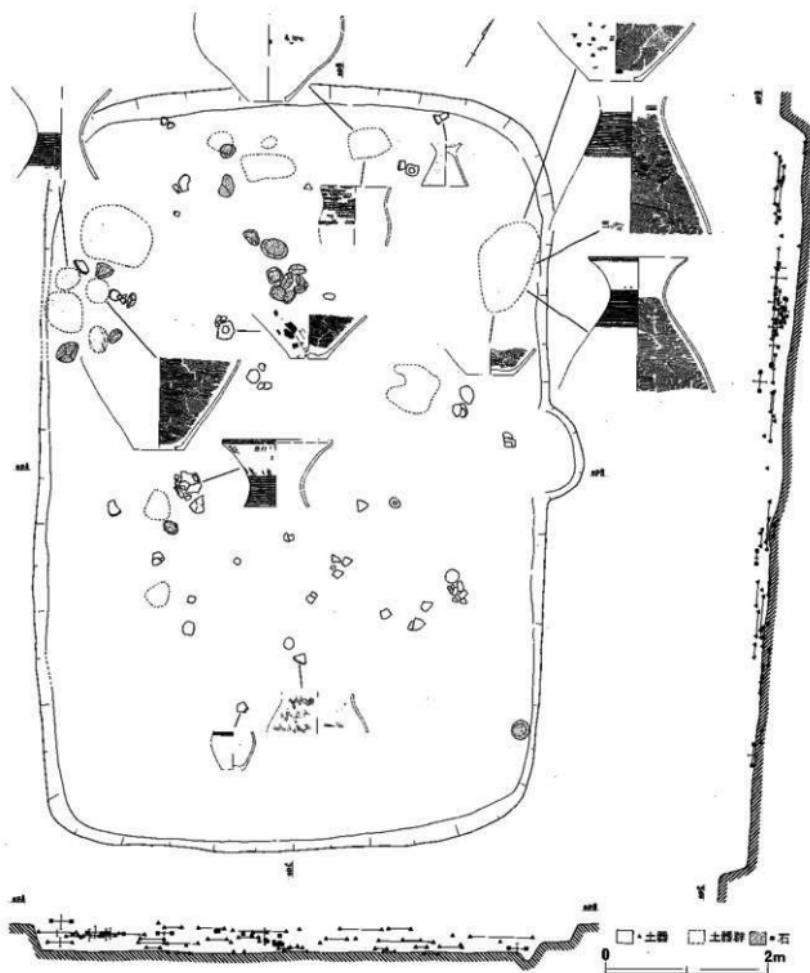
第35図 第14号竪穴住居

確認されているが、すべてが柱穴とは考えられない。木根などによる擾乱もあると思われる。特に、径の大きな柱穴が一定の形に配置された傾向も伺えない。

一方、南壁のはば中央あたり、壁より約70cmほど離れた位置に直径約40cmの大きな柱穴状の落ち込みが2個対になって検出され、注目される。

こうした壁際に並ぶ二つの柱穴状の落ち込みは平成8年度調査の栗林遺跡出土の当該期の竪穴住居にも認められ、それらに共通する何らかの施設、入り口に関連する施設の痕跡ではないかと考えている。

遺物出土状況：遺物の分布は北側に偏る傾向がある。特に、実測可能な大型破片は北側に集中する。出土



第36図 第14号竪穴住居

レベルはいずれも床面より浮いた覆土中であるが、南北エレベーションで出土状況をみると、出土レベルは北側ほど高く南側ほど低い傾向があることが読み取れる。一方、東西方向のエレベーションではそ

の分布はほぼ均一である。

こうした遺物の出土状況から、本住居出土の土器は北から流入したか、あるいは投げ込まれた(?)状況を示しているものと推測できるのではないだろ

のであると考
える。一方、
46はこ
うした
器形よ
りも頭
部が細
い独特
の形状
をなし
ている。
類例と
して、
第71図
53をあ
げるこ
とがで
きよう。

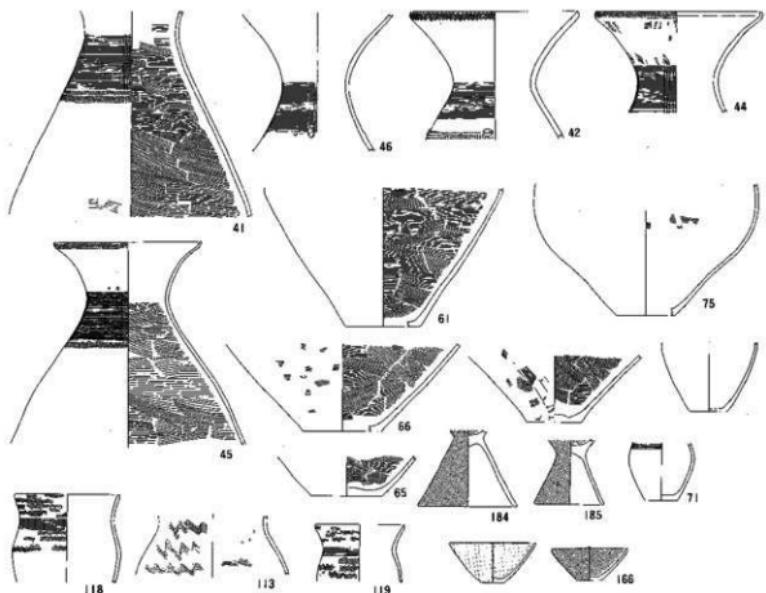
また、

75例は胴部最大径が下半部にあり、明瞭な棱を持たないがわずかに内側に屈曲する傾向をみせる。

文様は口縁端部及び頭部に認められる。口縁端部は波状紋が、頭部には横描直線紋あるいは横描直線紋と波状紋が組み合わされて施文される。ボタン状突起、横描直線紋を縦に区切る横描直線紋や竪描紋が施文される。壺形土器第8類に分類する。

壺形土器も全形を知りうるものがない。118と119はほぼ同様な器形である。口縁部は長く立ち気味に開き、頭部のくびれは緩い。胴部の最大径は中位にあり、全体として細味な印象を受ける。113は口縁部と胴下部を欠いているためその全形を知りえないと、胴部が大きく張っている。おそらく、第77図110例のように、口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、胴上半部が大きく膨らみ、わずかな肩を有する器形になると思われる。

備考：本住居は約9.5×6.3mの大きな長方形の平面



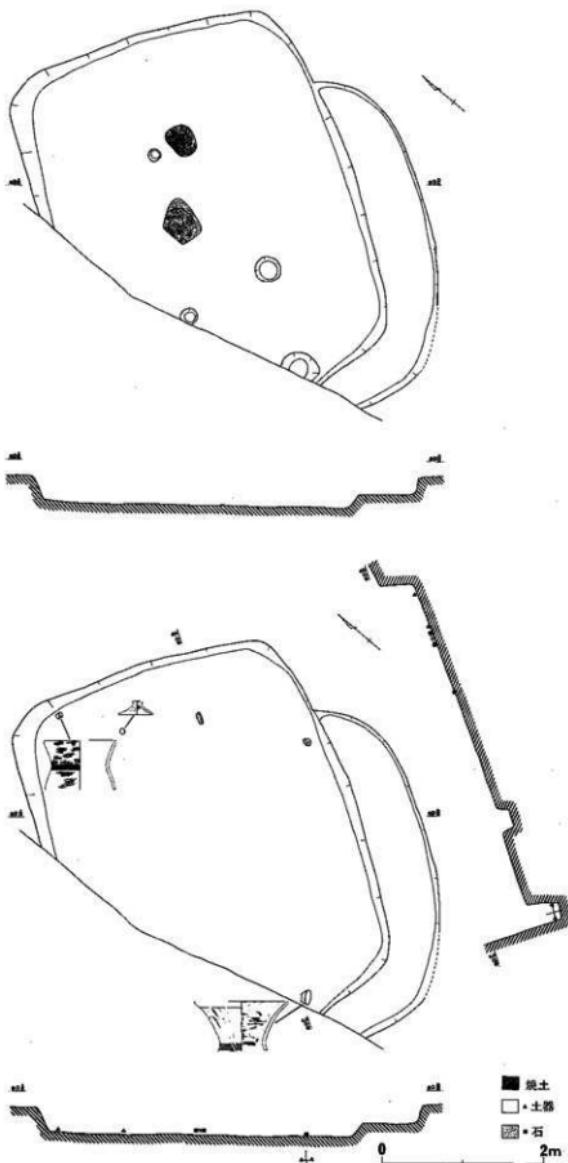
第37図 第14号竪穴住居出土土器

うか。

遺物：壺形土器、菱形土器、高杯形土器、鉢形土器
が知られる。

壺形土器には完形になるものはないが、口縁部、胴部上半部及び下半部が知られる。これは頗りに全体の器形を復元すると次のような特徴的な器形となる。

口縁部は漏斗状に開き、いわゆる箱清水式土器のそれと比較するとやや立ち気味である。また、口縁端部には指で摘んだような独特の内湾が認められる。頭部のくびれは緩く、直線的に胴部上半部の外形に連なる。胴部上半部が独特の膨らみをもち、わずかに肩をもつ箱清水式の壺形土器とは異なる。第37図61例のように胴下半部は内側に屈曲することなく直線的であり、その高さも高い。最大胴部径は胴部の中位ないしやや下側になると考えられ、強い屈曲は認められない。41、42、44、45、はこうした器形のも



第38図 第15号竪穴住居

プランをもっている。中期後半栗林式期の円形の住居と規模、形態とも大きく異なっている。栗林期の円形プランが突然に大きな長方形プランに移行したのではないことは第1号竪穴住居例などから明らかであるが、こうした住居形態の変化をどのように解釈すべきであろうか。一つの住居に住む人数が増加しているのだろうか。それとも、竪穴住居の構造が変化したのであろうか。中期後半から後期への移行の意味を考えるうえでこの段階の住居形態の変化は重要な変化と考えたい。

第15号竪穴住居 (92トヨ2区11、12住・第38図)

位置：92年度調、第2区

検出：プラン検出段階で、方形の住居と円形の住居の切り合いで、方形の住居が新しいことが確認できた。

両住居とも一部は調査区外にあり、全体を調査していない。

平面形態：方形の住居は $3.6 \times 4.2\text{m}$ を計測し、第14号住居と比較すれば小型である。

円形の住居は径約4.2mほどのやや方形に近い円形になるものと思われる。

検出面から掘込みは約50cmと比較的深く、壁は良好に検出されたが、周溝や柱穴は確認できなかった。



第39図 第15号竪穴住居出土土器

遺物出土状況：遺物の出土量は少ない。床面あるいは直上に壺形土器、甕形土器、蓋形土器が検出された。第39図43は壺形土器の頸部以上の大型破片であるが床面に密着しており、土器の固定台として転用された可能性がある。円形の住居から遺物は出土しなかった。

遺物：壺形土器43は頸部以下を欠き全形を知りえないが、漏斗状に外反する口縁部は壺形土器第8類の特徴を良く備えている。口縁部内面に赤色塗彩され、頸部には櫛描直線紋が施文されている。

甕形土器120は口縁部が長く直立気味に立ち上がり、頸部が緩くくびれ、細身的印象をうける。口縁端部には指で摘んだような内湾は認められない。口縁部には波状紋、頸部には簾状紋、胴部には波状紋が施文されている。甕形土器第1類に分類できよう。備考：本住居は後期前葉、第14号竪穴住居とはほぼ同じ段階に編年されると考えている。先述したように、第14号竪穴住居は大きな長方形プランと比較すれば、本住居はほぼ半分程度の規模しかない。同様な例に第13号竪穴住居をあげることができる。

第14号、13号、15号はほぼ同時期のものと考えられ、大きな竪穴住居と小型の住居の二者がある可能性を示している。第14号住居例に見られる大規模化、そして小型と大型住居への分化は後期前葉のあり方を考えるうえで重要であろう。

第16号竪穴住居（92トヨ2区12住・第40図）

位置：92年度調査、第2区

検出：検出面で比較的まとまった状態で遺物が出土し、周辺に落ち込みが確認されたが、検出面から彫り込みが浅いためか、平面プランの形状は不明瞭であった。

平面形態：8×5.5mの長方形を呈する。壁の立ち

上がりが明確に把握できなかったため、その形が若干不整形になっている。比較的状況の良かった北側部分のあり方を考慮すれば、実際は整った隅丸長方形であったことが理解される。

床面は明確に確認できず、小さな凹凸が認められる。また、北にかたよって円形の住居の痕跡が認められたが、明確に確認できなかった。場合によっては円形の住居が長方形の住居に改築された、あるいは合併していた可能性がある。周溝は確認されなかった。

南壁中央の壁際に120×60cmの不整長円形の土坑と一対の柱穴状の落ち込みが確認されている。

壁際の土坑の類例として、第1号竪穴住居の河原石が二つ埋設された例、第8号竪穴住居の太い周溝のような落ち込みをあげることができよう。

一方、壁際の対になった柱穴状の落ち込みは第14号竪穴住居、あるいは平成8年度調査の栗林遺跡に認められる。

しかしながら、本住居のように土坑と対になった柱穴状の落ち込み例はない。対になった柱穴状の落ち込みは入り口に関連する施設の痕跡と推測したが、こうした土坑もそれに関連する可能性があろう。

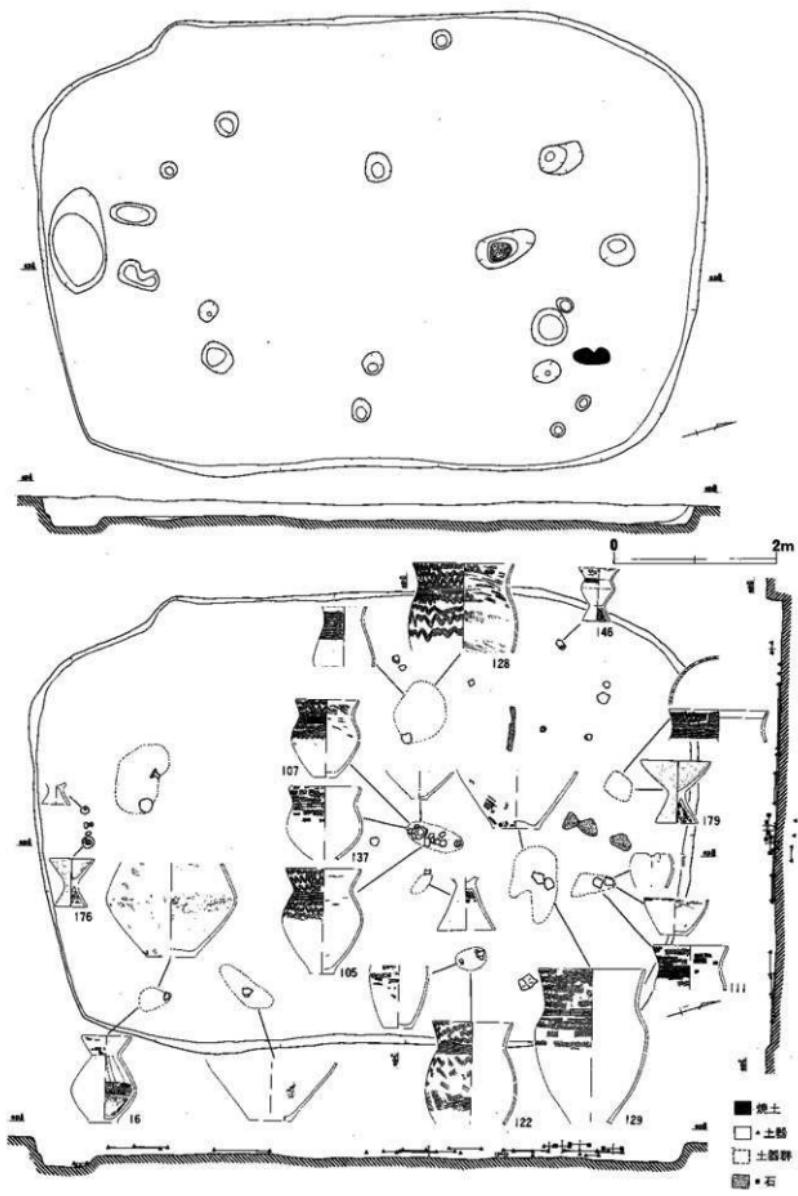
炉：中央から北に偏った地点に炉が確認されている。焼土の下位には90×30cmの細長い落ち込みが認められた。

柱穴の配置：床面にはいくつかの柱穴状の落ち込みが確認されているが、木の根などの攪乱も含まれていると考えている。北側に三角形に配置されたと思われる柱穴があり、これを基本に考えると主柱が南壁側を底辺とした五角形に配置されていたと考えらよう。

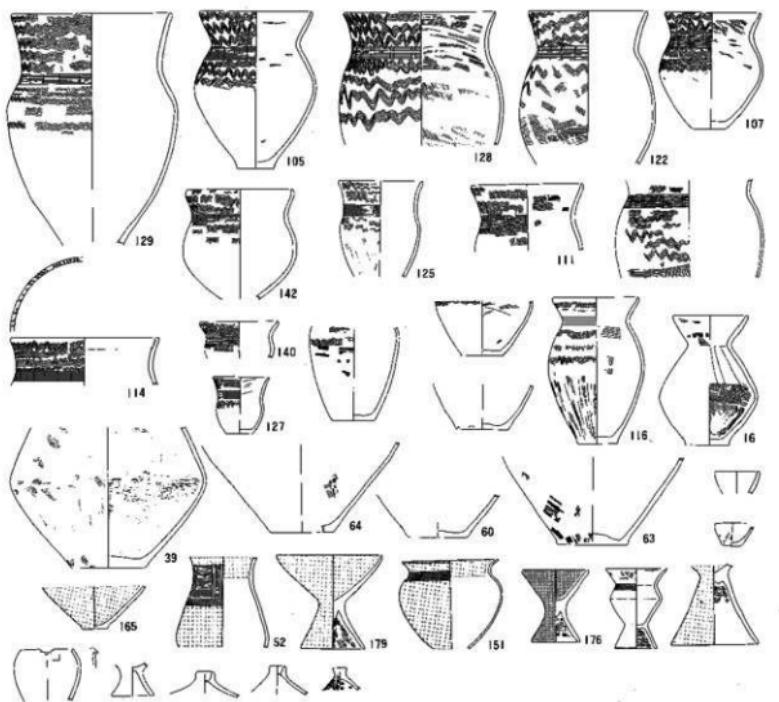
また、こうした柱の配置も南壁の対になった柱穴状の落ち込みや土坑が入り口に関係する遺構であることを示唆している。

遺物出土状況：すでに遺構検出段階から遺物は出土し、覆土中から多くの遺物が出土した。第40図に図示したのは大型破片やまとまって出土したもので、すべての遺物の出土地点は図示していない。

図示した遺物は床面上あるいは床面上の遺物で



第40図 第16号竪穴住居



第41図 第16号竪穴住居出土土器

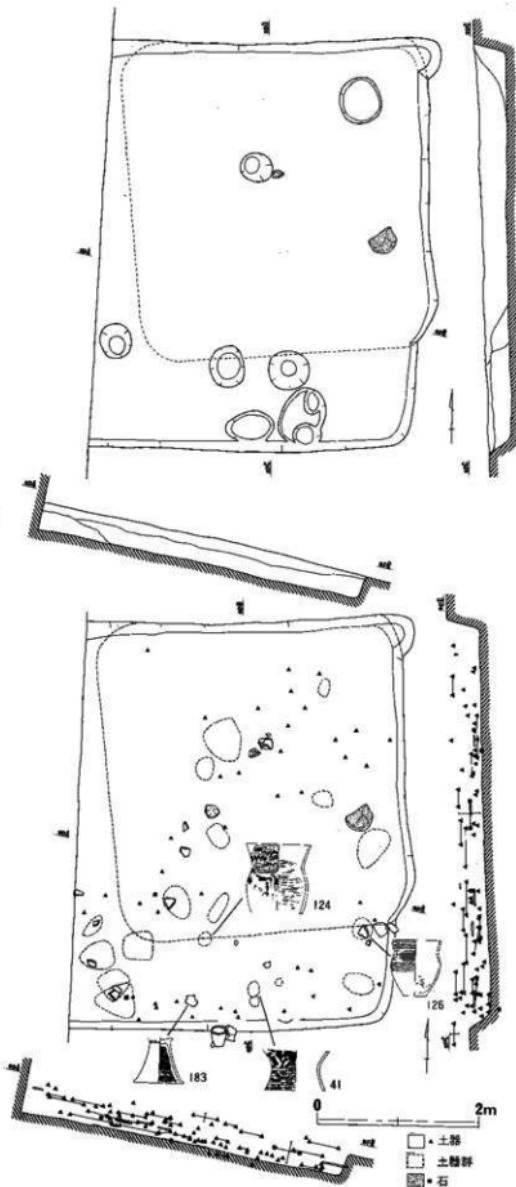
ある。検出面からの埋込みが浅いこともあって、遺物がどのような状況で埋没していたのか判断することは難しい。ほぼ完形に復元された高杯形土器176、179や變形土器107, 105。あるいは台付變形土器(?) 146などは原位置を保っている可能性もある。遺物：壺形土器、變形土器、高杯形土器などがあるが、變形土器が圧倒的に多い。

甕形土器は甕形土器第8・9類に分類されると考えるがかなりのバリエーションがある。II16は口縁部がわずかに内湾するよう立ち上がるが、口縁部の長さは短く、頸部のくびれもまだやや強い。全体としては細身な印象をうける。甕形土器第7類との類似性を残すが、第8類に分類されよう。

類の形状を残しているが、口縁部の長さは116よりも長い。このタイプの甕形土器は116などとは別系譜と考えるべきなのだろうか。ちなみに、吉田式の甕形土器の中に口縁部が内湾しながら直立するよう立ち上がり胴部径が大きな類がある。

このように、本住居の變形土器は128例を加えて
大きく三つの形態に細分できる。

一つは116に見られるような細身の器形の系統(?)である。筆者は編年を考えるうえで最も重要な斐形土器の形態と考えている。122は116とはほぼ同様な細身な器形となるが、口縁部が長く、胸部の球形度も増している。さらに、125や129はやや「く」の字状にくびれていた頸部のくびれが弱くなり、胸部上半



第42図 第17号竪穴住居

部に肩を持つような器形である。

細身の変形土器のこうした器形の変化は基本的に時間的な変化を示しているのではないかと筆者は考えている。

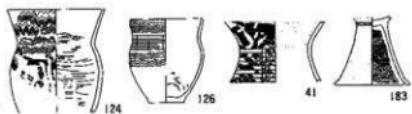
105や107の形態の変形土器はおそらくこの前段階からつながり、段階で消える器形ではないかと考えている。前段階の例としては本遺跡第77図112例、そして110例を挙げておきたい。

また、128は寸詰まりの器形となるが、基本的には116のような器形の中で考えられよう。本遺跡では類例が少ないが、組成のなかでは比較的安定した量を示している。今のところ、これらの変形土器のバリエーションが系譜的、通時的な要因によって生じていると考えているが、本遺跡では共伴している。弥生遺構覆土内一括資料が厳密な意味で共時性をもつかどうかは出土状況の観察にかかるており、今後十分な出土状況の観察が要求されよう。

16、39、52、60、63、64は壺形土器である。16無紋の壺形土器で口縁部は漏斗状に開き、胴部最大径が中位やや下部にある。無紋であるが基本的には39などと同様の器形をとるものと思われる。16を除き、全形を知りうる壺形土器はない。39が最も大きく復元できたものだが、頸部以上を欠く。胴部最大径は中位をやや下がった位置にあり、明確な稜は形成されないし、胴下半部も内側に屈曲しない。壺形土器第8、9類に相当しよう。52は頸部が太く特異な器形である。

高杯形土器は杯部が直線的に開くものが二例知られる。

第17号竪穴住居 (93トヨ2区5住・第



第43図 第17号竪穴住居出土土器

42図)

位置：93年度調査、第2区

検出：93年度調査区の検出面は小石が混入しており、検出には極めて条件が悪かった。遺構を検出してもおぼろげに落ち込みが確認できる程度であり、本住居の検出も極めて困難であったが、幸いに検出面からの堀込みが比較的深いことから、壁などを検出することが可能となった。

当初、本竪穴住居も1軒と考えていたが遺構調査を進め、壁の検出を終えた時点での遺構の切合の関係を認め土層で確認した。床面レベルの違いはなかった。

平面形態：新しい竪穴住居は一辺約3.6mの方形ないし、短辺3.6mの長方形を呈するものと思われる。周溝は認められなかった。

柱穴の配置：柱穴状の落ち込みをいくつか確認しているが、本住居に伴うものとは断定できなかった。

遺物出土状況：覆土内から満遍なく出土している。二つの住居の割り合いではあるが、遺物の出土状況からそれぞれの住居に各土器を限定することはできなかった。

遺物：壺形土器1個体、甕形土器2個体、高杯形土器などが出土している。甕形土器124は口縁部が長く直立気味に立ち上がる。126は口縁端部が小さく内湾し、口縁部は短く直立する。124は甕形土器類、126は第7類に分類することができよう。

壺形土器41は頸部のみである、範描による平行沈線紋とそれに直交するが施文されている。壺形土器第8類に分類できようか。

第18号竪穴住居（89トヨ1区7住・第45図）

位置：89年度調査、第1区

検出：検出面では古墳時代の遺物や平安時代の遺物

が比較的まとまって出土したため、当該期の遺構の存在を想定し遺構検出をおこなったが、確認できなかつた。しかし、遺構確認のために検出面をやや掘り下げるところ、大きな長方形の落ち込みが明確に確認された。

平面形態：約6.6×5mの長方形を呈する。壁は良好に検出されたが、周溝は確認されなかつた。

炉：中央から北に偏る位置に検出された。90×60cmの地床炉が検出されている。

柱穴の配置：合計8カ所に柱穴状の落ち込みが確認されている。おそらく、四本柱が長方形に配置されていたのではないかと考えられる。

遺物の出土状況：遺物量は多くない。測図できたほど完形の二つの甕形土器は床面よりも浮いており、本住居の廃絶後に廃棄しないし廃棄されたものであろう。

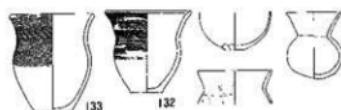
遺物：甕形土器132, 133は口縁部が長く反り返るように立ち上がり頸部のくびれは緩い。胴部最大径が胴部中位よりやや高くなり、弱い肩をつくる器形である。こうした器形は第16号竪穴住居出土例の細身の系統を引きもので、より新しい器形ではないかと考えている。

なお、ともに図示した古墳時代及び平安時代の遺物は検出面で本住居の遺物として取りあげられた土器に混入していたもので、本住居とは無関係である。

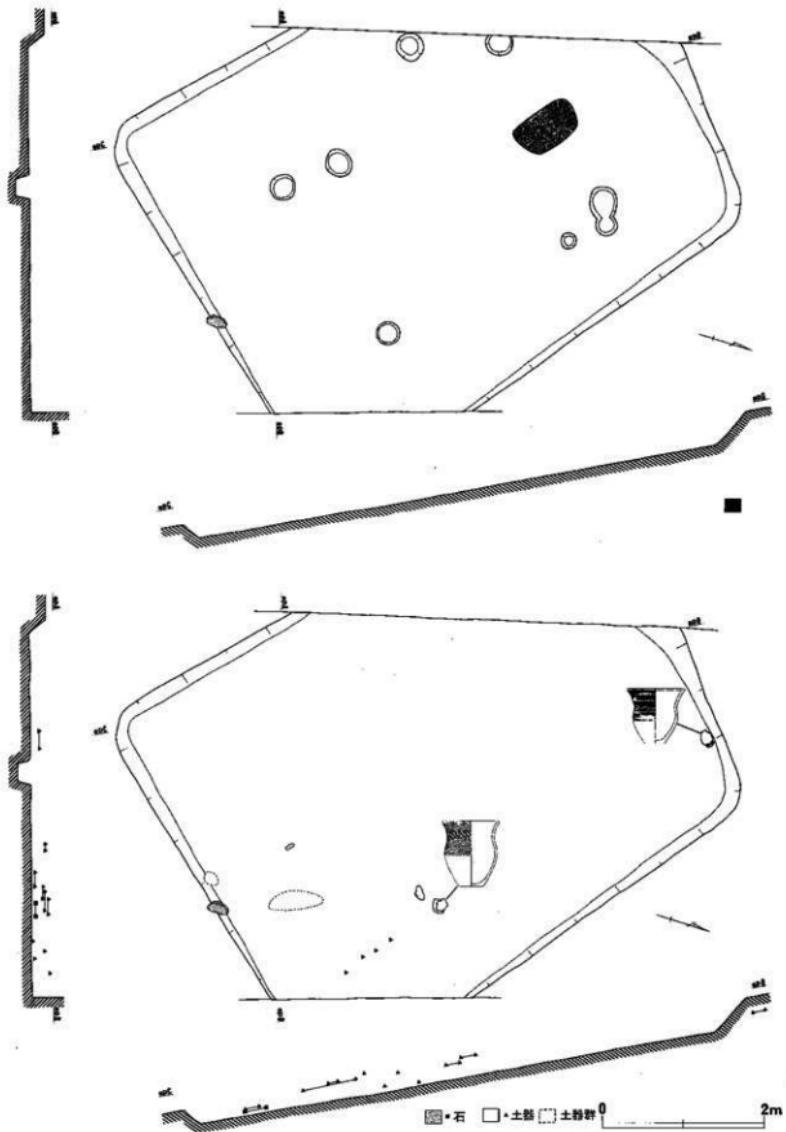
第19号竪穴住居（93トヨ2区7住・第46図）

位置：93年度調査、2区。

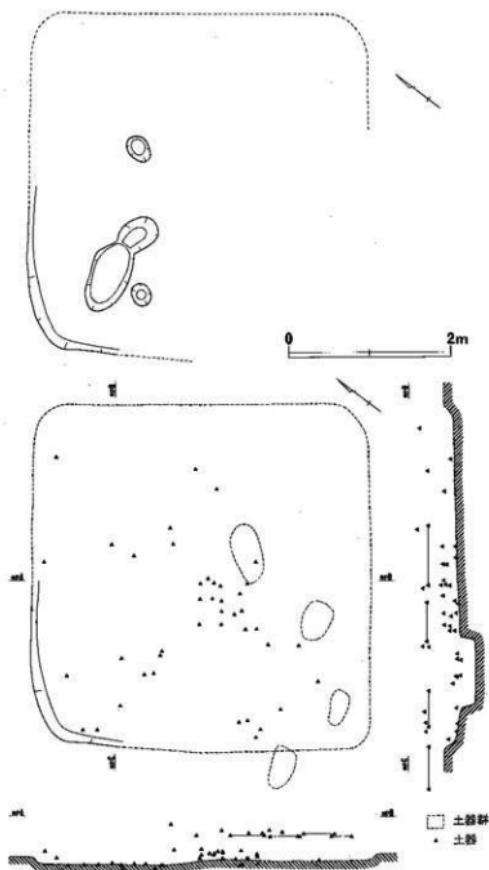
検出：ある程度の土器片が一定に範囲にまとまって出土する事から、遺構の存在は予想されたが、検出面に小礫が含まれている状況で、ほとんど平面プランの確認はできず、わずかに方形の住居のコーナー



第44図 第18号竪穴住居出土土器



第45図 第18号竪穴住居



第46図 第19号竪穴住居

が確認されたに過ぎない。

平面形態：おそらく、方形ないし長方形の竪穴住居と考えられるがその全形はほとんど不明である。検出したコーナー部分には不整形な長円形の落ち込みやピット状の落ち込みを確認している。

第47図

第19号竪穴住居
出土土器

の落ち込みやピット状の落ち込みを

遺物の出土状況：遺物の出土状況を観察すると上下2層に分かれている。おそらく、上部に別の遺構が存在し、その下部に検出した方形の住居が存在したのであろう。

遺物：栗林式の壺形土器が検出されているが、本住居に伴うかどうか判然としない。

第20号竪穴住居（93トヨ2区6住・第48図）

位置：93年度調査、第2区

検出：検出面は小石が含まれるており、遺構検出には極めて悪い条件であった。大半は調査区外に存在するものと思われる。トレーナーを併用して調査を進め、壁の立ち上がりから遺構のプランを確認した。

平面形態：確認できる方形の一辺は約3.3mを測り、竪穴住居としては小型である。床面には土坑が4基検出されているがその正確は良くわからない。場合によっては本遺構は竪穴住居ではない可能性もある。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ない。一部の遺物は床面の土坑内から出土しているが、測図できなかった。

第21竪穴住居（89トヨ1区6住）

位置：89年度調査、1区。

検出：平面プランは良好に確認された。検出面から掘込みも深く、良好に検出された。

平面形態：大半が調査区外にあるため、全形をしりえないが、方形ないし長方形の平面プランであると考えられる。

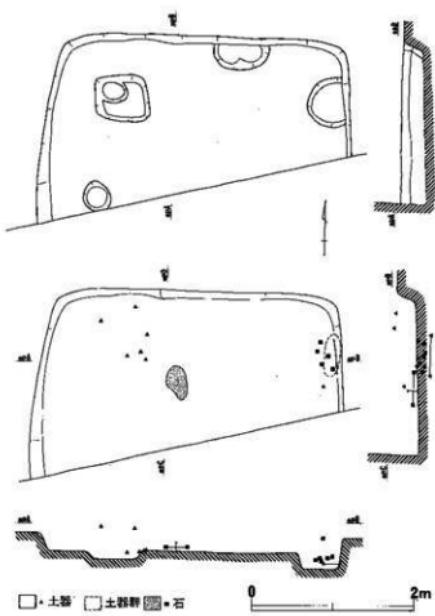
柱穴の配置：三ヵ所に柱穴状の落ち込みが確認されているが、配置は不明である。

第22号竪穴住居（89トヨ1区2住・第50図）

位置：89年調査、1区。

検出：大半が擾乱されているため、壁の一部が確認されたのみである。

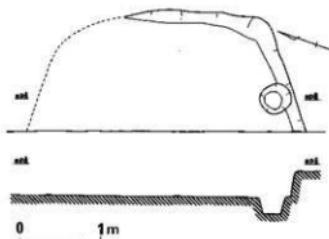
平面形態：方形あるいは長方形のコーナーが確認さ



第48図 第20号竪穴住居

れたのみで、プランの全形が明らかではない。

遺物出土状況：覆土中に小破片が確認されたのみであった。



第50図 第22号竪穴住居

(2) 土坑

第1号土坑 (92トヨ2区SK1・第51図)

位置：92年調査区、第2区。

検出：重機による表土剥ぎの段階で落ち込みが確認され、急遽手掘りによる遺構確認を行ったが、遺構の上半部は失われてしまった。

長方形の落ち込みは明確に確認された。

長方形の落ち込みは20cmほどの深さであり、その床面に対になった溝状の落ち込みが確認された。平面形態：約2.8×0.7mの長方形、深さは深いところで約20cmを計測する。西壁ちかくの底面に幅約40cm、長さ約60cm、深さ約30cmの溝状の落ち込み、東壁ちかくの底面には幅約30cm、長さ約80cm、深さ約20cmの溝状の落ち込みが確認されている。

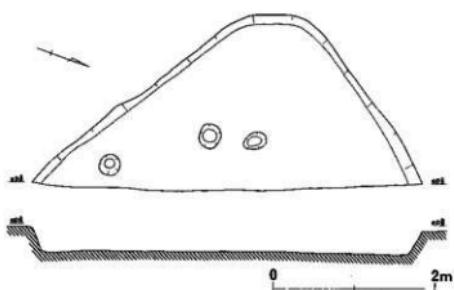
遺物出土状況：土坑底面に密着した状況で、高杯形土器、ガラス玉が検出されている。このほかに、表土剥ぎの段階で複数の土器が確認されている。

備考：本土坑は組み合わせ木棺墓と考えられる。

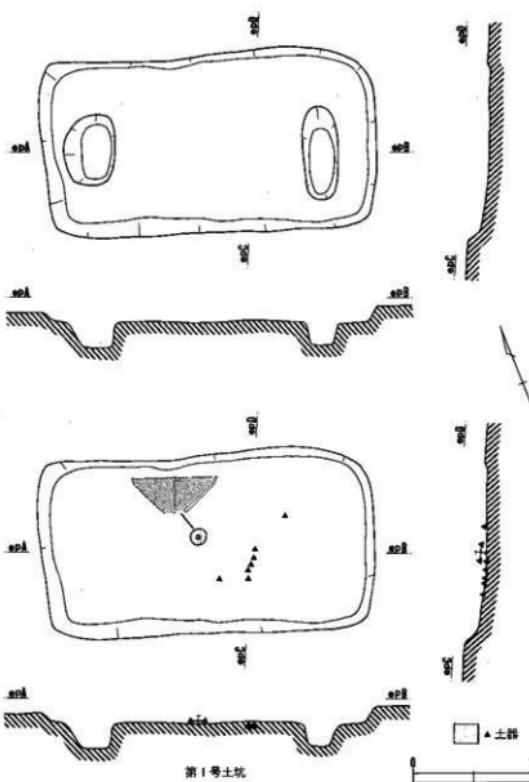
第2号土坑 (89トヨ1区土坑1・第52図)

位置：89年度調査、第1区。

検出：検出面に古墳時代の遺物がまとまって確認されたため当該期の遺構の存在を想定して精査したところ本土坑の落ち込みを確認した。1/2は調査区外にある。上面に自然路があり、土坑の一部と重複する。



第49図 第21号竪穴住居



第3号土坑 (94年調査)
位置：94年度調査区
検出：検出面は河川によって浸食、ないし何らかの影響を受けたと考えられ、遺構の検出は難しかった。

第3号土坑 (94年調査)

位置：94年度調査区

検出：検出面は河川によって浸食、ないし何らかの影響を受けたと考えられ、遺構の検出は難しかった。

検出面で土器片が集中する部分があり、周囲を精査したところ、不正形な三角形の落ち込みを確認した。

平面形態：底辺1.6m、高さ1.6mの不整形な三角形、検出面形の落ち込みは10cm前後で、壁の立ち上がりははっきりしない。

備考：上面に土器片が集中していることから土坑と考えたが、自然の落ち込みの可能性が高い。

第4号土坑 (94年度調査)

位置：94年度調査区

検出：検出面は水成層のため乾燥すると落ち込みの確認がほとんどできない状況になる。本遺構も水を散布しながらようやく検出したものである。

平面形態：不正形な四角形。底に柱穴状の落ち込みが二カ所から検出されている。平面形態は不整形であるが、検出面からの堆積物は約30cmほどある。北と西側の壁の立ち上がりはやや不明瞭であったが、東と南側の壁は明瞭に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

第5号土坑

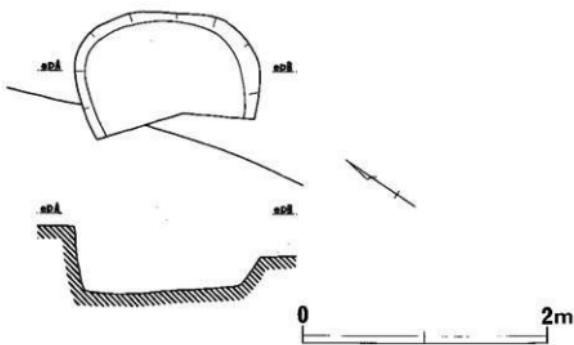
位置：94年度調査区

検出：河川の浸食、あるいは影響を受けたと思われる地区で確認された。検出がすこぶる困難で、落ち込みが存在することは確認できるのだが、その平面形態はほとんど確認できない状況であった。自然の落ち込みの可能性が高い。

第6号土坑

位置：94年度調査区。

検出：検出面が水成層であるためか、乾燥するとは

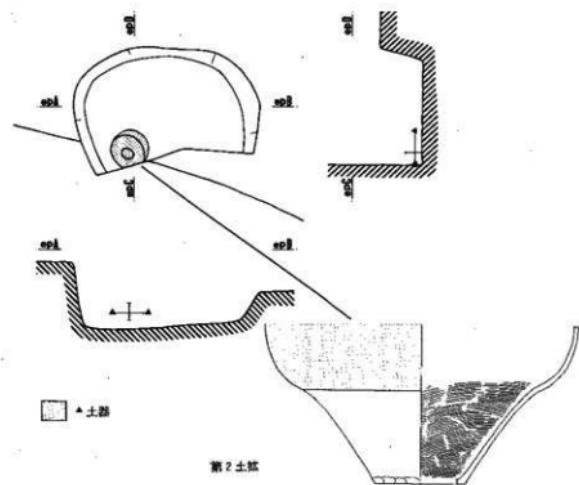


上面にあったものと考えられよう。

第7号土坑

位置：94年度調査区

検出：河川の浸食ないし影響を受けたと思われる地点で、検出が極めて困難であった。不整形であり、堀込みも浅いことから自然の落ち込みの可能性が高い。



第8号土坑

位置：94年度調査

検出：乾燥する検出が極めて困難になり、散水しながら遺構検出に努め、ようやく平面プランを確認した。落ち込みは極めて浅くわずかに土坑の底面近くを検出したにとどまる。

平面形態：約 $2 \times 0.8\text{m}$ の長方形で、コーナーがわずかに丸みをもつ。底面は平坦であった。

遺物出土状況：遺構検出面より 40cm ほど高い位置から、土器片が比較的集中した。検出した土坑の覆土内にはわずかにしか含まれていない。

第52図 第2号土坑

とんど平面形態を確認できない状態となり、水を散布しながら検出した。

平面形態：不正形であるが、南側部分は木の根など自然の落ち込みを誤った堀上げたもので、本来は $1.2 \times 0.8\text{m}$ の楕円形を呈していたものと思われる。

遺物出土状況：本調査区では包含層から遺物の出土位置を記録した。図示した遺物出土が確実に本土坑に伴うという確証はないが、土坑の覆土中あるいは

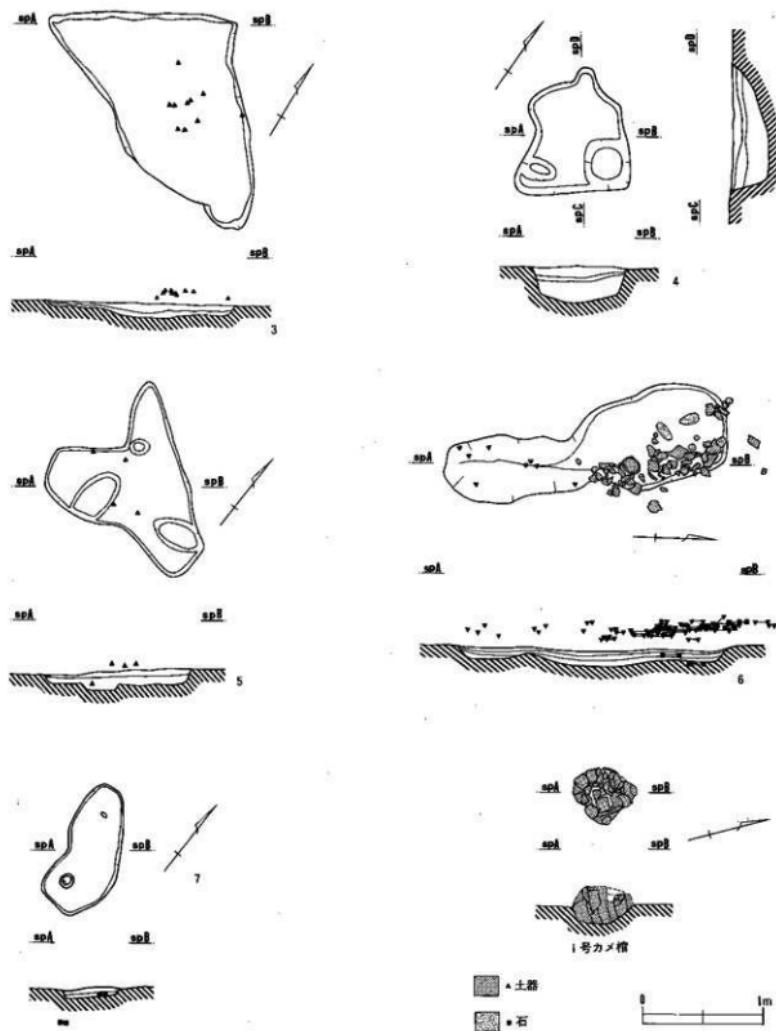
備考：土器が小さく判別としないが後期前葉段階のものと推測される。

第9号土坑

位置：94年度調査区

検出：乾燥した検出面での確認は極めて難しかった。大半が調査区外に存在する。

平面形態：土坑の大半が調査区の外に存在するため



第53図 土坑 (3～7号)

全形を知りえないが、幅約0.7m、長さ約2m前後の長円形を呈するものと思われる。

壁の立ち上がりは良好で、約40cmある。壁の上半部がやや開いているが、これは雨水によって壁が崩れたため本来はほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。

遺物出土状況：覆土中に数片の土器が含まれていたのみであった。

備考：弥生後期前葉

第10号土坑

位置：94年度調査区

検出：乾燥した検出面での検出は難しかった。不整形であったため二つの土坑の切り合いと思われたが実際は一つの土坑であり、西壁の中央部は壠過ぎている。

平面形態：本来の形態は約1.6×0.8mの長円形であると考えられる。

深さ約30cmで壁は垂直に立ち上がる。

遺物出土状況：土坑検出面より上位に土器片が検出された。

備考：遺物が覆土内から検出されていないが、後期前葉のものと思われる。

第11号土坑

位置：94年度調査区

検出：乾燥した検出面での検出は難しかった。二つの土坑が重複しているように落ち込みを掘ることができたが、北側の部分については土器片や礫が検出されているけれども遺構と断定できない。

平面形態：大半が調査区外のため全形は知りえない。遺物出土状況：検出面上位及び覆土内から土器片が出土しているが量は多くない。

備考：土器片のみで所属期を決めたいが、後期前葉のものと考える。

第12号土坑

位置：平成94年度調査区

検出：検出面での平面プランの確認は難しかったが、壠込みが深かったため壁の立ち上がりの検出を併用して、平面形態を確認した。やや不整形なのは検出時の誤りであると考えている。

平面形態：1/2が調査区の外側にあるため全形を知りえないが、長径約2.2m、幅推測で1.2m前後の長円形を呈するものと思われる。

遺物出土状況：土坑の南に偏った部分からビーズ大のガラス玉が17個、集中して出土した。土坑底からは約20cmほど浮いている。ガラス玉以外の遺物は検出されなかった。

備考：土器が出土していないが、状況から後期前葉のものと思われる。

第13号土坑

位置：94年度調査区

検出：乾燥した検出面での落ち込みの確認は極めて困難であった。

平面形態：大半が調査区外のため全形を知りえないが、検出した部分は長円形の土坑の頭部であると思われる。

遺物出土状況：覆土上面から上位にかけて土器片が土坑底部付近に疊が集中していた。

備考：後期前葉のものと考えられる。

第14号土坑

位置：94年調査区

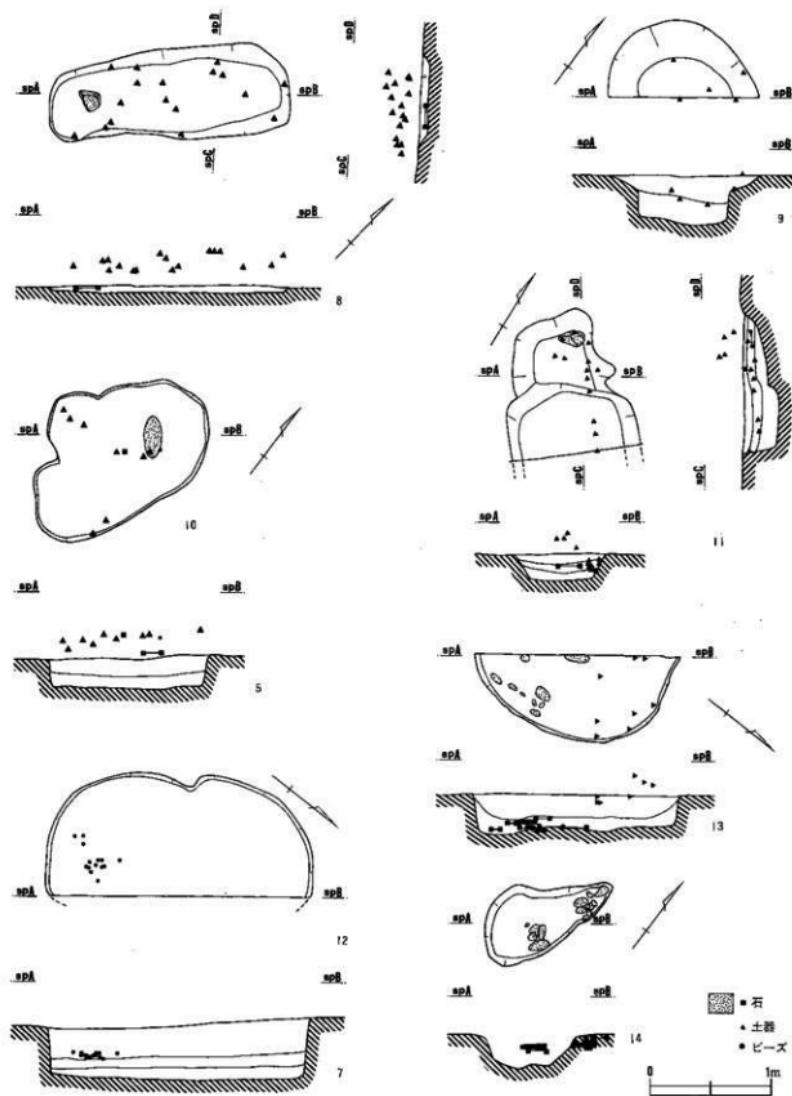
検出：乾燥した検出面での遺構確認であり、平面プランは明確に確認できなかった。覆土内からは礫が出土したものであり、平面プランも不整形であるため、遺構である可能性は低い。

第15号土坑

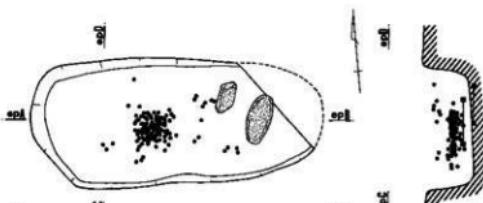
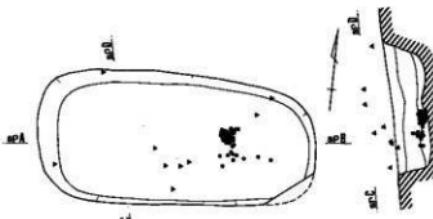
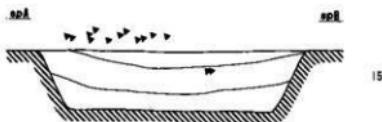
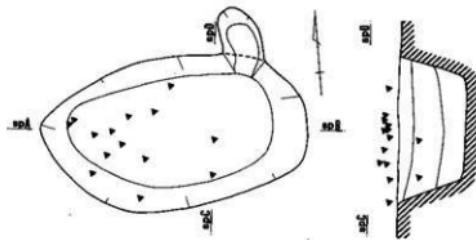
位置：94年度調査区

検出：検出面での落ち込みの平面プランは不明瞭であったが、壠込みが比較的深かったため壁の立ち上がりの確認を併用して、平面プラン等を確認した。

平面形態：長径約2.2m、短径約1.2mの長円形を



第54図 土坑 (8~14号)



■ 石
△ 土器
● ピーズ

第55図 土坑 (15~17号)

呈し、深さは約65cmを測る。北東隅に柱穴状の落ち込みが確認されたが木の根等の擾乱であろう。

遺物出土状況：検出面の上面及び覆土上位から土器片が出土している。量は少ない。

備考：わずかな遺物しか確認されていないため、その所属期を断定することはできないが、後期前葉のものであろう。

第16号土坑

位置：94年度調査区

検出：検出面は乾燥すると遺構の平面プラン確認が極端に難しい状況であった。散水しながらの作業も困難な作業であった。

平面形態：長軸約2.4m、短軸約1.2mの隅丸長方形である。南西隅の一部がわずかに調査区外にある。土坑底はわずかに波打つが平坦といってよい。検出面からの堀込みは約30cmを測る。

遺物出土状況：土坑上面にわずかに土器が散布していた。注目すべきは集中して出土したピーズ大のガラス小玉が大量（176個）に検出されたことである。位置は土坑の中央よりやや東に偏った地点であり、出土レベルは土坑底直上付近で、径約20cmほどの狭い範囲に集中していた。

備考：土器の出土量が少ないために所属期を確定できないが後期前葉と考えて良いであろう。

第17号土坑

位置：94年度調査区

検出：乾燥した検出面での遺構プランの確認は大変難しかった。

平面形態：わずかに一部が調査区外にあるため全形を知りえないが、長軸約2.4m（推測）、短軸約1.2mの隅丸長方形を呈しているものと思われる。

遺物出土状況：土坑中央やや西に偏った部分から、ピーズ大のガラス小玉が185個、集中して検出された。

出土レベルは土坑底面よりやや浮いた状況で、やや散財しているものもあるが、大半は径約40cmの範囲

に集中する。

また、ガラス玉と反対側、中央よりやや東に偏った部分に細長い河原石が2ヶ検出されている。大きい方は長さ約40cmを測る。

備考：土器が検出されていないため所属期を確定できないが、後期前葉の所産だと考えられる。

第18号土坑

位置：94年度調査区

検出：遺構検出は困難であったが、検出面からの堀込みが深く、ほぼ平面プランを把握できたものと考えている。

平面形態：長径約3.2m、短径約1.8mの長円形を呈する。

遺物出土状況：検出面上位、及び覆土内から土器片が出土している。

また、北に偏った部分から河原石が床面より浮いた位置に検出されている。

備考：土器片が知られるのみで所属期を断定できない

第19号土坑

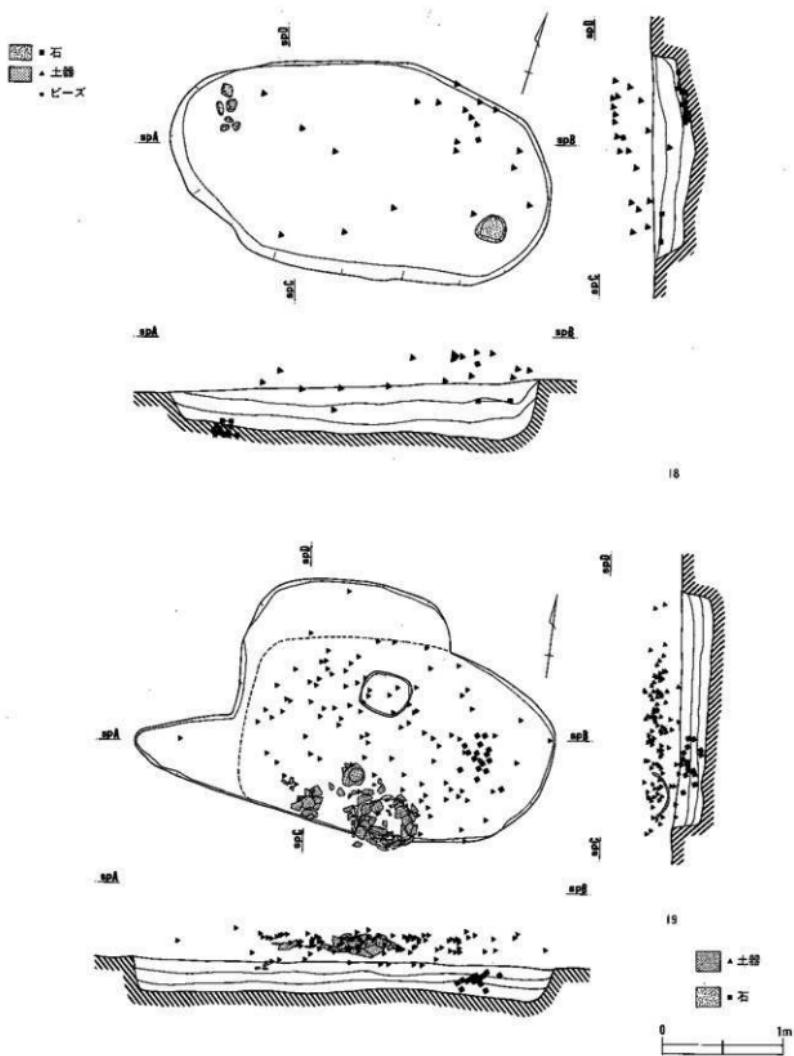
位置：94年度調査区。

検出：土器がまとまって検出されたため、周辺を精査したが、明確な平面プランは確認できなかった。不定型な平面プランであったが、遺構の重複した可能性を考え、落ち込みを掘り下げた。

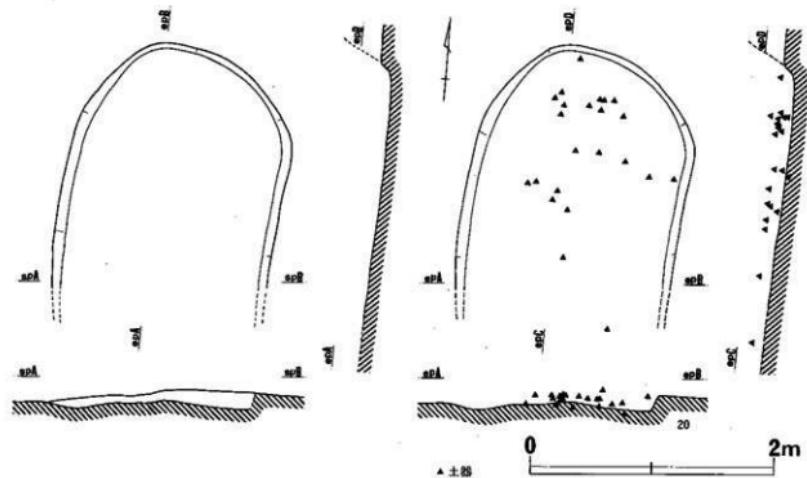
しかし、東壁及び南壁部分の立ち上がりは比較的明瞭に確認できたが、他は壁の立ち上がりが不明瞭であった。

遺物分布のあり方等を含めて、総合的に考えれば、長径約2.4m、短径約1.6mの長円形を呈した単独の土坑と考えられる。

備考：検出面上面から検出した土器のまとまりが本土坑に伴うものかどうか問題となる。土坑上面にまとまって土器が出土したのは本例のみであり、他の土坑はわずかに土器が認められたにすぎない。いわゆる甕棺墓との重複と考えておきたい。



第56図 土坑（18・19号）



第57図 第20号土坑

第20号土坑 (93トヨ1区sk5・第57図)

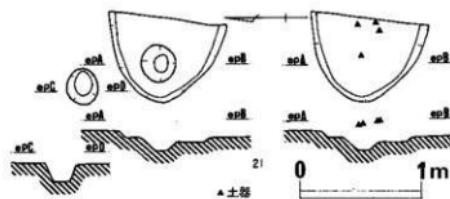
位置：93年度調査区1区

検出：検出面には小礫が含まれておらず、遺構の検出は極めて困難であった。土坑の一部と思われる落ち込みを確認したがその全形はふもいである。

第21号土坑 (93トヨ1区SK6・第58図)

位置：93年度調査、1区。

検出：検出面に小石が含まれ遺構確認は極めて困難であった。上面に弥生土器がわずかに検出されている。堀込みは浅く、土坑底に柱穴状の落ち込みを確認した。



第58図 第21号土坑

第22号土坑 (93トヨ2区SK1・第59図)

位置：93年度調査、2区

検出：検出面に小石が含まれ、遺構確認はほとんど不可能にちかかった。わずかに黒色に落ち込んだ部分を掘り下げた。堀込みは浅く北半分は検出できなかつた。壁は緩やかに立ち上がり、土坑のほぼ中央には小さな柱穴状の落ち込みが確認された。

第23号土坑 (92トヨ2区2)

位置：92年度調査区、2区。

検出：比較的明瞭に確認された。

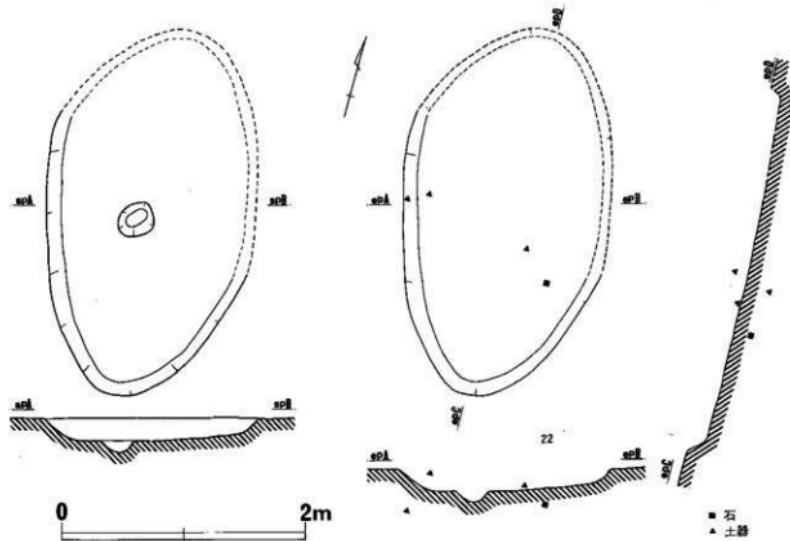
平面形態：長径約2m、短径約0.8mの長円形。深さは約30cmを計測するが、壁の立ち上がりは緩やかである。

備考：わずかに土器片が出土したのみで所属期は明らかではない。

第24号土坑 (93トヨ1区SK3・第62図)

位置：93年度調査区、1区。

検出：検出面には小石が含まれ、落ち込みの確



第59図 第22号土坑

認は極めて難しかった。確認した平面プランは不明瞭であったが落ち込みを掘り下げた。堀込みは浅く、壁の立ち上がりも不明瞭であった。

(3) 墓・壺棺墓

第1号壺棺墓（第53図）

位置：94年度調査区

検出：周囲の堀込みは確認できず、1個体の壺形土器型土器が単独で検出された。

壺棺：口縁部と底部を欠く、胴部最大径が中位や下方にある。頸部には沈線が巡る。

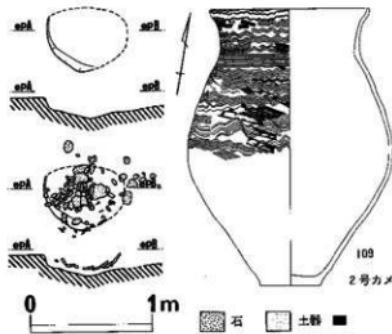
第2号壺棺墓（93トヨ1区SK2・第60図）

位置：93年度調査区、1区。

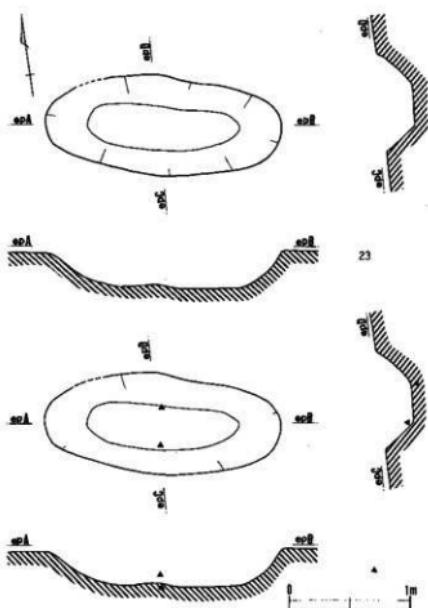
検出：検出面でまとまった土器が検出され、周間にわずかに落ち込みが確認された。土器は横に倒したような状況で出土した。落ち込みは浅く壁の立ち上

がりは部分的に検出されたとどまる。

壺棺：口縁端部に指でつまみ上げたような内湾が認められ、口縁部は直立気味に立ち上がり、最大径が胴部中位にある。頸部には簾状紋、口縁部及び胴上半部に櫛描文が施文されている。



第60図 第2号カメ棺



第51図 第23号土坑

第3号壺棺墓

位置：検出：おそらく1/2以上が調査区外にあるものと思われる。検出面で土器がまとめて出土し、その周囲にわずかに落ち込みが認められた。落ち込みは浅くわずかに痕跡を確認した程度ある。容器として壺形土器の底部が利用されている。

壺棺：底部のみで全形を知りえない。胴部最大径と下位にある。

第4号壺・壺棺

位置：93年度調査1区

検出：遺構の検出は難しく、

土器片がまとめて検出されたことから、周辺を精査し、土坑を検出した。検出した落ち込みは浅く、断面皿状を呈している。

壺棺：口縁部以下の壺形土器と胴下半部の壺形土器から構成される。壺形土器は胴部上半部と下半部に明瞭な稜が形成されず、赤色塗彩される。壺形土器には縱走する羽状紋が施文される。

第5号壺・壺棺

位置：93年度調査1区

検出：検出が難しく、土器が検出された後に、周辺を精査して落ち込みを確認した。検出面から堀込みは浅い。

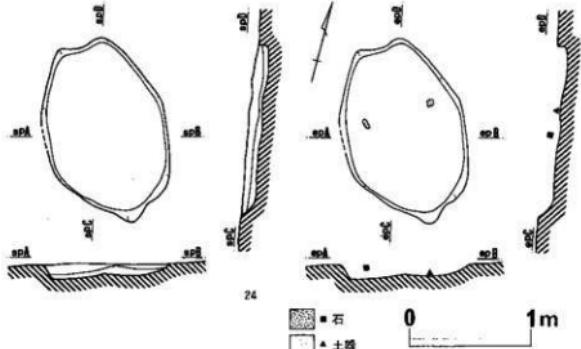
壺棺：口縁部以上を欠く壺形土器と底部を欠く壺形土器から構成される。

第6号壺棺

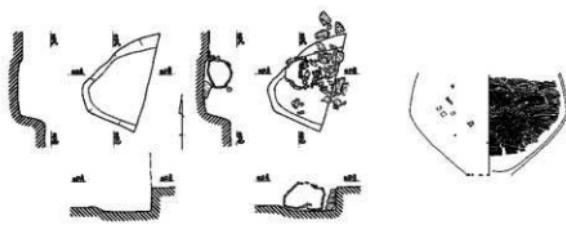
位置：93年度調査1区。

検出：断面皿状の土坑とスリ鉢状の二つの土坑の切り合いであった。壺棺と明確に断定できないが、断面スリ鉢状の深めの土坑内に壺形土器の底部が検出されている。

壺棺：壺形土器の底部である。



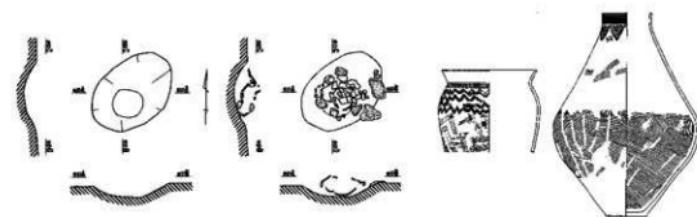
第62図 第24号土坑



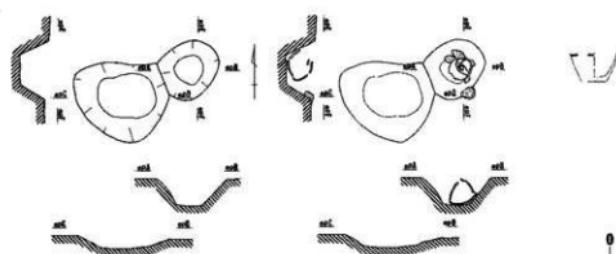
3号



4号



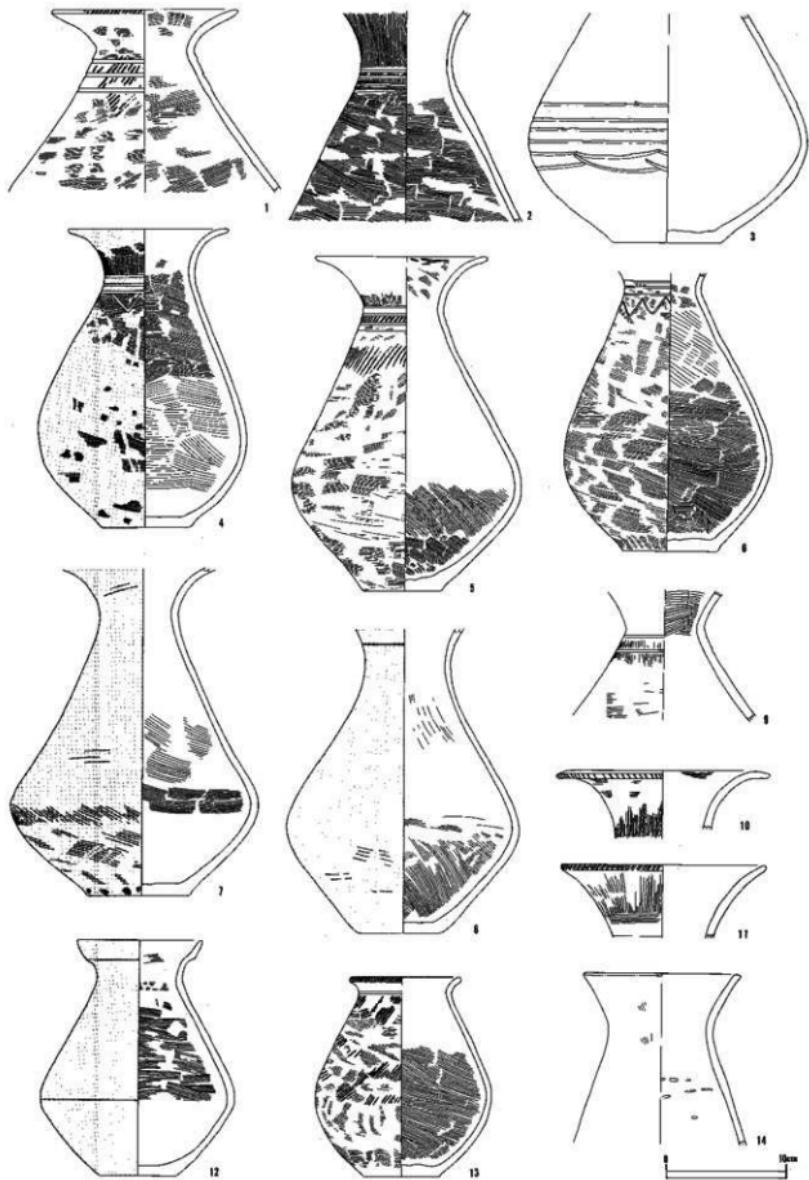
5号



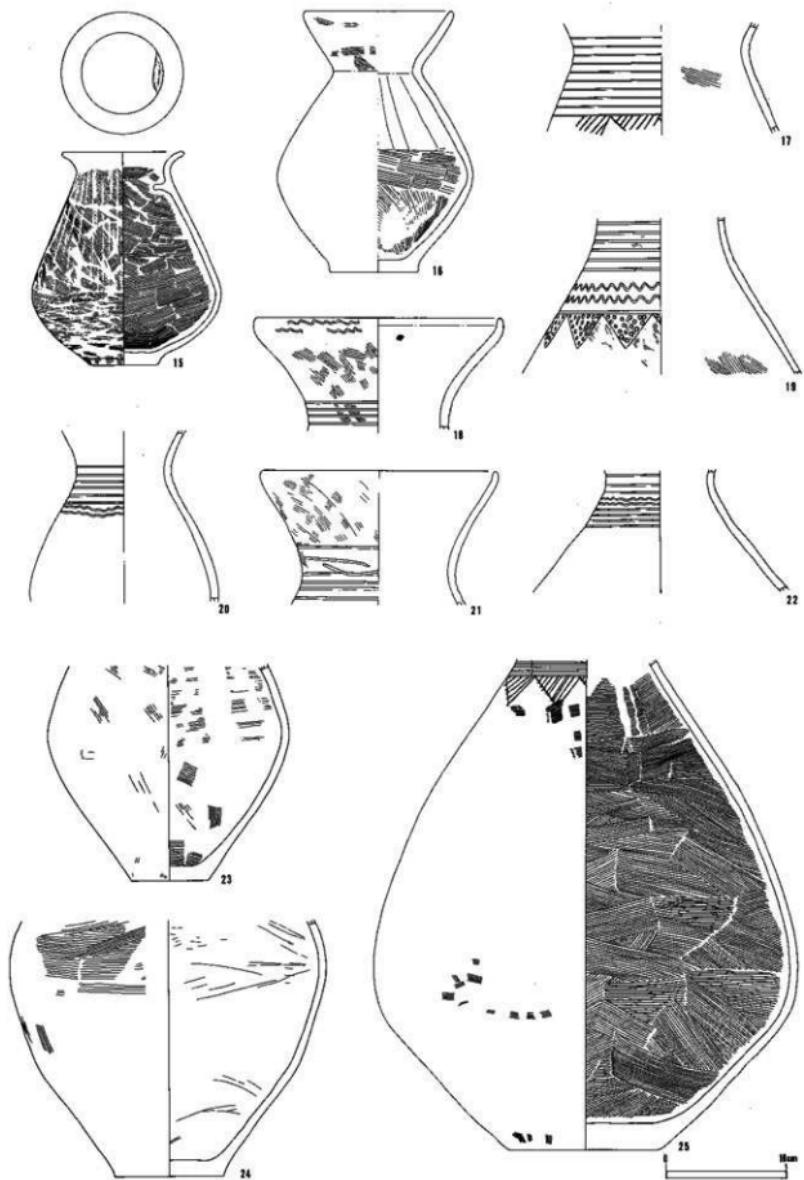
6号
□ 土器
■ 石

0 2m

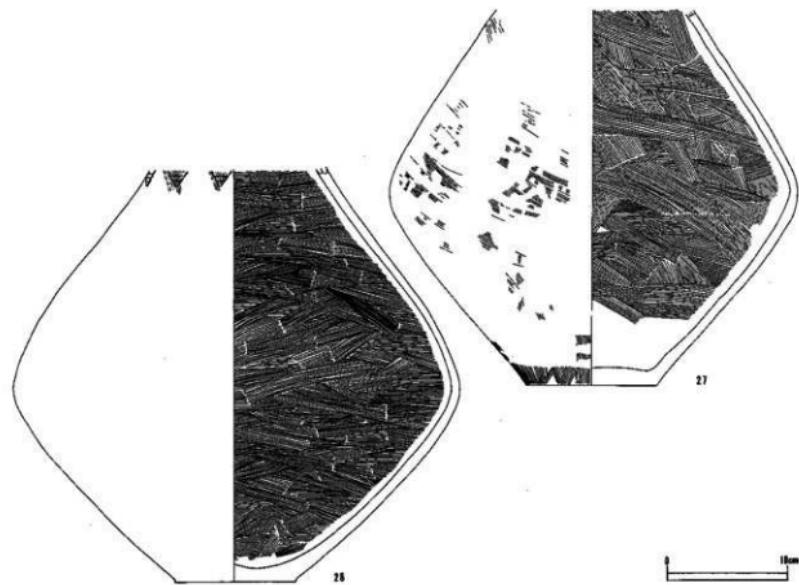
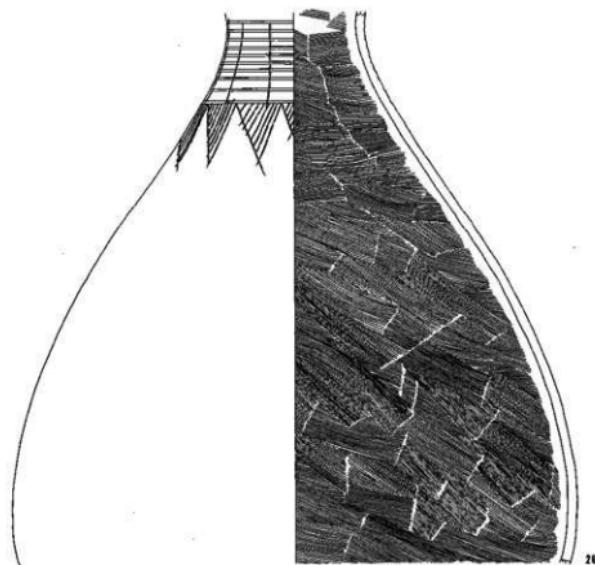
第63図 カメ塚



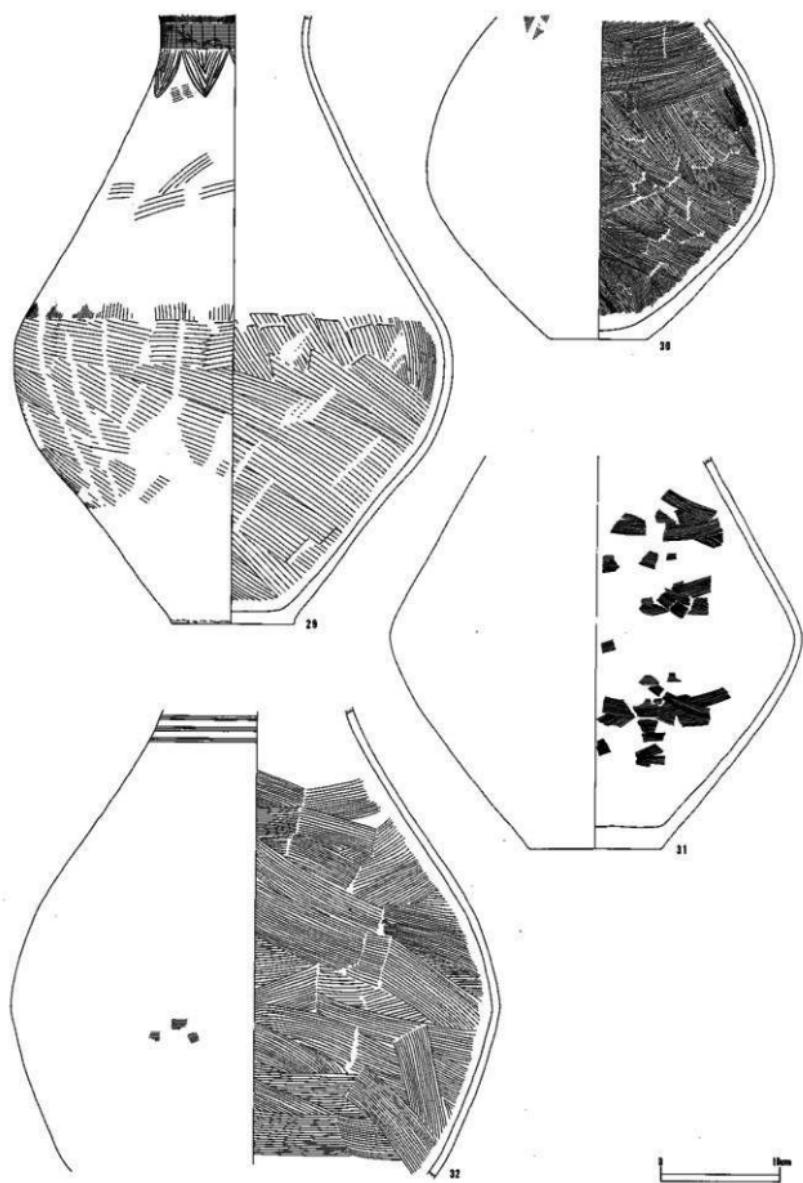
第64図 弥生土器



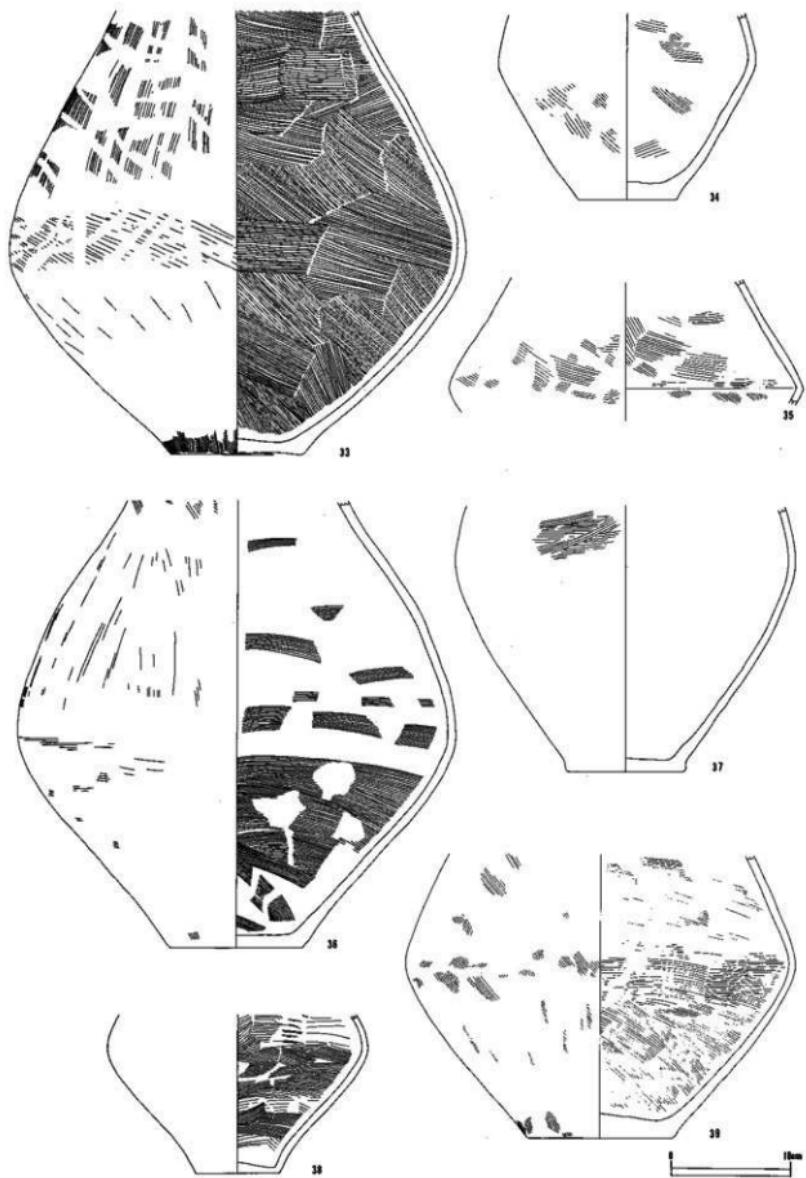
第65図 弥生土器



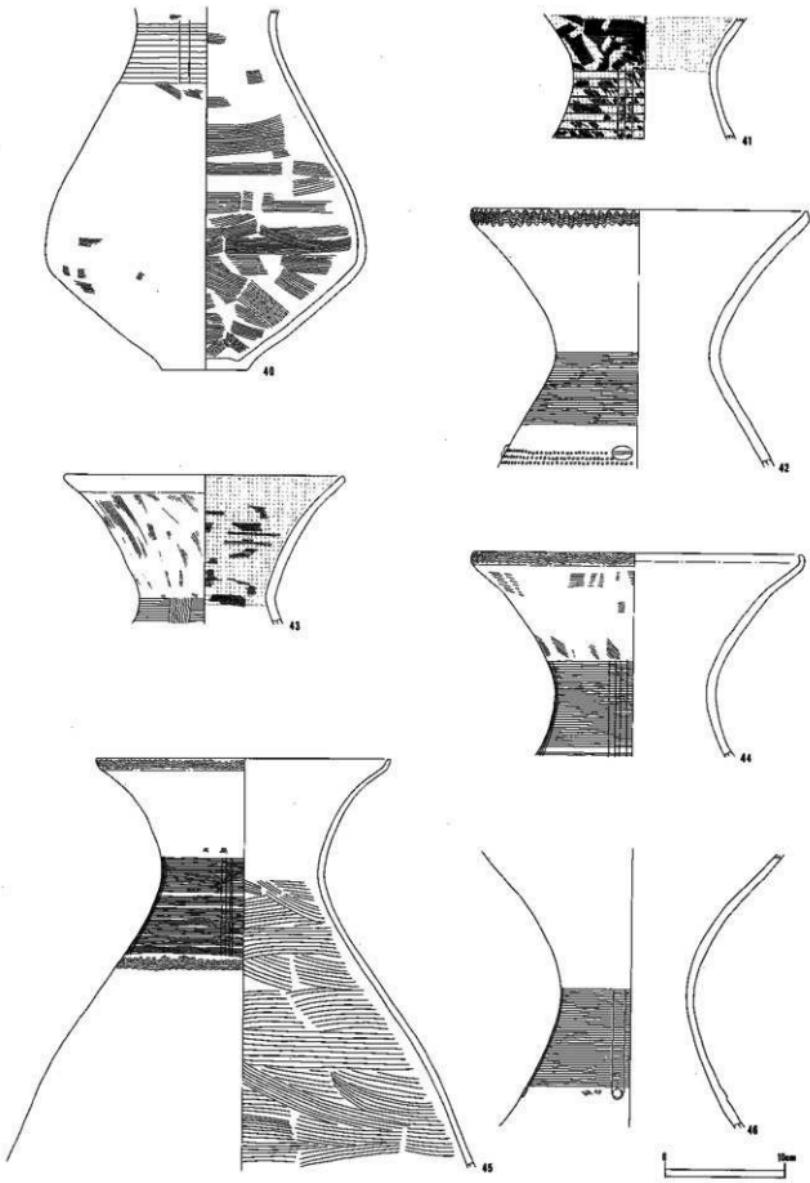
第66図 弥生土器



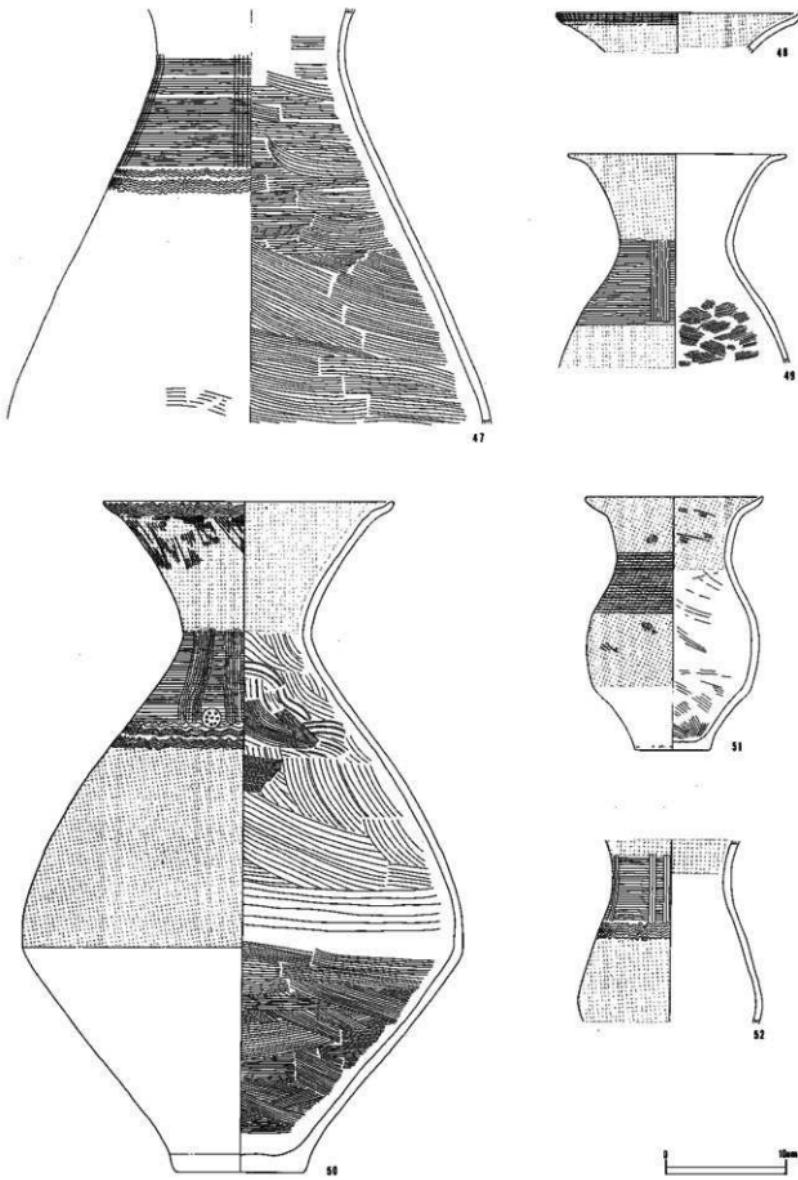
第67図 弥生土器



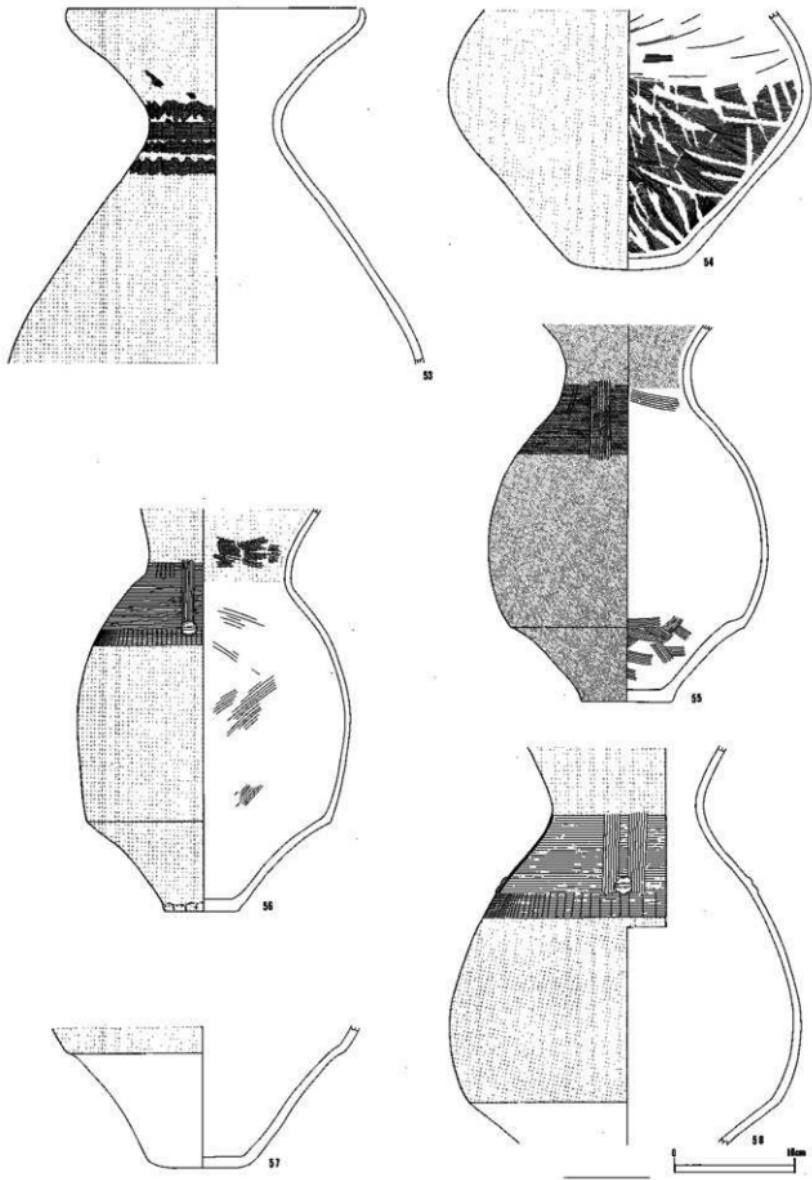
第68図 弥生土器



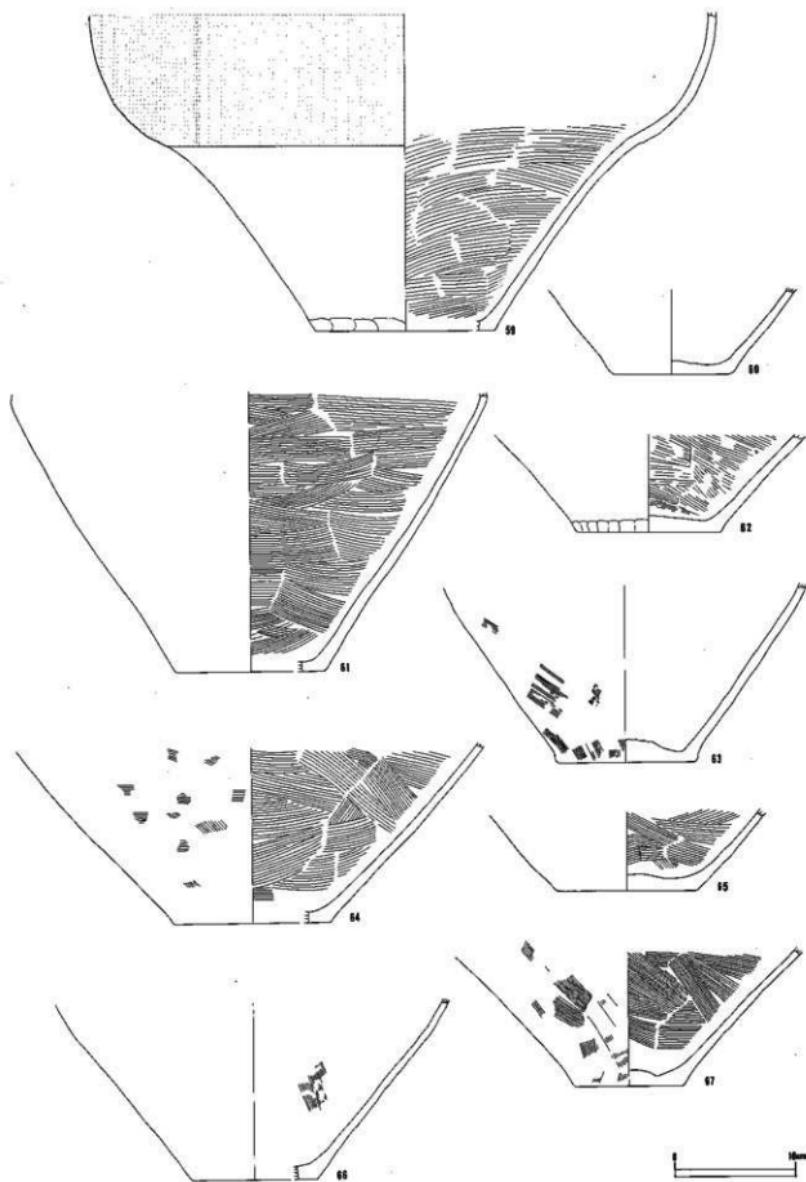
第69図 弥生土器



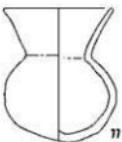
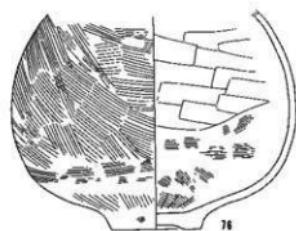
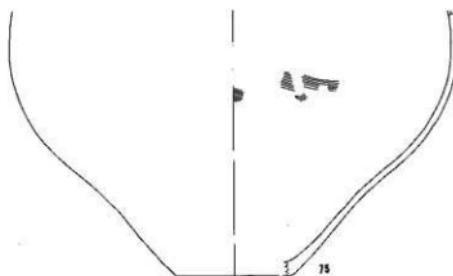
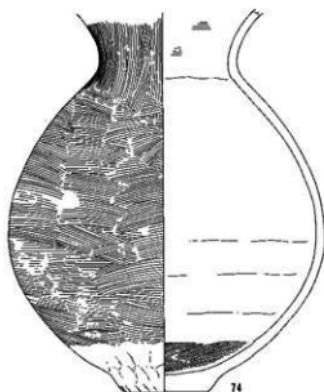
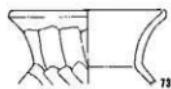
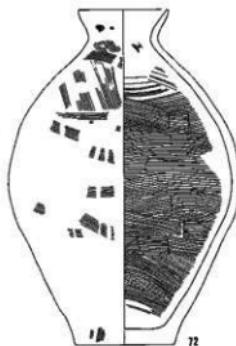
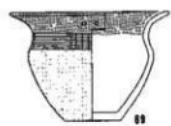
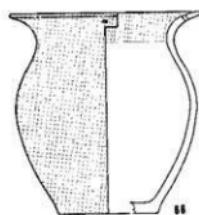
第70図 弥生土器



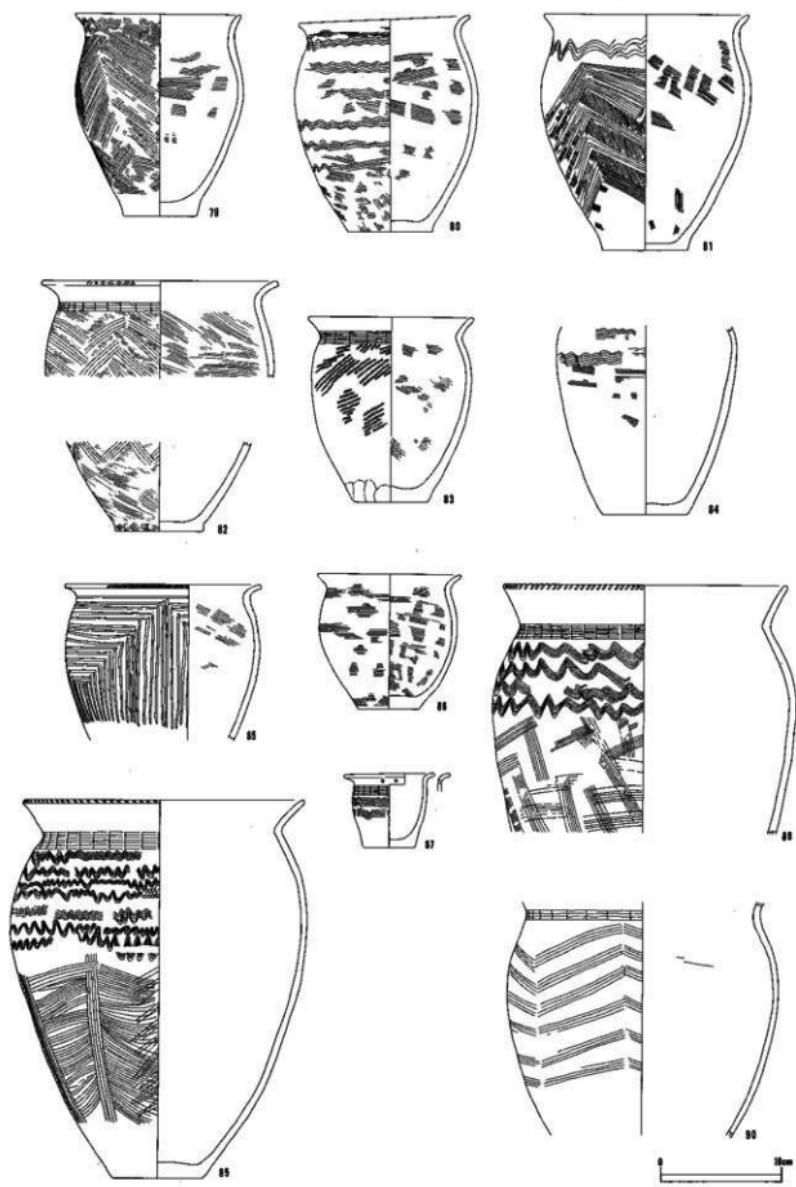
第71図 弥生土器



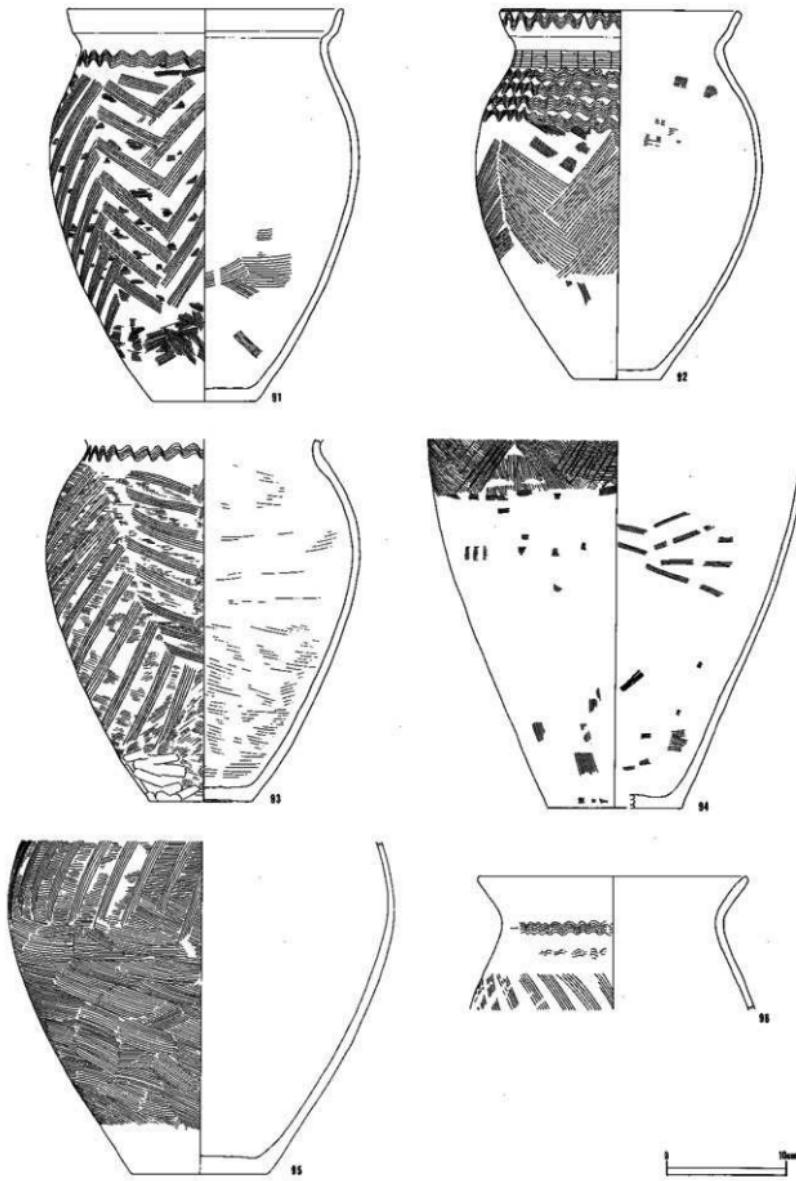
第72図 弥生土器



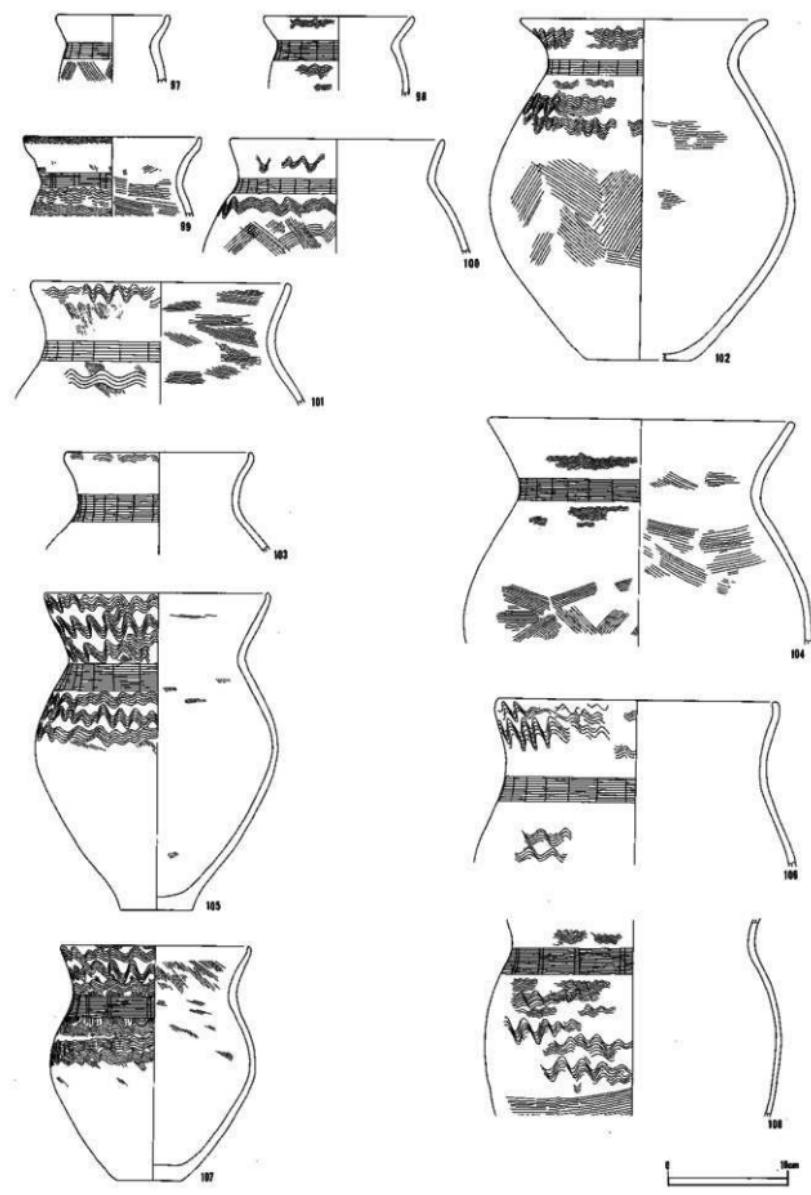
第73図 弥生土器



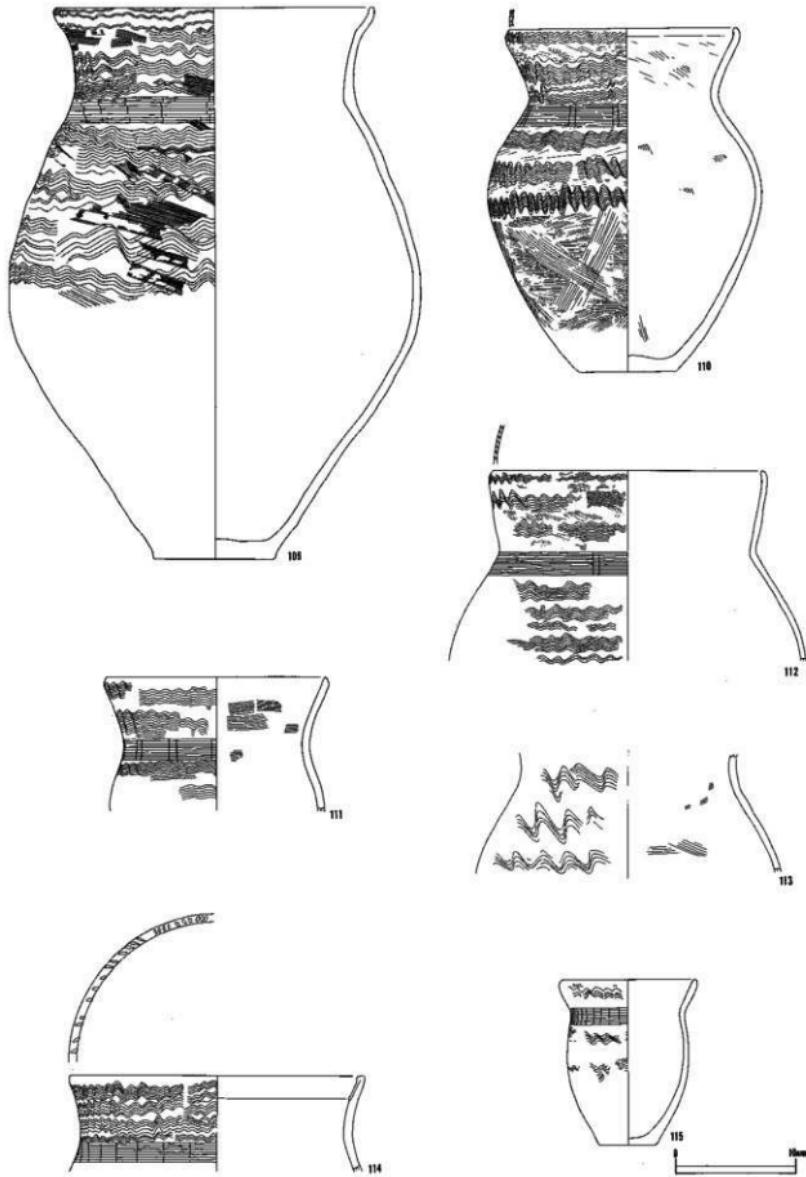
第74図 弥生土器



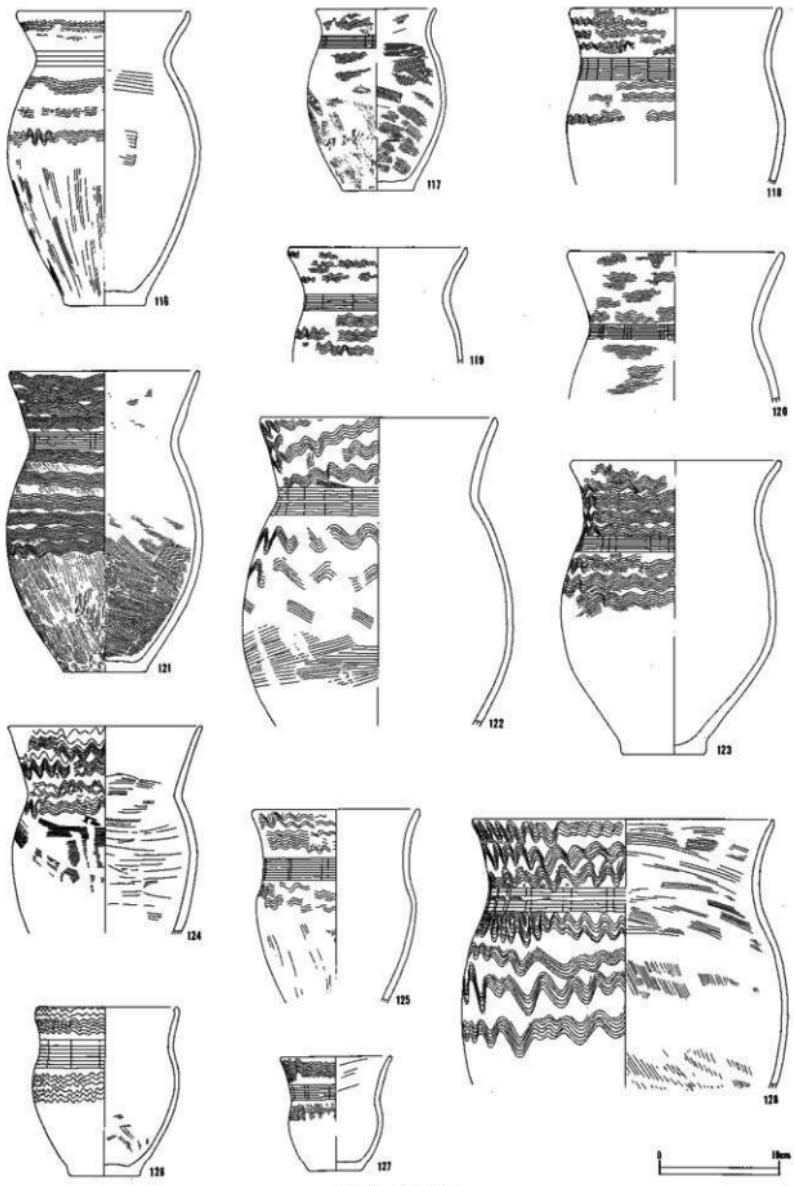
第75図 弥生土器



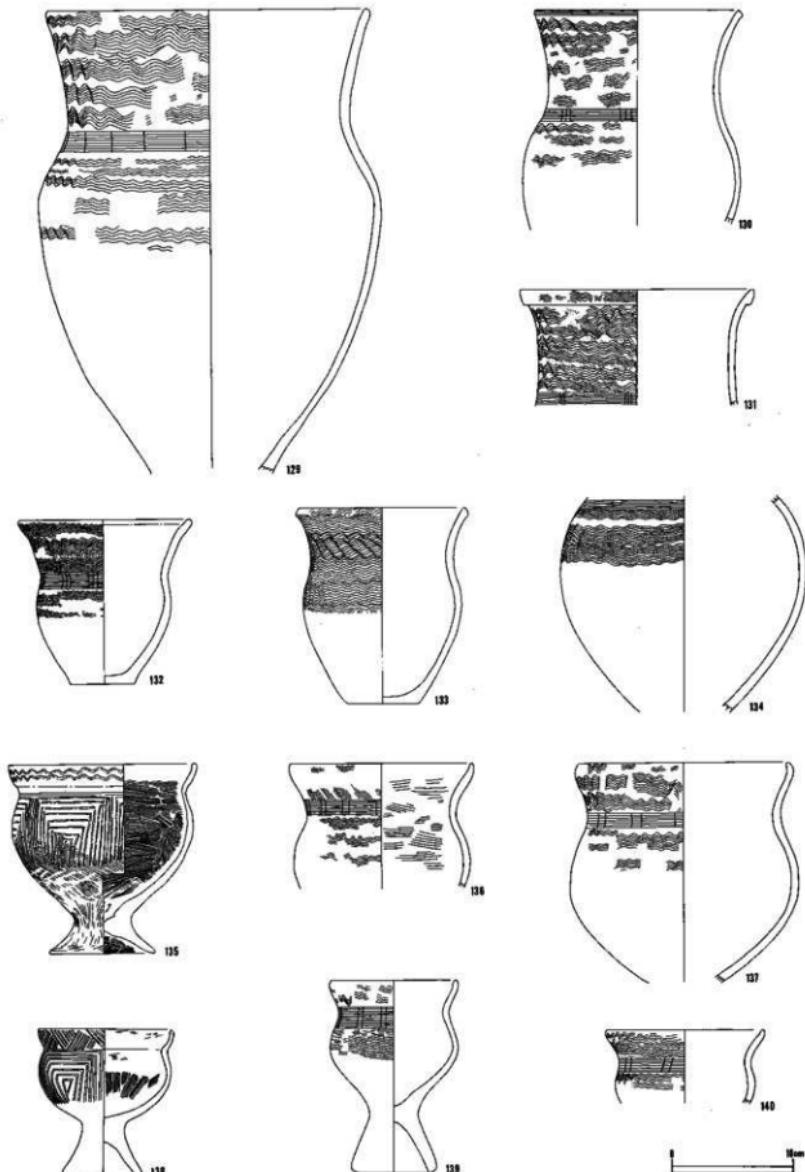
第76図 弥生土器



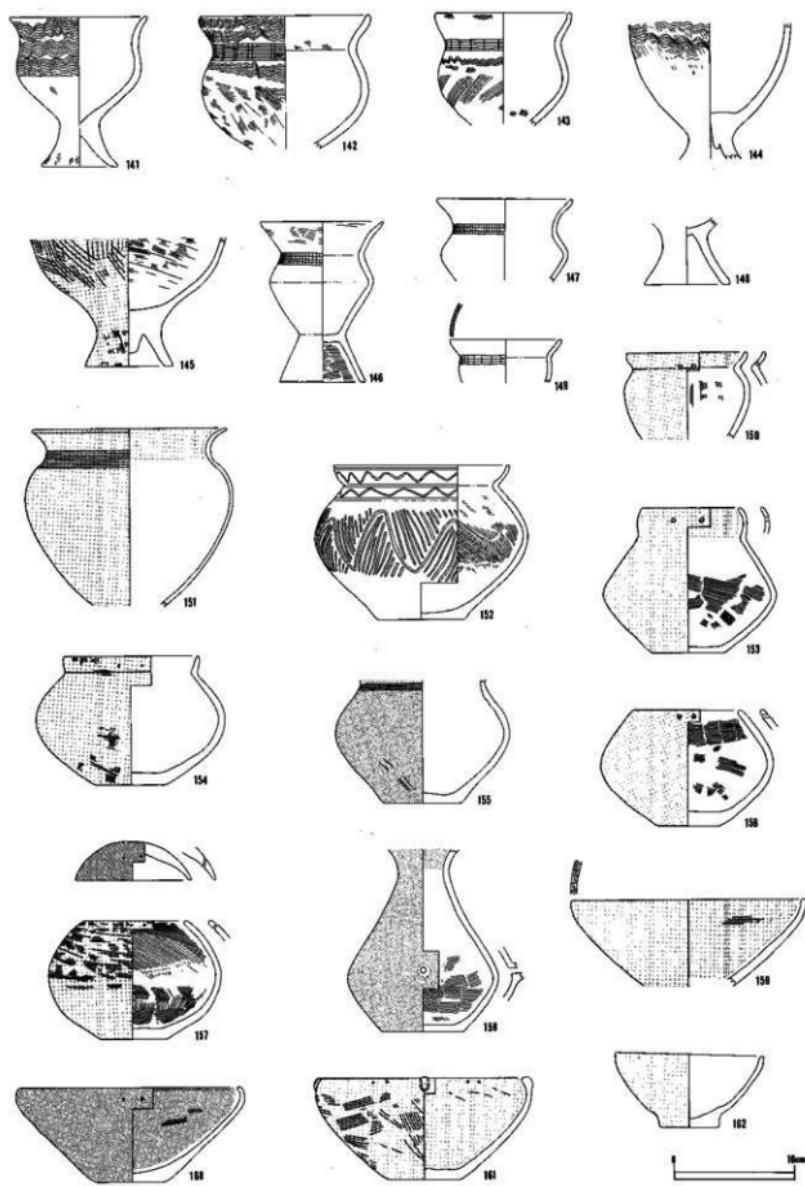
第77図 弥生土器



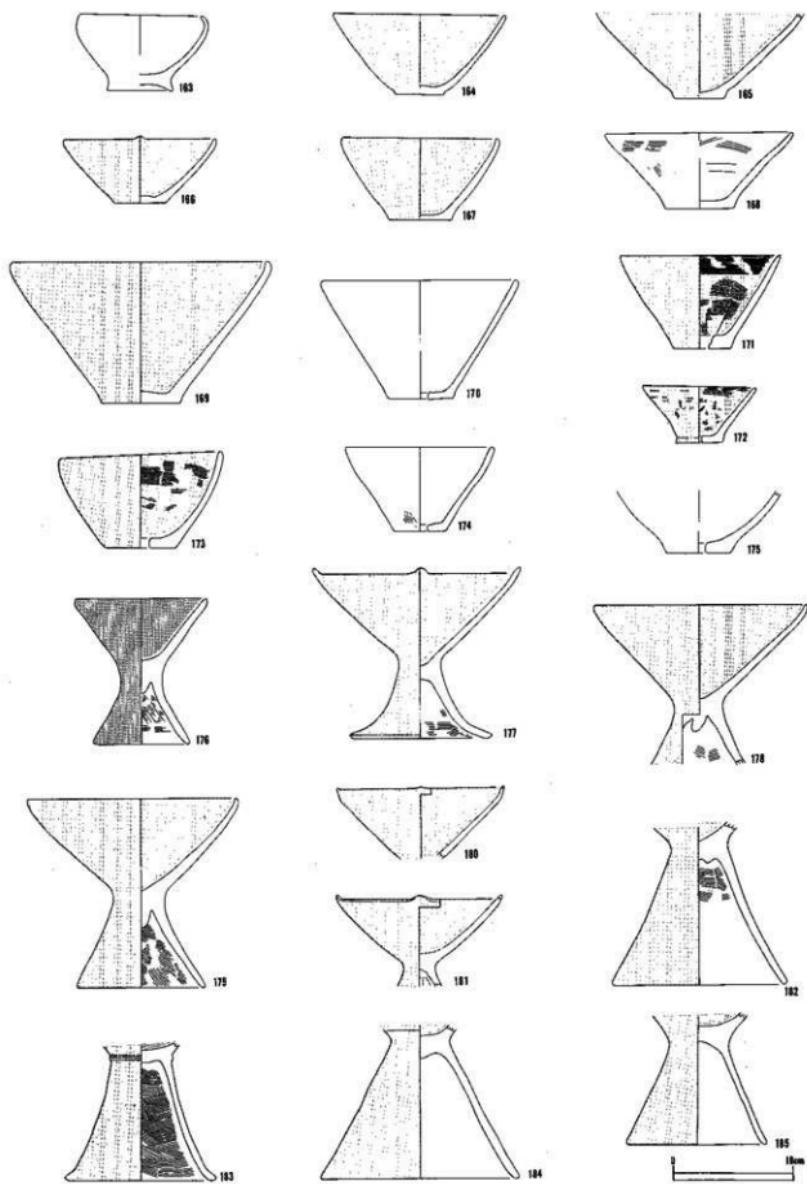
第78図 弥生土器



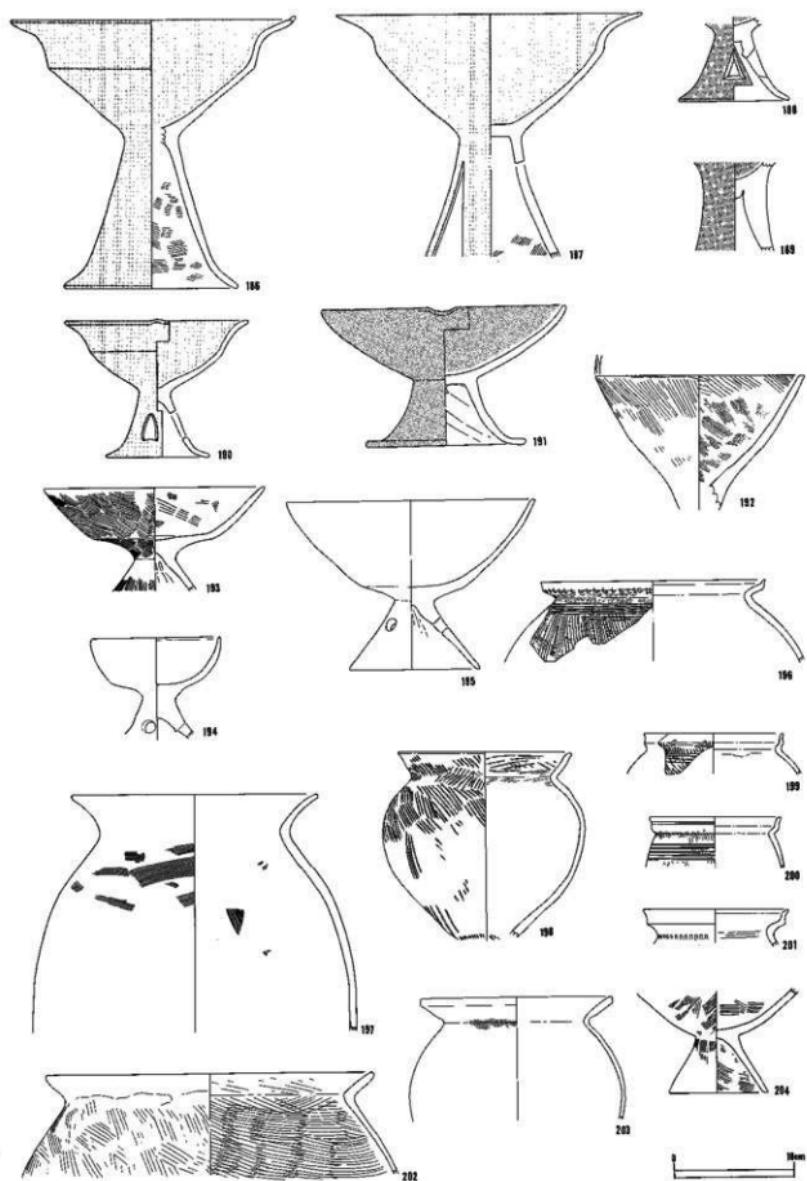
第79図 弥生土器



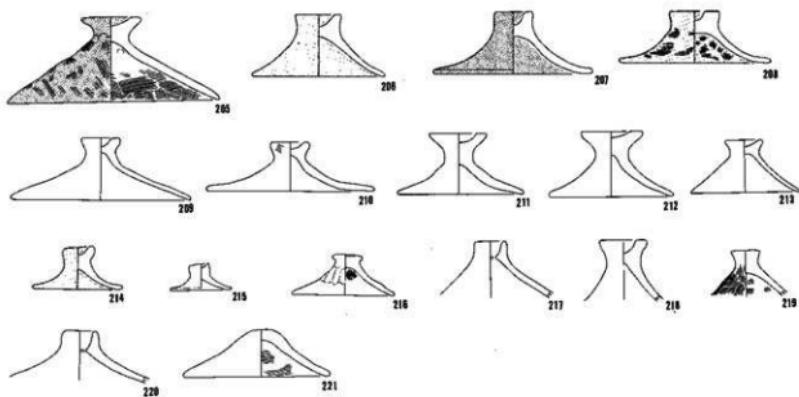
第80図 弥生土器



第81図 弥生土器



第82図 弥生土器



第83図 弥生土器

第3章 平安時代

第1節 遺構

(1) 壇穴住居

第1号住居（第84図）

位置：95年度調査区

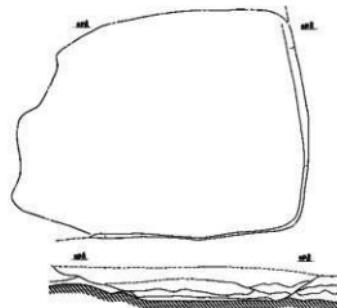
検出：黄色の砂層中にやや黒色味の強い部分が確認され、精査した結果、壇穴住居と判明したが、東壁と南壁を部分的に検出したにとどまる。落ち込みは浅い。

平面形態：残存する壁の立ち上がりから、方形ないし長方形と考えられる。

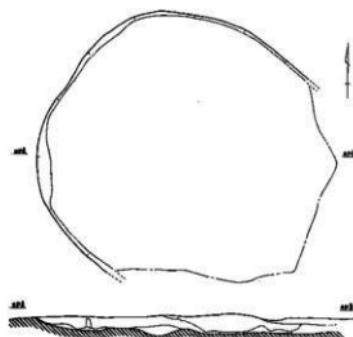
窓：検出することができなかった。

柱穴の配置：柱穴は確認されなかった。

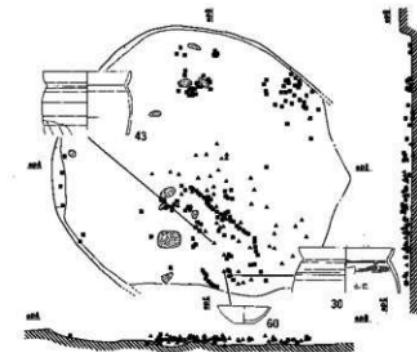
遺物出土状況：検出面から床面にかけての覆土中か



第1

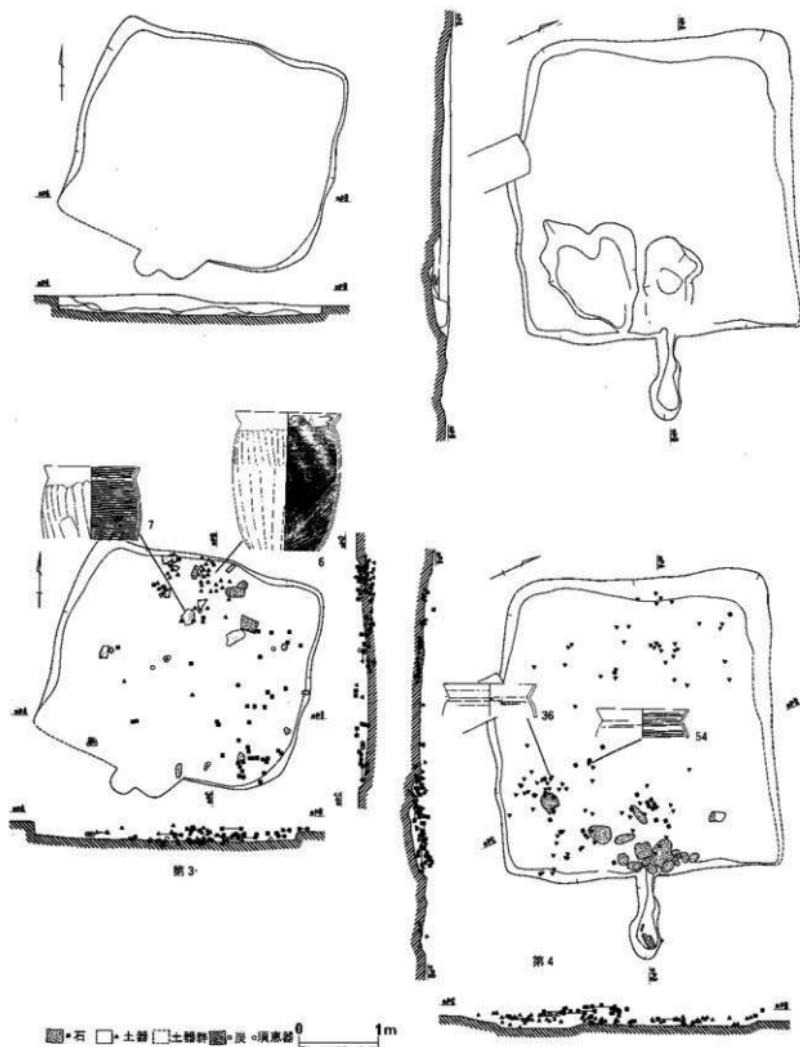


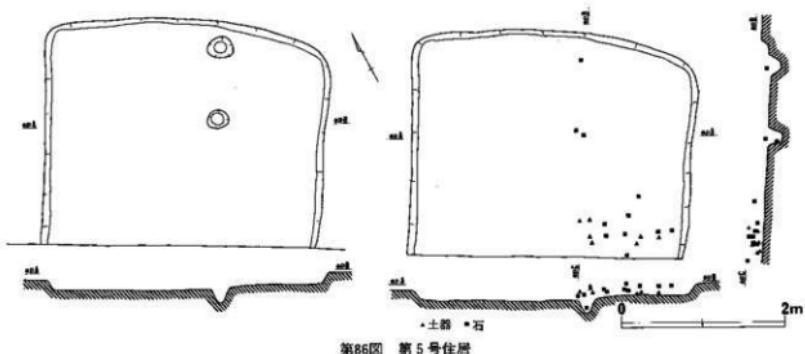
第2



第84図 第1・2号住居





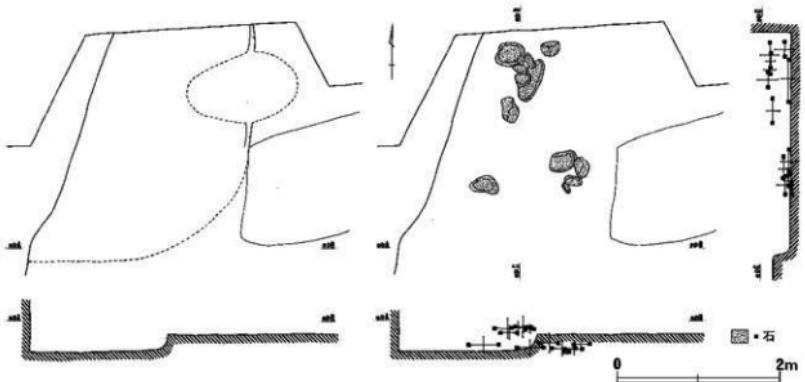
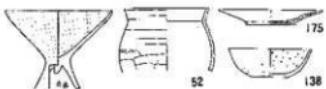


ら構造なく出土している。

遺物：口縁部以上が実測可能なカメ形土器が2個体出土している。

第2号竪穴住居（第84図）

位置：95年度調査区



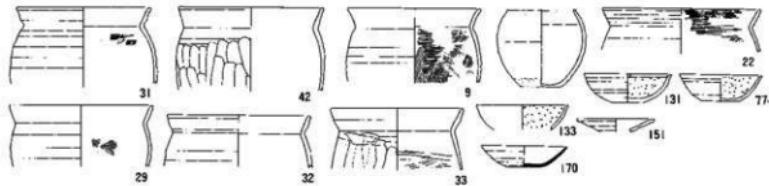
検出：黄色の砂層中に黒色味の強い部分が確認されたため精査し、竪穴住居を確認した。確認状況は悪く、ほぼ半分を確認したにとどまる。掘りこみは浅く、壁の立ち上がりも明確ではない。

平面形態：全体に緩やかな曲線を描くが、これは検

出が困難であったことに起因するものと考えられ、本来は方形か長方形を呈する物であったとおもわれる。

竈：確認されなかった。

柱穴：検出されなかった。



第89図 第6号住居出土の土器

遺物の出土状況：床面よりやや浮いた状況で検出されている。遺物に平面分布にはやや偏りがある。

遺物：カメ形土器2個体、杯1個体が実測できた。30はロクロカメ形土器、胴下半部を欠く。口縁部が内湾するように立ち上がり、頸部に横方向の刷毛目が残る。43もロクロカメ形土器、口縁部が内湾するように立上がり、胴下半部に縱方向の箝削りが認められる。60は底部に回転糸切り痕を残す土師器である。

3号竪穴住居（第85図）

位置：95年度調查區

検出：黄色の砂層中に黒色味の強い土塊を検出し、精査した結果、ほぼ方形を呈することから、竪穴住居と判断した。南壁部分は検出できなかった。

平面形態：4.8×4.5mのほぼ方形を呈する。

竈：南壁中央部に、外側に張り出すように落ち込みがわずかに検出されている。おそらく、この部分が竈であったと推測されるが特に焼土などは確認できなかった。焼土が確認されないのは、掘りこみ面が砂質であるためであろうか。

遺物出土状況：遺物の平面分布は北壁中央部と南東隅に集中する傾向がある。垂直分布は覆土中に含まれるが、北壁中央部分では床面近くで、比較的大きく復元されたカネ形土器が出土している。

遺物：カメ形土器が2個体実測できた。6は長胴のカメ形土器で、頸部以下は二段の縱方向の箒削り、内面上半部には横方向の刷毛目、下半部には縱方向の刷毛目が認められる。7も同様に外面は縱方向の箒削り、内面上半部横方向の刷毛目、下半部は斜め

方向の刷毛目が認められる。

第4号竪穴住居（第85図）

位置：95年底調查區

検出：黄色の砂層中に黒色味の強い部分が確認され、精査した結果、堅穴住居の平面プランを得た。しかし、覆土の大半は失われており、床面直上を確認したにとどまる。

平面形態：4.2×4.2mの方形を呈する。壁の立上がりは明確でなく、床面も明確に確認できなかった。

住居の南東隅の床面に僅かな窓みが検出された。おそらく土壇であったと思われる。

竈：東壁中央部に検出されたが上部の構造は失われ、煙道と袖部を構成した川原石が検出された。竈の底部は橢円形にわずかに窪む。

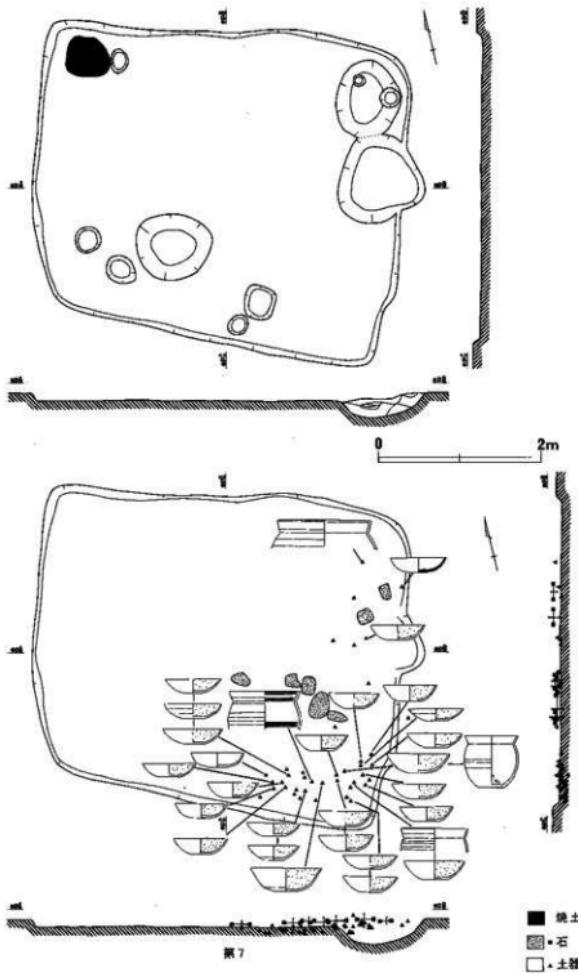
遺物出土状況：覆土中より出土し、特に遺物分布の
かたより等は認められない。

遺物：カメ形土器の口縁部が2個体実測できた。36はロクロカメ形土器、口縁部がやや内湾し、やや分厚い口縁部となる。頸部内面に横方向の刷毛目が認められる。54もロクロカメ形土器で、内面に横方向の刷毛目が認められる。この刷毛目ははっきりしないがロクロの回転によるものと推測される。

第5号堅穴住居（89年1住・第86図）

位置：89年度調查區。

検出：比較的容易に平面プランが確認されたが、場合によっては下層の弥生期の遺構を誤って調査している可能性も否定できない。壁の立上がりは良好であった。



第90図 第7号住居

平面形態：一部が調査区外に広がるため、全形を知れないが、方形ないし長方形をしているものとおもわれる。竈：確認できなかった。

柱穴の配置：柱穴状のピットが2個検出されているが、本住居に伴うものかどうかは判然としない。

遺物出土状況：南東部分の覆土中にかたよる。

遺物：弥生式土器が1個体混在する。52はロクロカメ形土器、胴半部に縱方向の範削りが認められる。175は灰の皿、138は内面黒色処理の杯形土器、杯部下端に手持ちの範削り痕が残り、底部は糸切離痕がのこる。

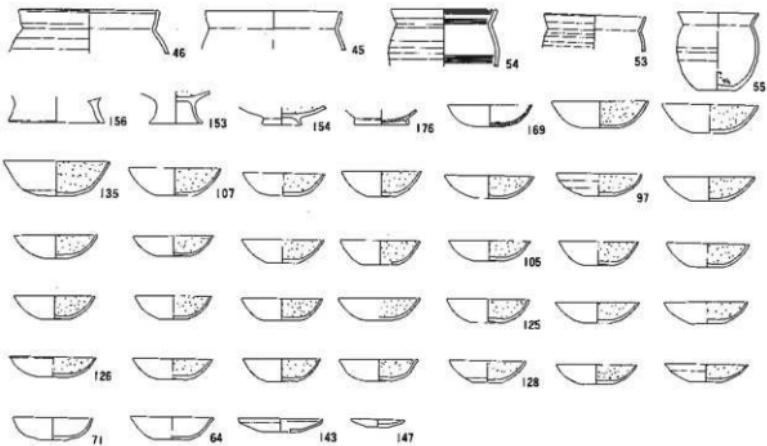
第6号竪穴住居（92年度調査2区第6号住・88図）

位置：92年度調査2区。

検出：当初、構造の存在を確認できず、竈の痕跡を確認して竪穴住居の存在を確認した。確認した竈も搅乱がひどく、わずかに粘土や焼土の範囲と袖石として利用された川原石を確認するにとどまった。

平面形態：確認できなかった。竈：存在は確認したが、搅乱をうけており、袖に用いられた川原石を確認したのみである。

遺物出土状況：竈周辺より出土しているが、調査過程で括して取り上げているため、



第91図 第5号住居出土の土器

出土位置は明確ではない。

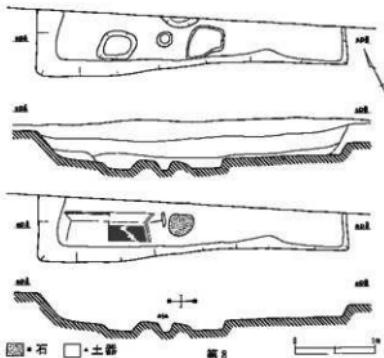
遺物：カメ形土器、杯形土器、須恵器がある。出土したカメ形土器はすべてロクロカメ形土器であるが、形態や整形にバリエーションがある。何れも、胴下半部を欠くために、明確なことはいえないが、笠削り痕が頭部近くにまで認められる33や42、反対に認められない9、22、29、31、32がある。後者は下半部に笠削り痕が認められるかも知れない。全体的には笠削りが残るものは長胴気味、そうでないものはやや短い胴部を持つように思える。口縁部の形態は多様で、やや外反する9、やや内湾する22や29、口縁端部が外反する31や32などが認められる。

杯形土器は何れも内面を黒色処理される77、131、133ものとされない151がある。黒色処理されるタイプの器形はそれぞれ異なる。131、133はやや内湾し、口縁端部が小さく外反する。151は皿状の杯出ある。170は須恵器の杯出あり、糸切離痕が残る。

第7号竪穴住居（第90図）

位置：90年度調査区

検出：方形の落ち込みが明瞭に検出されたが、検出面は床面近くであり、覆土の大半は失われている。



第92図 第8号住居

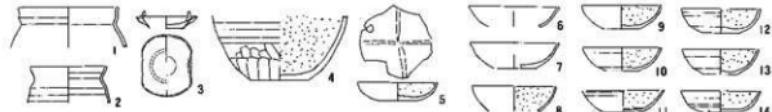
平面形態：3.6×4.5mの不整形な長方形を呈し手いる。壁の立上がりはやや不鮮明である。竪北側及び南西コーナー近くに浅い土坑が検出された。竪北側に位置する土坑は本住居にともなうものであると考えられるが、南西コーナー近くの土坑は判然としない。

窓：東壁ほぼ中央に位置する。袖の芯在材として、

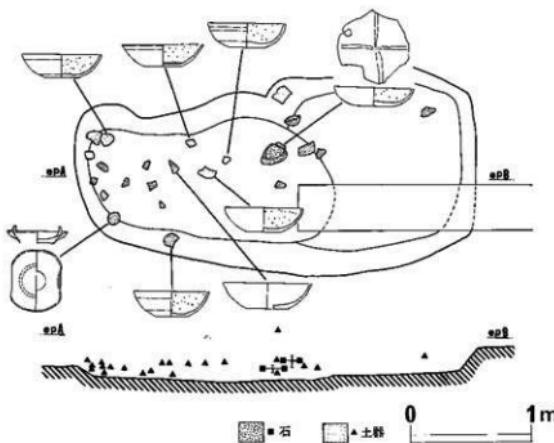
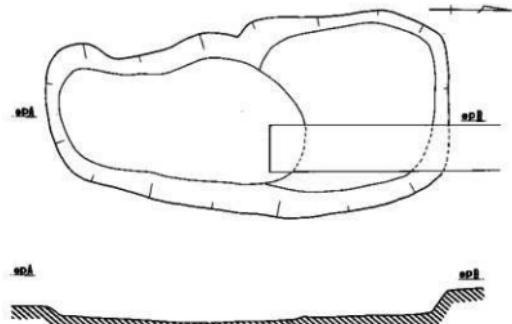
川原石が利用されたのか、川原石が竈付近に散在する。これらの川原石が原位置を保っていないことは明らかである。

竈の底部は $1 \times 1\text{m}$ 、深さ約25cmの土坑状を呈している。

柱穴の配置：南壁側に4個の柱穴状のピットと先述



第94図 第1号土坑出土の土器



第93図 第1号坑

した土坑が床面から検出されているが、本住居に伴うものかどうか判然としない。

遺物出土状況：遺物は南東コーナー付近の床面に集中して折り、その大半は実測することができた。

遺物：カメ形土器、杯が出土している。

カメ形土器はいずれもロクロカメ形土器であり、口縁部はやや厚く、内湾するように立ち上がる。

杯形土器には灰、須恵器、土師器がある。土師器杯形土器には内面が黒色処理されたものとそうでないものがある。黒色処理されたものが圧倒的に多い。

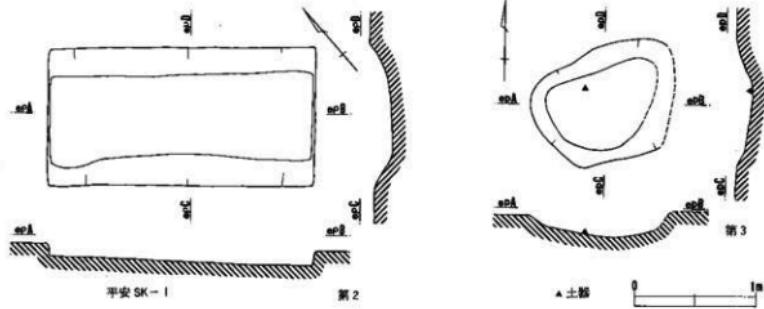
第8号竪穴住居（第92図）

位置：90年度2区

検出：落ち込みは明瞭に検出されたが、検出できたのは極一部であり、大半は調査区外に広がる。

平面形態：全形を知り得ないが、現存する1辺は約3.5mを測る。

竈：検出されていない。



第95図 第2・3坑

遺物出土状況：床面ちかくからカメ形土器が1点出土している。

遺物：出土したカメ形土器(3)は口縁部がくの字状に外反し、頸部以下の内面に刷毛目痕が残る。

(2) 土坑

第1号土坑（第93図）

位置：90年度調査区

検出：シミ状の不整形な落ち込みで、遺構かどうか判断に迷った。当初は一つの遺構と判断し、調査を進めたが、結果的には二つの土坑であることが判明した。検出面から掘りこみは約20cmと深い。

形状：遺構全体では $150 \times 80\text{cm}$ の不整形を呈するが、約 $120 \times 60\text{cm}$ 程度の楕円形の土坑約 $80 \times 80\text{cm}$ のほぼ方形の土坑が切りあったものと思われる。

遺物出土状況：カメ形土器の破片、杯形土器の完成品や破片が覆土中から出土している。遺物：カメ形土器、杯形土器、耳皿が出土している。

カメ形土器はいずれもロクロカメ形土器である。1は頸部以上の破片であるが、口縁部にロクロ目が残り、口縁部は垂直気味に立ち上がる。2も頸部以上の破片であるが、形部付近までロクロ目が認められ、口縁部は内湾するように立ち上がる。4は胴下半部であり、下端部に縦方向の窓削りが認められる。

杯形土器には内面黒色処理されたものとそうでな

いものの二者がある。

第2号土坑（第95図）

位置：95年度調査区

検出：黄色の砂質土壌に黒色の落ち込みが明瞭に確認された。検出面からの掘りこみは浅く、覆土の大半が検出時に失われてしまったものと思われる。

形状： $60 \times 110\text{cm}$ の方形を呈する。長軸方向の壁の立上がりは急角度であるが、短軸方向の壁の立上がりは緩やかである。

遺物：遺物は出土していない。

第3号土坑（第95図）

位置：95年度調査区。

検出：黄色の砂質層中に検出されたが、検出面からの掘りこみは浅く、壁の立上がりは不明瞭である。

形状： $50 \times 60\text{cm}$ の不整楕円形を呈し、断面形状は皿状を呈している。

遺物：遺物は検出されなかった。

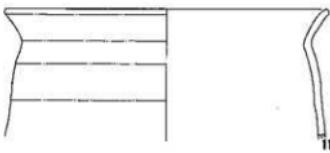
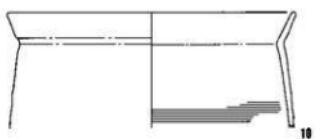
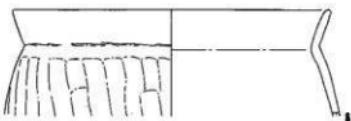
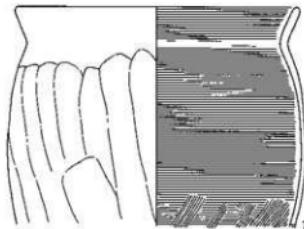
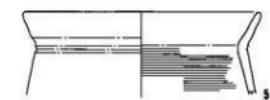
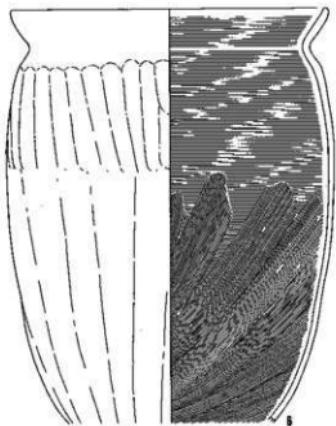
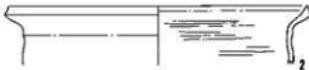
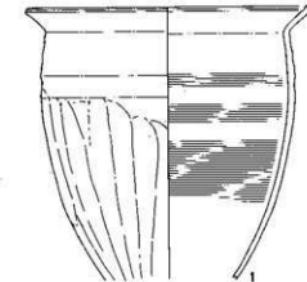


図96 「平安時代の土器」

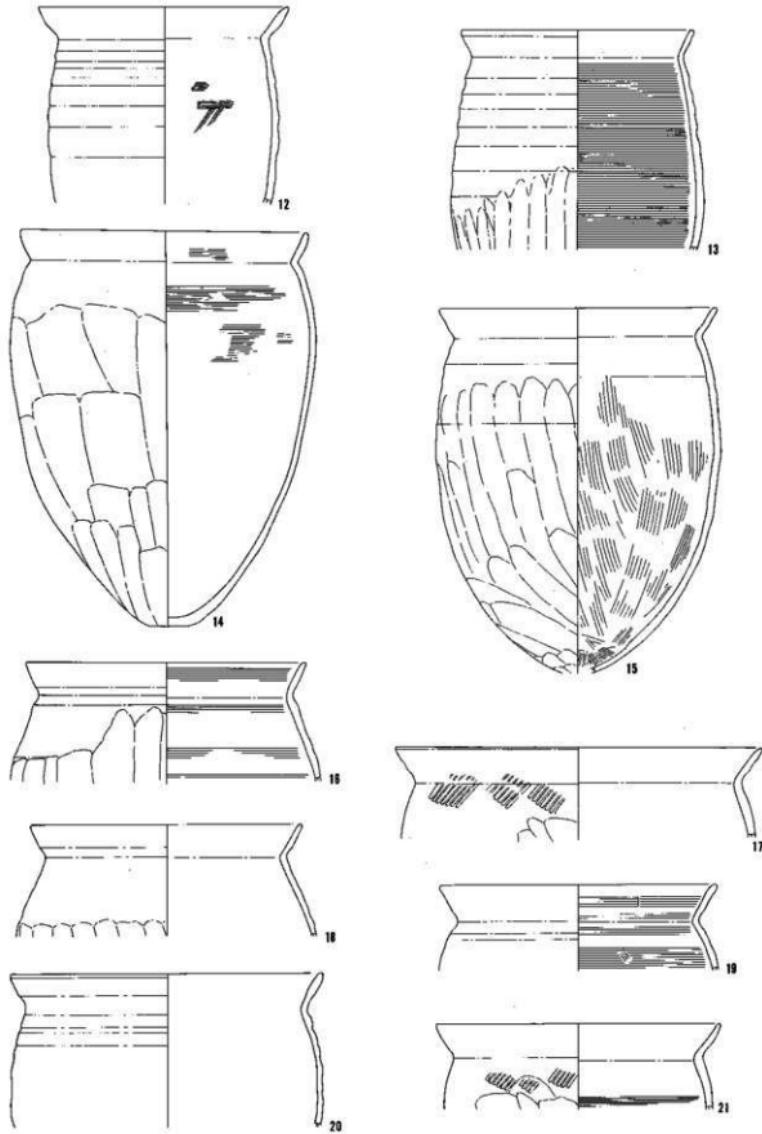


図97 「平安時代の土器」

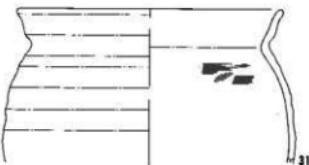
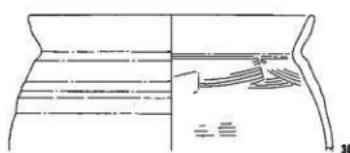
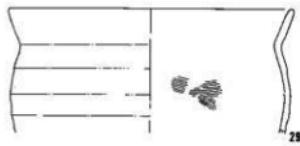
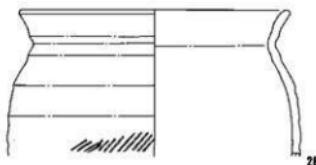
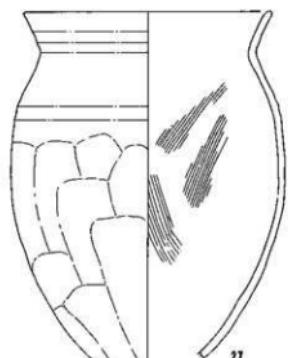
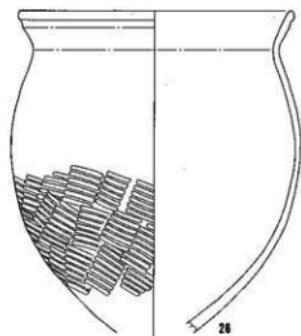
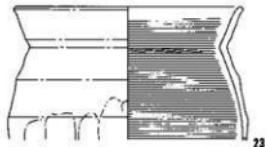
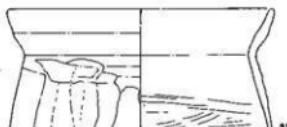


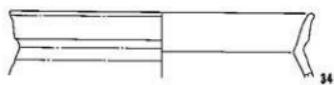
図98 「平安時代の土器」



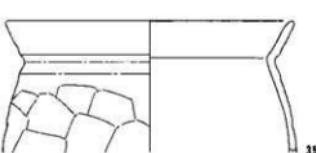
32



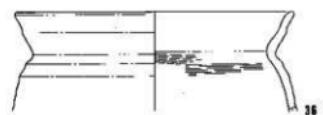
33



34



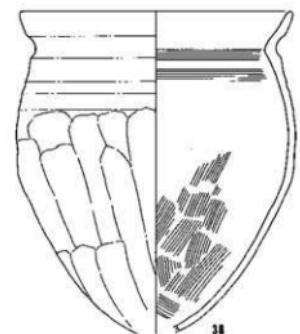
35



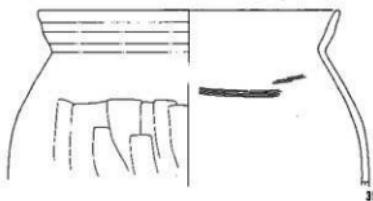
36



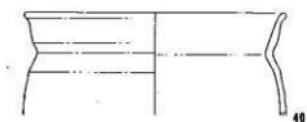
37



38



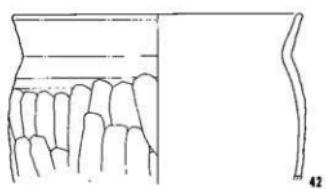
39



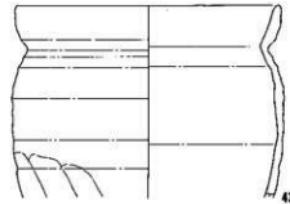
40



41



42



43

図99 「平安時代の土器」

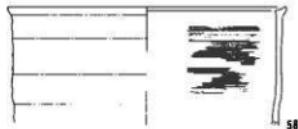
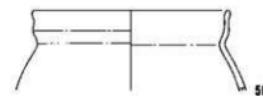
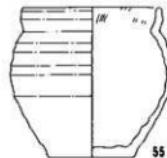
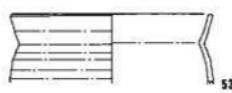
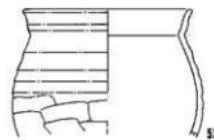
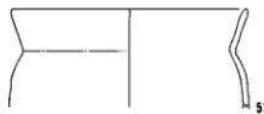
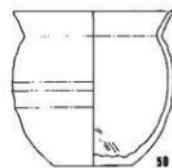
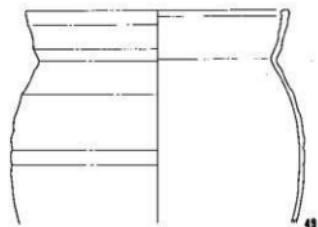
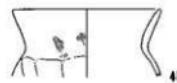
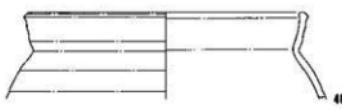
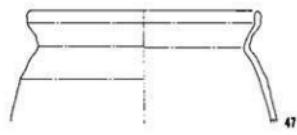
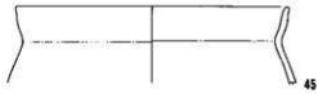
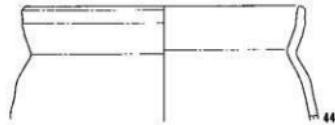


図100 「平安時代の土器」

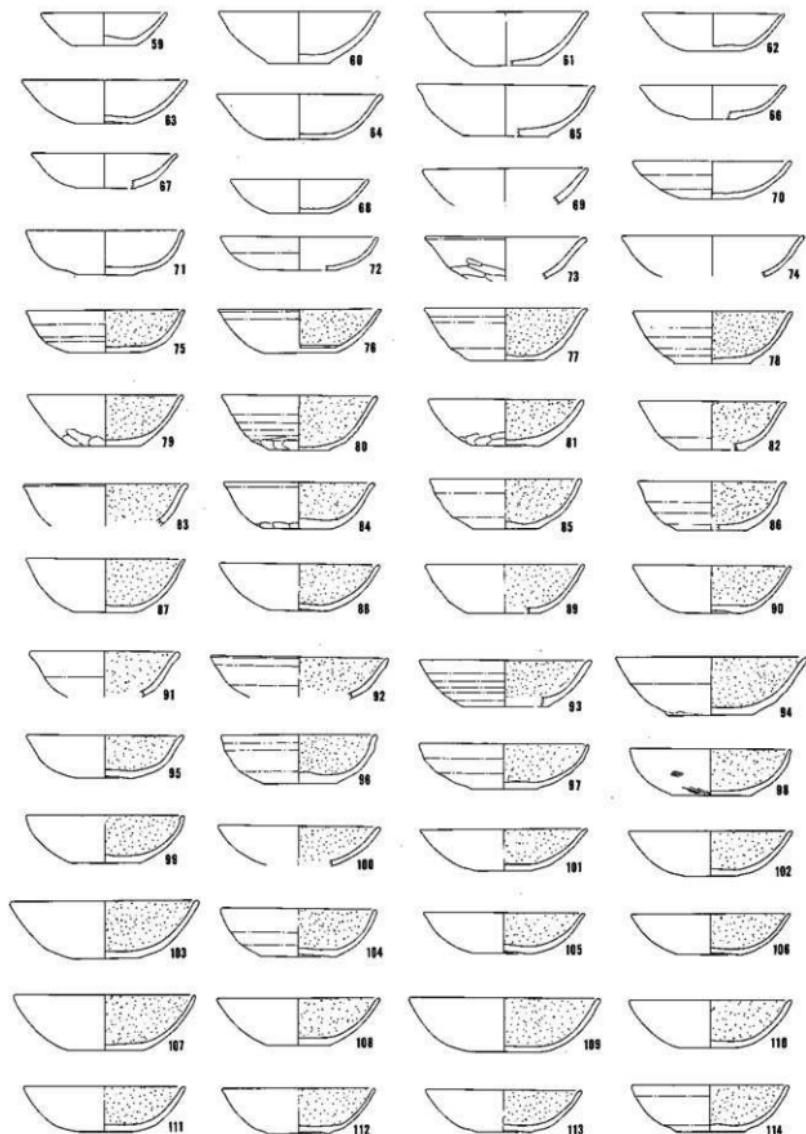


図101 「平安時代の土器」

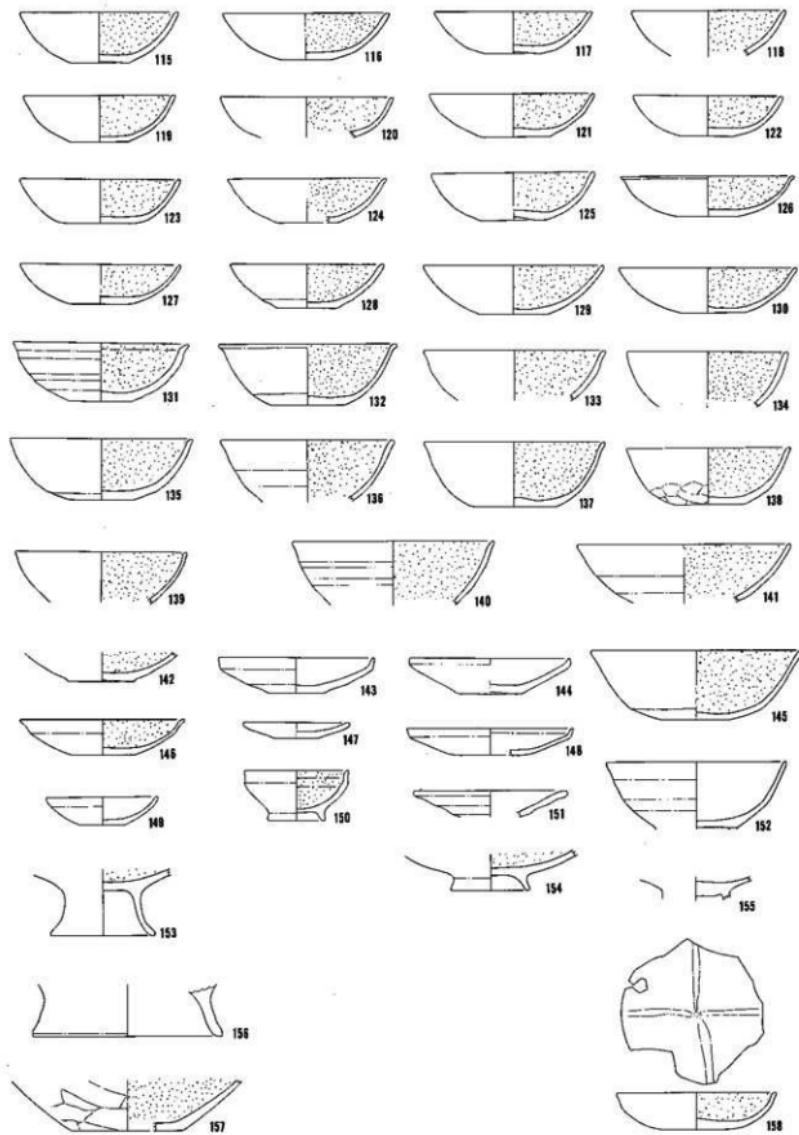


図102 「平安時代の土器」

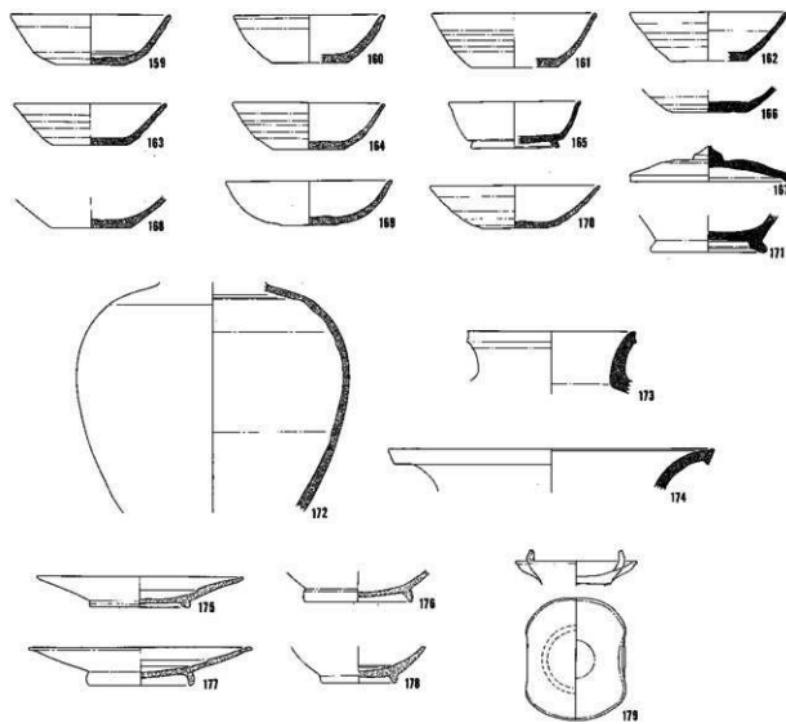


図103 「平安時代の土器」

第4章 中世

1 遺構

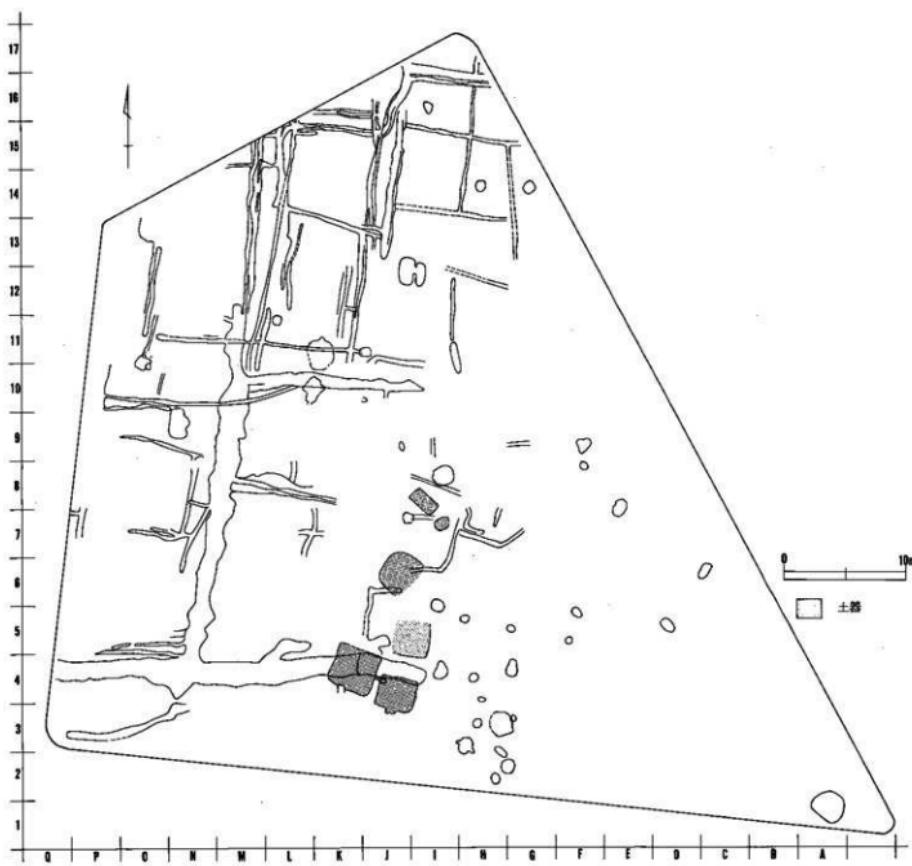
(1) 検出状況

今回報告する中世の遺構は95年度に調査した児童

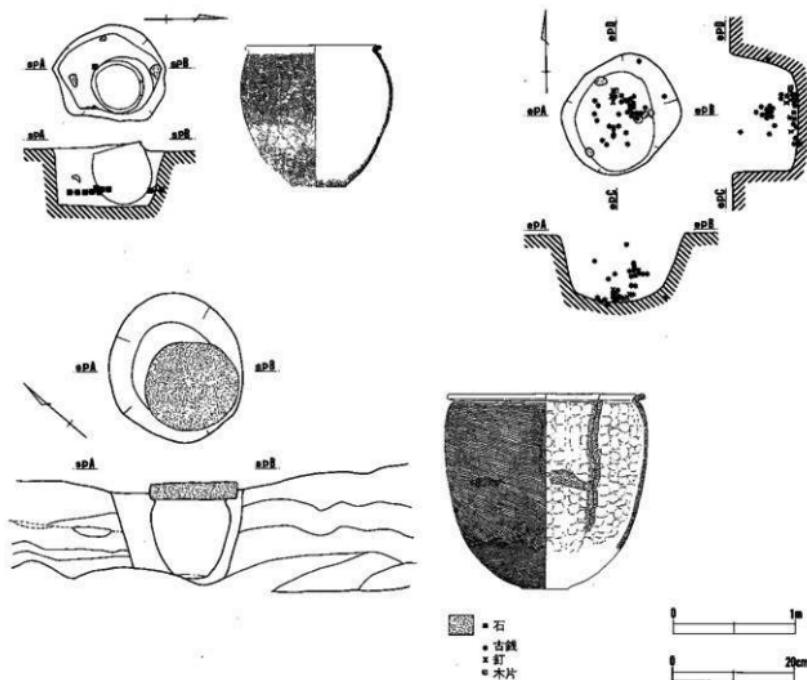
公園2号建設予定地の部分に分布するものである。
この調査区以外では中世遺構は明確に把握できていない。

この調査区からは溝、一括埋納錢、井戸、墓、土坑、大量の柱穴などが検出されているが、これらは個々に切り離された存在ではなく、一単位の空間を構成していると考えるべきであろう。

そして、遺構群の中で、特に注目すべきは溝が構



第104図 児童公園2号建設予定地内



第105図 一括埋納鉄

成するある種の区画であろう。それぞれの溝は複雑な切り合いをもつてはいるが個々に独立したものではなく、近接する時間帯における造り替えや修復として考えられるのではなかろうか。

現時点では溝がある種の区画のために用いられたものではないかと考えられるが、溝が区画する空間がどのような機能を果たしていたのかは明らかではない。

遺構検出面は砂礫層から急激に砂層、あるいは粘土層にと変化するとともに、乾燥するとほとんど遺構の輪郭を確認できなくなるなど、層状地特有の土壤堆積をしており、遺構の検出が困難な局面が多々あった。

特に南西部部分の検出面は拳大の砾はじりの検出検

出面であり、遺構確認が極めて困難であり、ようやく図示した溝等を確認したにとどまる。場合によっては調査区北半分と同様に溝が存在していた可能性も否定できない。

(2) 溝と区画

溝の規模や断面形態には若干のバリエーションが認められる。まず、調査区の南西部に見られる幅の広い溝とその他の溝に大きく分けられるであろう。しかし、形態の異なっているが、それぞれの方向は一致しており、両者間に何らかの関係があることは容易に想像することができよう。我々は幅の広い溝を細い溝が徐々に雨水等によって侵食されたものと

を考えている。おそらく、この調査区では最も新しい段階で埋没したものと考えている。幅の広い溝からは第115図の内耳鍋が検出されている。

南北方向に延びる溝は地図上の南北軸とほぼ一致するが、東西方向の溝は南北方向の溝には直交せず、それではいる。

2本の溝が平行して延びている部分が何箇所かで認められる。検出当初は道路の区画溝ではないかとも考えたが、作り替えの可能性が高いのではないかだろうか。

調査区の北側部分では、溝がある種の区画を構成しているように見える。確認数は少なく、規模もまちまちであり、明確に区画であると断言できるほどの基礎性は認められないなど課題はあるが、それぞれの溝の構築時期にそれほどの時間差がないことから、区画を構成するために溝が造られたと判断した。

区画の個数を正確に数えることはできないが、4辺に溝が認められるものは5個ある。それぞれ約8×12m、約12×12m、約12×8m、約14×14m、約21×14mの規模である。

また、調査区外に広がるために区画とは断言できないが、その可能性が強いものが5個ある。

これらの区画のうち、三つの区画から、それぞれ一括埋納銭が出土している（木箱2、珠洲カメ1）。

2 一括埋納銭

調査区では、合計4箇所から一括埋納銭が検出されている。また、発掘以前の調査区内の二箇所から耕作中に発見された埋納銭あり、隣接する畑からも発見されている。合計する調査区部分では合計7箇の一括埋納銭が発見されたことになる。

第1号埋納銭

1989年の調査で、児童公園2号建設予定地の北に隣接する道路予定地から検出されたものである。重機による表土剥ぎ段階で検出された。

収納容器として木箱（34×43×23cm）が用いられ

ている。木箱は一回り大きく掘られた土坑に埋められ、樹皮（杉皮？）の蓋がしてあった。

89年度の調査時点では検出されていないが、96年度調査の結果から考えると、埋納銭は溝による区画内に位置していたものと考えられる。

第2号埋納銭（第105図）

1996年度調査の児童公園2号予定地から出土したもので、第1号埋納銭から、直線距離にして約25mの距離にある。

収納容器として、珠洲焼きの大カメが用いられている。カメは約90×80cm、深さ約60cmの土坑内にやや傾くように埋設されていた。

検出時にはすでに古銭が露出していたが、樹皮と思われる小片が古銭の表面にわずかに残る部分があり、樹皮で表面が覆われていたことがわかる。

第3号埋納銭（第105図）

1996年度調査の児童公園2号建設予定地より出土している。第2号埋納銭より直線距離で約8m離れ、第2号埋納銭が検出された区画の隣に区画にあたる。100×80cm、深さ約60cmの土坑内から古銭約100枚と鉄釘、木片が検出されている。

おそらく、長方形の木箱の中に埋納されていたものと思われるが、柱穴状の遺構によって壊されており、判然としない。

出土した古銭の枚数も少なく、柱穴状の遺構によって壊された際に抜き取られてしまった可能性もある。

第3号埋納銭

調査以前の工事によって、すでに掘削されていた溝の底から珠洲焼きの菱形土器とその内部に古銭が一枚だけ張り付くように検出された。以前の表面調査で採集した破片と接合することができた（112図4）。

以前の工事の段階で古銭が出土したことはないと思われる。いわゆる一括埋納銭とは正確が異なるもの

なのかもしれない。

3 墓

1996年度調査の児童公園第2号建設予定地より、検出されている。

直径約120cm、深さ約80cmの土坑内に、直径約75cm、厚さ約15cmの円形に加工された石蓋がなされ、大型の珠洲焼きの甕が検出された。甕の中には人骨が埋納されていた。

4 井戸

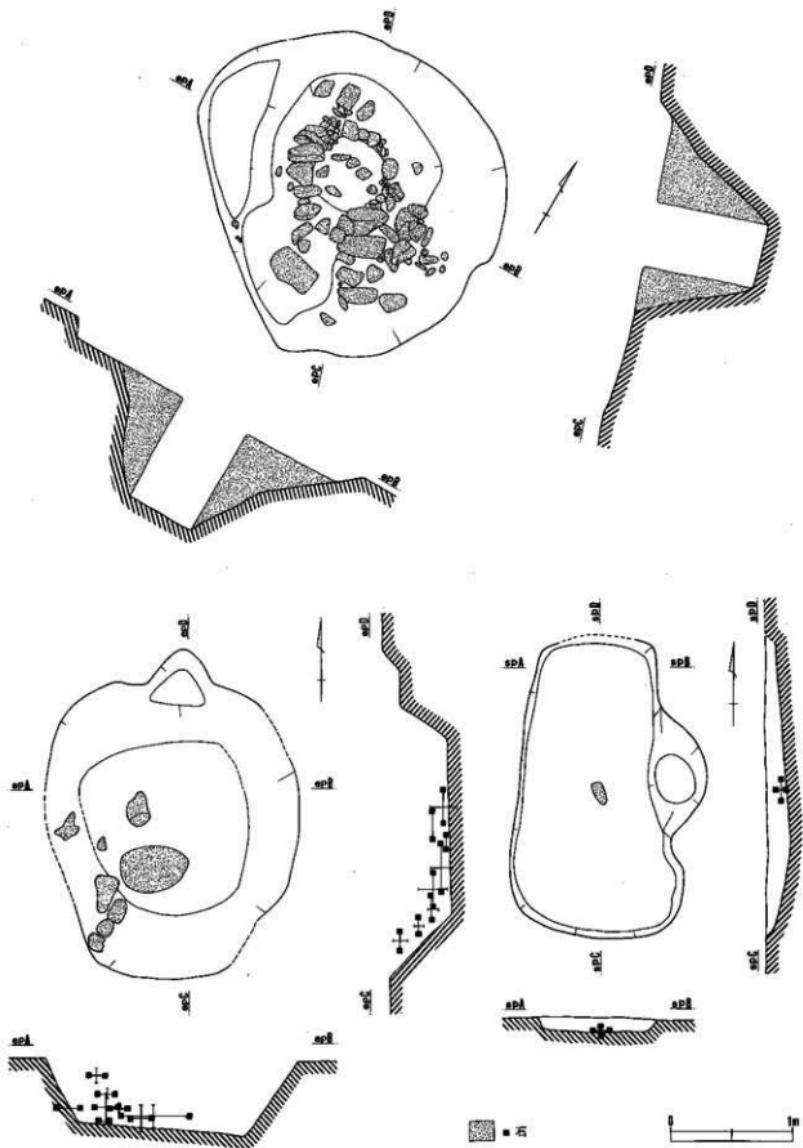
直径約240cm、深さ約90cmのスリ鉢状の土坑内に直径約100cmの円筒形に石が積み上げられていた。

5 小結

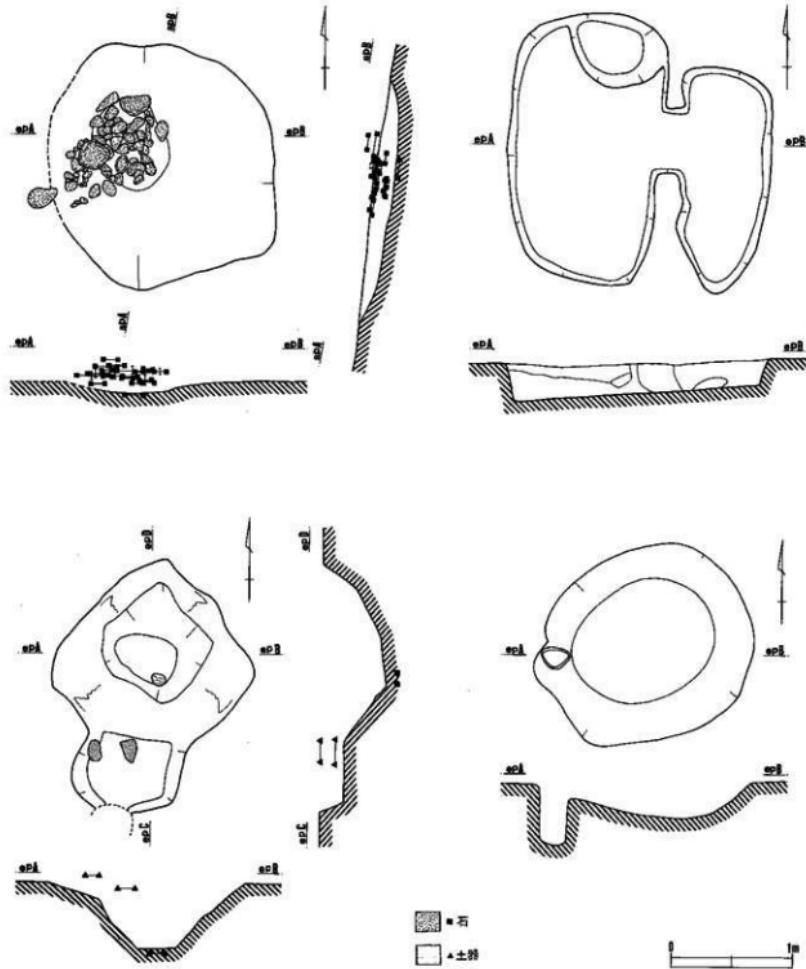
中世の遺構は1996年度調査の児童公園予定地を中心まとめて検出されている。

その遺構群を特徴づけるのは区画を形成するようにはしる溝と一括埋納戔である。今日多くの人々の関心を集めている一括埋納戔も、他の遺構との関係した形で検出された埋納戔出土例は希で、その意味でも溝の性格は大きな課題である。

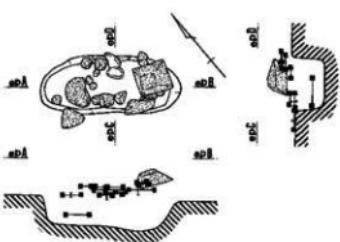
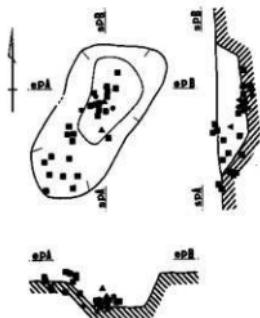
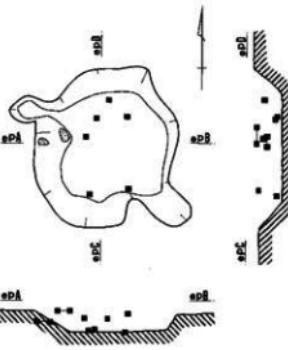
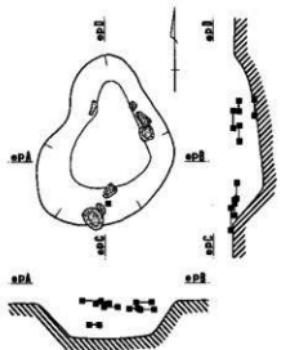
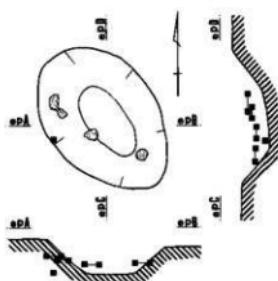
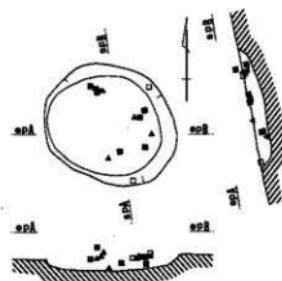
調査においては柱穴状のビットが多数検出されたが、いずれも規則性に貧しく、建物跡を復元することはできなかった。特に、溝が区画する部分については柱穴等別の遺構がないか精査したが、柱穴状のビットは検出したが、建物跡は復元できなかった。残念ながら現時点では、溝や区画の性格を断言することはできない。



第106図 井戸、土坑

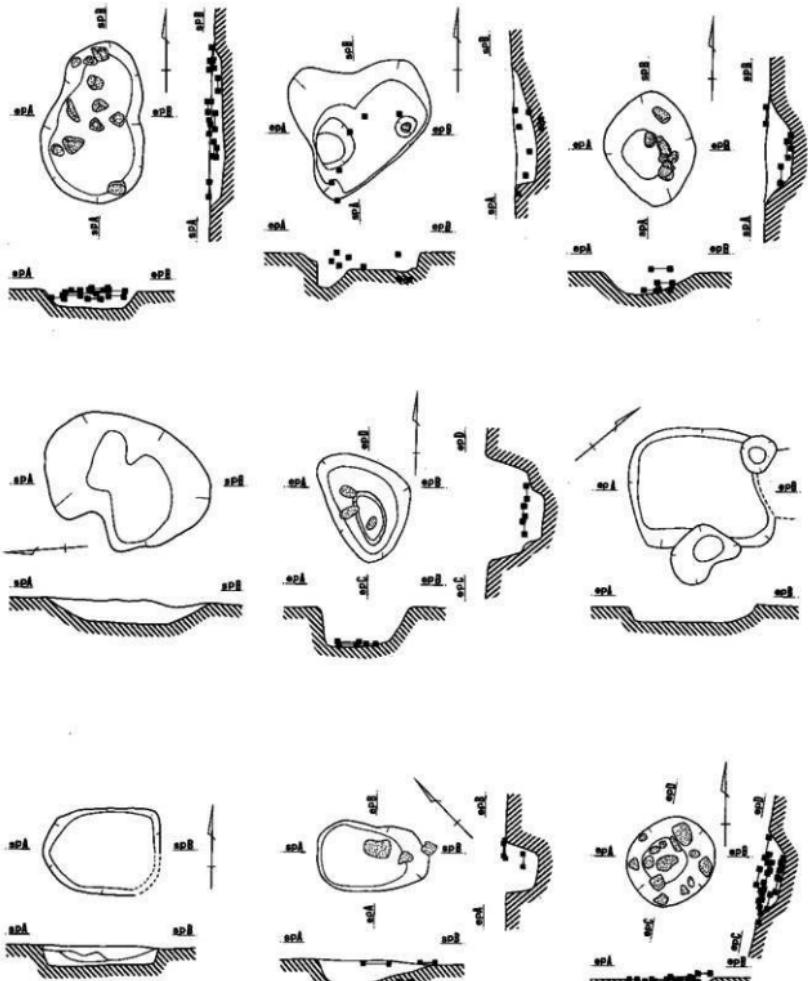


第107図 土杭

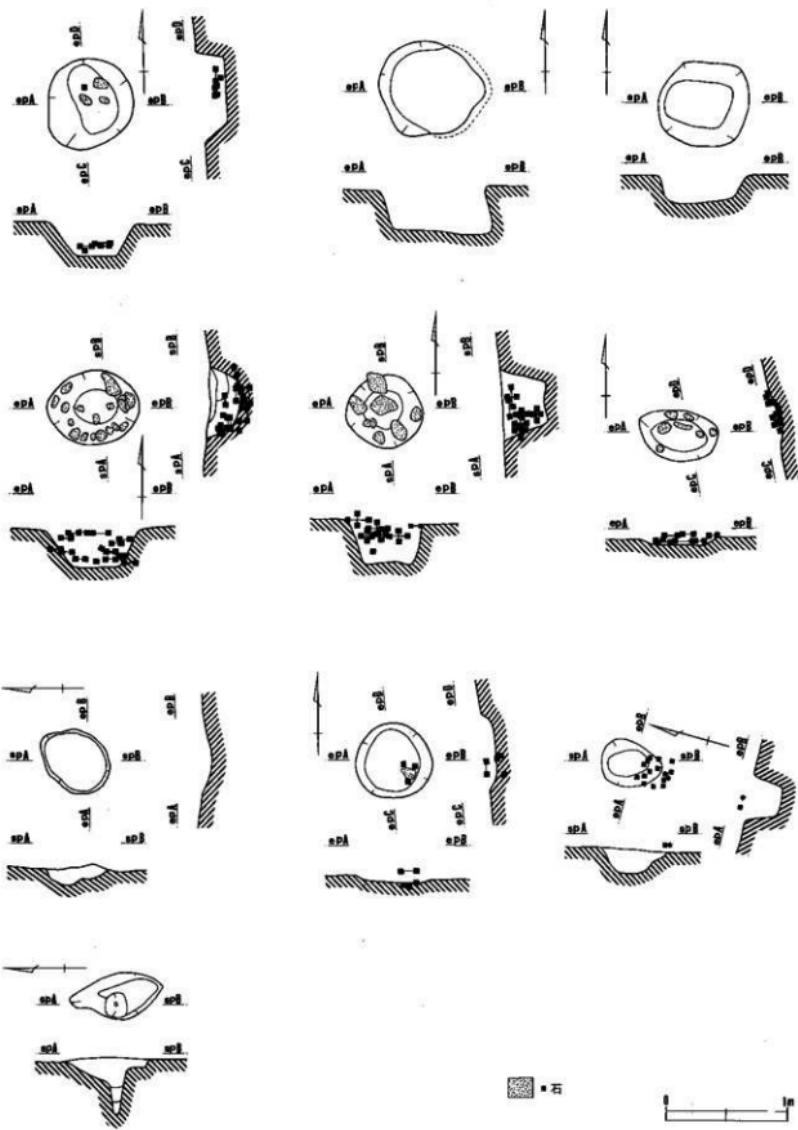


■ 石
▲ 土器
□ 骨
● 古錢

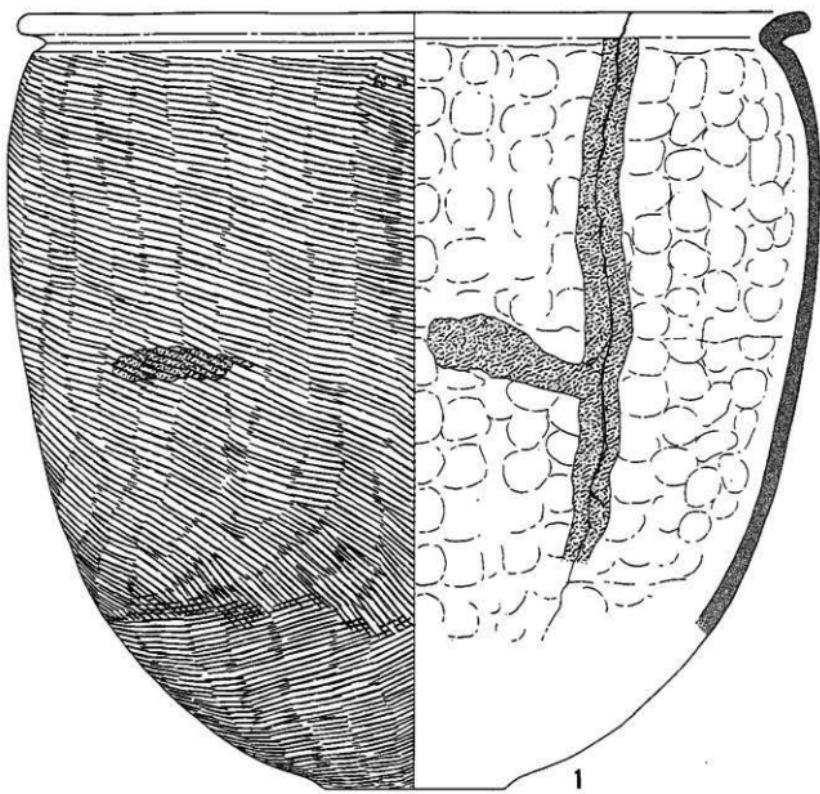
第108図 土坑



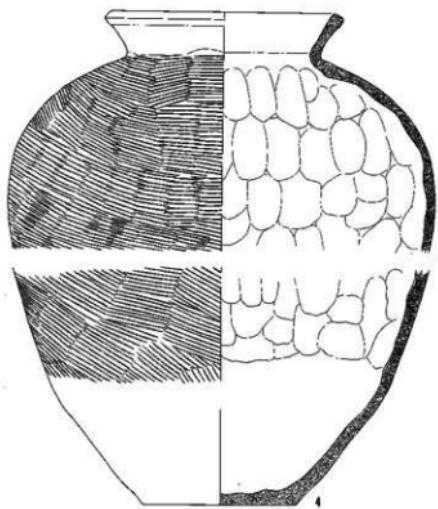
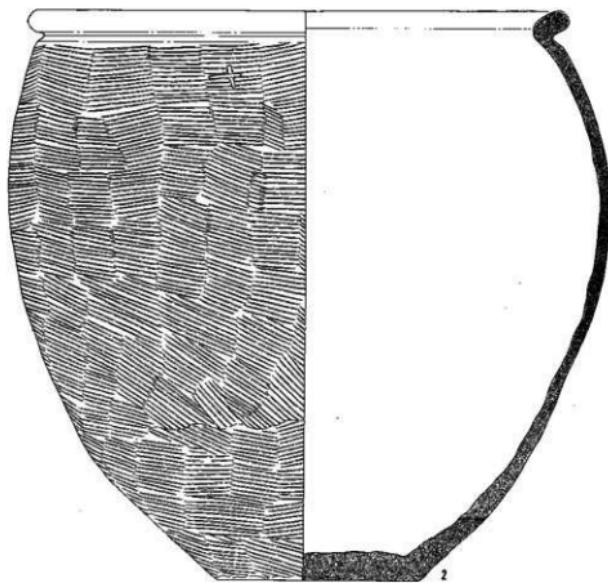
第109図 土坑



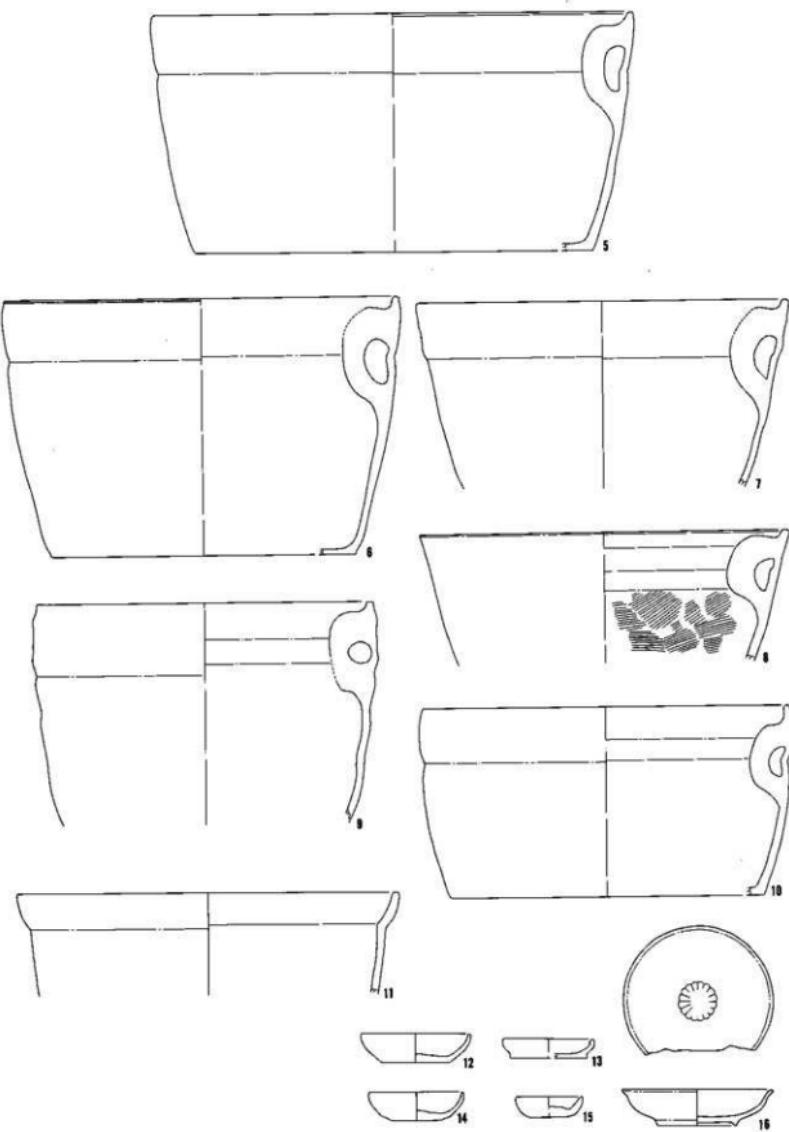
第110圖 土坑



第III圖



第112図



第113図

第5章 第1号埋納銭について

1 1さしの枚数について

当該遺跡で出土した3万4千枚の銭貨群は、銭さしの枚数がほぼ完全な形で確認できる点に大きな意義がある。木箱に詰められた銭さしは全部で341さしを数えているが、その銭さしの分布をみたのが表1、集計したものが表2である。

表2によれば、銭さしの69.2%が97省百法、つまり「銭貨97枚で百文とする慣用法」が適用されたものであることがわかる。その一方で、下限は1さし87枚、上限は111枚までと、1さしの枚数分布も広範囲に広がることが示されている。

また、表1によると、この銭さしの分布にも段毎に著しい差異があることがわかる。つまり97省百法の銭さしは5段、6段、7段、8段、9段に集中しているのであり、特にこの計5段だけに限ってみると、「97省百」さしは9割を占めているのである。一方、百埋以上の銭さしは1段、3段、4段に多く分布しており、5～9段にはみられない。

こうした種々の不自然さは、第一章で述べた通り、発掘時の取り上げから整理作業に至るまでの取扱い上の疎漏に多く因ることは否めない。しかし、5～9段に限って考えれば、この5段における「97省百法」の集中は、当時の銭貨慣用の状態をそのまま反映している、あるいは詰合する際に「97省百法」を意識して銭さしを作成したと考えることもできる。

本例におけるさしは藁でゆったものであったが、後にも若干触れるが、この材質がすべて均質であることから、同時に一括して作成されたものと思われる。このことは、1さしの先端から末端までの銭貨の内容組成に均等性がみられることからもいえる。

これまで銭さしの枚数が確認できる中世出土埋蔵銭が幾つか報告されている。そしてその多くが「97

省百」を意識したものであった。しかしながら、今回の場合、枚数の確認ができるさしの点数の多さ、そのうち「97省百」の占める割合の高さ、のいずれをとっても比類のないものである。

それでは、「97省百さし」以外の銭さしの存在は、果して単に取上げミスであると看過することができるだろうか。

前述のとおり、5段から9段までの銭さしの分布を勘案すれば、1さし87枚～90枚と1さし100枚以上の銭さしは、取上げ上のミス、例えば①パワーショベルによる衝撃、②切断されたさしの断片が違う列に紛れ込んだ、③上段の銭貨が下段のさしに混入する、などの可能性は高い。しかし、信憑性の高いと思われるこの計5段のさしの状況をみれば、かならずもすべての銭さしが「97省百」であったとするには躊躇をおぼえる。例えば、6段目をみると全36さしのうち「97省百」が29さしと圧倒的に多いが、その残りの7さしのうち、A-1、A-9、A-11、B-8、B-9、B-12の6さしが「98省百」適用のさしであることを考えると、これを単に取上げミスと一概に片付けることは出来ないのである。

5段～9段におけるこうした枚数の誤差は以下の可能性が考えられよう。

①さし作成者の計算ミス

②さしを枚数で作成するのではなく、重さを基準にして作成したのではないか

③さしのうち、ワレ銭やカケ銭など劣悪銭を含む分を増したのではないか

④百文さしの慣行には地域的な相違があり、銭さし自体様々な銭さしが百文さしとして流通していたのではないか

⑤に関しては第2項で触れた。また、⑥については全体でワレ銭が3例のみみつかったが、それが流通当時ないしは埋蔵直前の状態であったと考えるよりは、埋蔵後の過重な耐久による破損の結果とみている。従って、本例では所謂「地悪銭」は存在せず、すべて「精銭」のみであると考える。

⑦に関しては、今回の埋蔵銭を「さし自体が同時

	1段	2段	3段	4段	5段	6段	7段	8段	9段	10段	
A-1	370g	96枚	370 97	405 107	410 108	370 97	381 98	360 94	370 98	360 97	405 106
	2	375	97 375 97	385 100	395 103	365 97	370 97	365 97	370 97	365 97	365 97
	3	375	97 370 97	365 97	390 101	370 97	370 97	370 94	370 97	365 97	400 107
	4	375	100 385 99	345 91	365 97	370 97	375 97	355 94	375 99	365 97	365 98
	5	385	100 375 98	400 105	370 97	370 97	370 97	365 97	370 97	370 97	365 98
	6	360	95 370 97	390 103	415 108	370 97	365 97	370 97	370 97	360 97	
	7	345	90 375 97	380 99	400 106	370 97	365 97	375 97	370 97	360 97	
	8	375	98 370 96	405 106	385 100	370 97	375 97	370 97	375 98	355 97	
	9	375	97 375 97	420 109	390 104	365 97	370 98	370 97	370 97	365 97	
	10	365	97 365 94		340 90	370 97	365 97	375 97	365 97	365 96	
	11	380	98 365 97		365 97	380 97	370 98	380 97	375 98	370 97	
	12	380	97 375 97		375 97	365 97	370 97	370 97	365 97	360 97	
	13	375	100		a 380 99					360 97	
	14	390	101		b 415 111					360 97	
B-1	375	97	370 97	385 101	340 89	375 97	365 97	365 97	370 99	370 97	410 108
	2	385	101 370 97	365 97	365 94	385 98	370 97	370 97	365 97	370 97	370 97
	3	410	107 370 97	395 105	370 98	370 97	375 97	375 97	360 97	370 97	365 97
	4	375	97 375 97	390 102	365 95	375 97	360 96	370 97	370 97	370 97	365 97
	5	365	96 370 97	385 101	385 99	370 98	375 97	375 97	370 97	365 97	360 96
	6	375	98 370 97	405 106	400 105	375 97	375 97	380 97	370 97	365 97	365 97
	7	360	98 375 97	375 100	365 97	375 97	370 97	370 97	365 97	370 97	370 97
	8	375	97 370 97	370 97	390 102	375 97	370 98	375 97	375 97	365 97	365 97
	9	375	97 370 97	385 101	400 104	370 97	370 98	370 97	365 97	365 97	370 97
	10	380	99 370 97	375 97	375 105	370 97	365 97	365 95	370 97	365 97	360 97
	11		370 97	365 97	420 110	370 97	370 97	375 97	370 97		360 97
	12		375 97		365 97	365 97	370 98	370 97	365 97		380 100
	13			c 355	94						
	14			d 375	97						
C-1		365	97	380 99	410 109	365 97	365 97	370 97	370 97	380 97	365 97
	2	370	97	370 97	390 100	375 97	365 97	370 97	370 97	365 97	370 98
	3	370	97	375 97	365 97	370 97	370 97	370 97	375 97	375 97	405 108
	4	370	97	365 97	380 99	370 97	375 97	375 97	370 97	370 97	370 98
	5	375	97	370 97	375 97	370 97	370 97	370 97	365 97	370 97	370 98
	6	380	100	375 97	390 102	365 97	370 97	370 97	370 97	375 97	395 105
	7	375	97	370 96	410 107	365 97	370 97	375 97	370 97	365 97	360 97
	8	375	97	365 94	395 105	370 97	370 97	380 98	365 97	365 97	365 97
	9	370	97	375 97	370 97	370 97	370 97	370 97	370 97	365 97	365 97
	10	360	94	380 97	375 97	365 97	375 97	365 97	365 97	365 97	365 99
	11	370	97	380 97	370 97	365 97	365 97	375 97	365 97	370 97	330 87
	12	375	97			375 97	365 97	370 98	365 97	370 97	
	13			e 370	98						
	14			f 375	97						
段割さし 平均重量	375g	371.7g	370.2g	382g	370.4g	369.7g	370.4g	369.3g	366.4g	371.6g	
97省百 平均重量	374.4g	371.5g	372g	368.5g	370g	369.7g	371.4g	368.4g	366.4g	365g	

表 I ひとさしの重さ(単位:左側 g/右側 さしの枚数)
 例:3.75gで計算すると、375g—百匁、370g—九九匁、365g—九七匁)

指しの枚数	87	89	90	91	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	計
指しの分布	1	1	2	1	8	3	7	236	26	12	9	6	3	2	2	6	4	4	4	2	1	1	341指し

表 2 錢指しの枚数分布

に一括して作成されているであろう」とする推定と矛盾しそうである。しかし、当時流通していた銭さしを纏だけ一括して取り替えて新しくしたものがこの埋蔵銭であると考えると納得がいくのではないか。

しかし、当該地方において「97省百」慣行が行われていたことだけはあきらかな事実であり、その慣行を念頭に置いてこのような詰め方がされたのである。こうした慣行は史料として小木曾庄における注文でも確認できる。²

2 さしと重さの関係

表1によると、銭さし1さしの平均重量は372 g (99匁) であり、段毎のさし平均重量も382 g から366 g の間に分布している。

銭さしを「97省百」に限ってみる。「97省百」慣用の236さしを重量別分布によって示すのが図1である。これからみても「97省百」の銭さしが365 g

から375 g の間に9割以上集中していることがわかる (97匁～100匁に相当)。

段別にみたものが図2である。上部の段ほど375 g さし、380 g さしといった幾分重量のある「97省百」さしの占める割合が高くなっている。一方、下段にいくに従い重量のあるさしの占める割合が減少し、やや軽量の「97省百」さしの割合が高くなっていることが指摘できる。同じ銭箱の中に詰められた「97省百」であっても、それぞれ重さに若干の異同がみられるのである。特に、10段に重ねられたうち上部に近いほど「重い」銭さしであり、下段ほど「軽い」傾向があるといえる。最上段である1段目はほぼ百匁であり、最下段である10段目に比すると、およそ10 g 程度の差がみられる。これは銅銭の酸化によるものと考えられる。あるいは詰め合せる際、恣意的に百匁の「97省百」さしを最上段に置いた心理的な要素もないとはいえない。そう考えると百匁=百文=97枚という基準が存在した可能性も考え

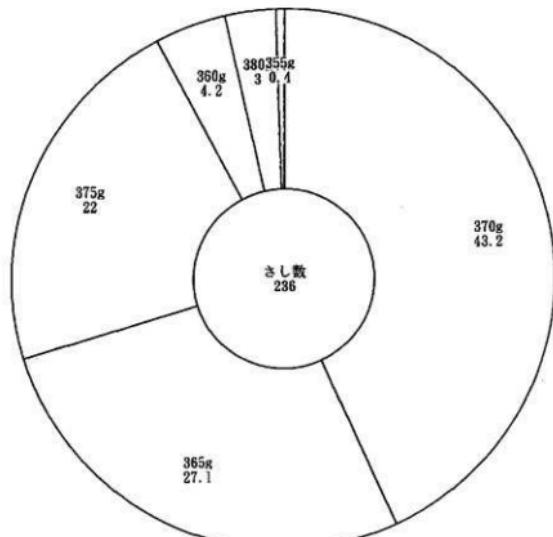


図1 「97省百」の銭さしの分布 (単位: %)

(単位: %)

100

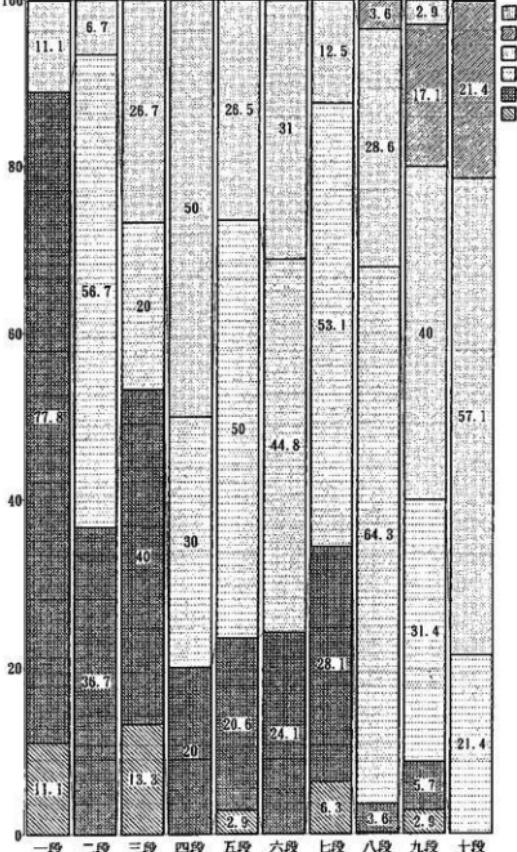


図2 「97省百」銭さしの分布(段別)

られる。

3 銭種について

表3によると、本遺跡では3万4千枚中53銭種が存在している。

一方北宋銭の占める割合は3万4千枚中95%であ

る(図3)。出土埋蔵銭が北宋銭によってその多くを占められることは既に指摘されているが、このように9割を超える例は貴重である。

北宋銭がこれほどまで大量に母体を占有している理由は、第1に本出土銭が明銭を含まないことにによると思われる。年代設定銭種は至大通宝(拓本No.103、初錢1310年、元)であり、それより判断すれば、この銭貨群が埋蔵された実年代は14世紀第2四半世紀、すなわち鎌倉時代最末期から南北朝初期と考えられる。

第2に、南宋銭の占める割合が極めて少ないことがこの点に要因しているのである。表3のとおり、南宋銭の全体に占める割合が北海道志海苔出土例では2.6%、中野市田麦例では2.2%であるのに対し、本遺跡ではわずかに0.27%に過ぎないことがわかる。このことから、西条岩船遺跡例が南宋銭の本邦流入がいまだ初期の段階での埋蔵であると考えてよいと思う。

さて、「總銭種数」53種のうち、1種10枚以下の希少銭貨数を差し引いた銭種数(単に「銭種数」とする。以下同じ)は34種である。

3万4千の母体数から勘案すると、「銭種数」は少ないとできる。つまり特定銭種、例えば元豐通宝への集中がみられるといえるのではないか。

臆測銭種上位は全国的傾向からみてもほぼ同一である。ただし、元豐通宝が若干多め、熙寧元宝の割合が傾向よりやや少なめである。埋蔵年代に半世紀のズレがあり、単純には比較出来ないが、中野市田

期	錢名	発行年	発掘枚数		割合(%)	期	錢名	発行年	発掘枚数		割合(%)	
			志	西岩					志	西岩		
漢	四銖半兩	BC175	7				政和通宝	1111	15,206	1,443	4.1	4.2
	前漢五銖	BC118	39		0.01		宣和元宝	1119	1,412	125	0.3	0.37
	貨泉	14	6		0.001		宣和通宝	1119	1,412	125	0.3	0.37
	後漢	40					景祐通宝	1034	2			0.006
	後漢五銖						聖宋通寶	1101	1			0.003
	隋五銖	81										
唐	開通元宝	621	30,816	1,708	8.2	5.0	遼	太平通宝	1020			
	乾元重宝	759	1,422	40	0.4	0.001		清寧通宝	1058	1		0.000
	通正元宝	916	8		0.001	咸雍通宝	1065	2		0.000		
	天漢通宝	917	17		0.004	大康通宝	1075	2		0.000		
	光天元宝	918	17		0.004	大安通宝	1085					
	乾德元宝	919	79		0.02	乾祐元宝	1101					
蜀	威康元宝	925	19		0.005	元德通宝	1120					
	大福元宝	938				天慶元宝	1158	3	3	0.000	0.006	
	南唐	944	2		0.000	建炎通宝	1127	8		0.02		
	大唐通宝	944				紹興元宝	1131	149		0.04		
	後漢	944	15		0.005	紹興通宝	1131	16		0.004		
	周通元宝	955	87		0.02	隆興元宝	1163	1		0.000		
南唐	唐國通宝	958		19	0.1	0.001	乾道元宝	1165	2		0.000	
	宋元通宝	960	1,288	89	0.3	0.003	淳熙元宝	1174	2,366	42	0.60	0.12
	太平通宝	976	3,512	281	0.9	0.008	紹熙元宝	1190	774	21	0.2	0.06
	淳化元宝	990	3,258	398	0.9	0.011	紹熙通宝	1191				
	至道元宝	995	5,851	976	1.6	2.9	慶元通宝	1195	938	6	0.3	0.02
	咸平元宝	999	6,400	810	1.7	2.4	嘉泰通宝	1201	549	4	0.1	0.02
北	景德元宝	1005	8,139	1,683	2.2	4.9	開禧通宝	1205	356		0.1	
	祥符元宝	1009	9,322	1,550	2.5	4.6	聖宋重寶	1208				
	祥符通宝	1010	5,384	1,076	1.4	3.2	嘉定通寶	1208	1,735	5	0.5	0.02
	天禧通宝	1018	7,943	1,545	2.1	4.5	嘉定元寶	1225		2		
	天聖元宝	1023	17,924	3,408	14.8	10.1	大宋元寶	1225				
	明道元宝	1032	1,813	276	0.5	0.8	大宋通寶	1225	84		0.02	
宋	景德元宝	1034	5,384	705	1.4	2.0	紹定元寶	1228				
	皇宋通宝	1039	47,031	3,460	12.6	10.2	紹定通寶	1228	614	2	0.2	0.006
	康定元宝	1040					端平元寶	1234	49	1	0.01	0.003
	慶曆重寶	1045	1		0.000		嘉熙通寶	1237	161	3	0.04	0.009
	至和元宝	1054	4,452	279	1.2	0.8	淳祐元寶	1241	530		0.1	
	至和通寶	1054	1,416	43	0.4	0.13	皇宋元寶	1253	285	3	0.08	0.009
宋	嘉祐元宝	1057	4,478	304	1.2	0.89	開慶通寶	1259	20		0.005	
	嘉祐通宝	1057	8,729	216	2.30	0.63	景定元宝	1260	475	1	0.1	0.003
	治平元宝	1064	7,002	362	1.9	1.06	嘉定元寶	1265	583	2	0.2	0.006
	治平通宝	1064	1,154	27	0.3	0.08	正隆元宝	1158	479	102	0.1	0.3
	崇寧元宝	1068	34,897	1,941	9.3	5.7	大定通寶	1178	22	2	0.006	0.006
	崇寧重寶	1072	12	1	0.003	紹定通寶	1310	110	1	0.03	0.003	
元	元豐通宝	1078	43,099	5,589	11.5	16.4	↓至大通寶	1341	3		0.000	
	元祐通宝	1093	33,904	3,554	9.1	10.4	至正通寶	1351				
	紹聖元宝	1094	14,917	711	4.0	2.1	天定通寶	1360				
	紹聖通宝	1094	2	1	0.000	↓明大中通寶	1361	1		0.000		
	元符通宝	1098	5,721	286	1.5	0.83	洪武通寶	1408				
	聖宋元宝	1101	14,333	648	3.8	1.9	宜德通寶	1433				
元	崇寧通宝	1102	3	1	0.000	判斷不能		12,901	2	3.4	0.006	
	崇寧重寶	1102	2		0.000	合計		374,368	34,038	100	100	
	大觀通宝	1107	4,230	277	1.1	0.81						

表3 錢種についての精査（志海苔遺跡と西条岩船遺跡の比較）

註) ①、②はそれぞれ埋蔵錢の母体を特定錢種で大まかに以別したものである。つまり、①は最新の錢種が至大通宝からの占錢群、②は洪武・永樂・宣德などの明錢群を含む新しい古錢群を表している。

註) 安南・朝鮮・呂宋等は省略している。西条岩舟遺跡ではこれらは出土していない。

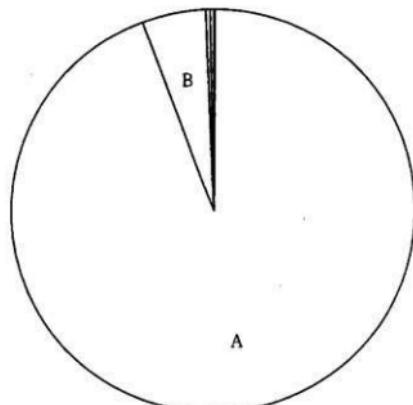


図3 西条岩船遺跡群出土波来銭内訳

麦例をみると、上位銭貨は①元豊通（12.6%）②皇宋通（12.5%）③開通元（10.7%）④熙寧元（8.9%）⑤元祐通（8.7%）⑥天聖元（5.1%）であり、その順位傾向は本例とほぼ同一であるが、包含割合に若干の異同がみられる。

1種10枚以下の希少銭貨は19種みられる。わずか1例しかみられなかった銭種もある。これも全国的にみても同一の傾向がみられる。これら希少銭貨は大陸において鋳造された総量が極端に少なかったのであろう。しかし、宣和元宝は北宋1119年鋳造であるが、同時に鋳造されている宣和通宝は125枚みられる。また、熙寧重宝と同様、北宋熙寧年間に鋳造された熙寧元宝は全国で大量に発見されている。こうしたことから、同時代、同年代においての大連での貨幣鋳造量全体が少ないものであったといえなことはあきらかである。また、鋳造年が同じであっても銭種によってその鋳造量に著しい差異があったことが理解できる。

また、判読不可能銭はわずか2件にとどまっている。これは、銭貨そのものの磨滅度の低さ・埋蔵後の保存状態のよさなど、埋蔵銭貨群の良質さに起因するものと思われる。

今回の調査の結果、北宋銭は宋通宝から宣和元宝

(単位: 枚)		
	出土枚数	%
A—北宋銭	32,069	94.2
B—唐銭	1,748	5.1
C—金銭	104	0.3
D—南宋銭	92	0.3
E—南唐銭	19	0.1
F—その他	6	0.0
合計	34,038	

まで全34種に分類される。宋通元宝と紹聖元宝の一部には、背面に星文がみられる（拓本No.11、51）が、それ以外はすべて無背である。また、同一銭銘でも書体によって複数に分類が可能であるが、特に北宋銭はこの傾向が顕著である。拓本表によっても判然とするが、南宋銭がすべて楷書体である

のに対し、楷書・草書・行書・篆書・隸書体のいずれか複数に分類できる銭貨が多いのである。

一方、南宋銭はその背面に鋳造年が鋳印されているのが特徴である。淳熙元宝は淳熙8（刻）、10、11、12、14、15、16年のほか、月・星文が印されているものもみられる（No.66～73）。紹熙元宝は元年から5年まで、慶元通宝は5年を除き元年～6年までみつかっている。その他咸淳元宝までこうした鋳造年を鋳印したもののがみられる。南宋銭は概して銭銘がはっきりしており、北宋銭比して造りもしっかりしていることがわかる。

唐銭は開通元寶と乾元重宝の2銭種のみだが、そのほとんどが開通元寶である。また、開通元寶も背に月文（No.3、4、6）や潤字（No.5）などで分類できる。「潤」は鋳造地が江蘇省鎮江府丹徒県に比定されている。乾元重宝も月文が

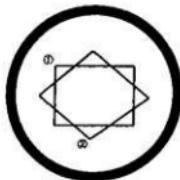


図4 星形孔銭のしくみ
①は元来の郭孔
ケバを取るために入れた齋がすれて入ったのが②

表4

発掘枚数の多い銭貨名	
元豐通宝	5,589枚(16.4%)
元祐通宝	3,554枚(10.4%)
皇宋通宝	3,460枚(10.2%)
天聖元宝	3,408枚(10.0%)
熙寧元宝	1,941枚(5.7%)

表5

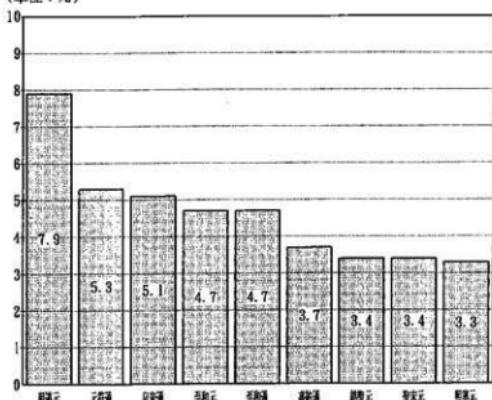
発掘枚数の少ない銭貨名	
宣和元宝	1枚
熙寧重宝	1枚
崇寧通宝	1枚等

みられる(No.8)。

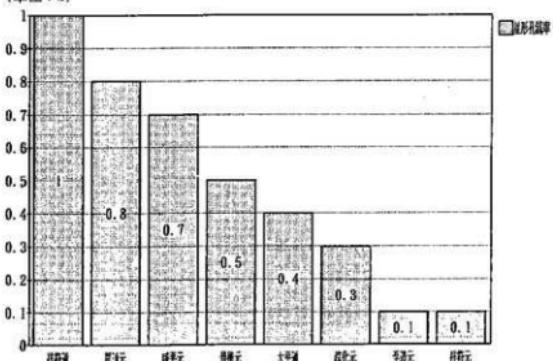
金錢は正隆元宝(No.101)と大定通宝(No.102)の2銭種である。两者とも銭銘・作りつけられも丁寧なものである。特に正隆元宝はそのほとんどが良銭であった。

4 加工銭について

(単位: %)



(単位: %)



出土渡来銭には「本錢」とよばれる基本銭のはかに、銭貨に何らかの加工がされた加工銭が存在する⁶。西条岩船遺跡では特に「星形孔銭」が多くみつかっている(拓本No.28、31、32、35、46、47、53、97、107-116)。

「星形孔銭」とは「銭の方形の孔の四辺にたがねなどによる切り込みをくわえ、孔を星形にみせる細工を施した」銭である。こうした細工がなされる背景は判然とはしないが、例えば「孔にケバを有する銭貨を何枚か重ねたうえで、鋭利な四角い刃(たがねなど)を用いて一括して孔のケバをえぐった際、その中からたまたま生じるタミー銭」であるとも考えられる。(図4参照)

表6は、各段毎に銭種毎の星形孔銭が何枚あるのかを示したものである。ここから全体で797枚(2.3%)の星形孔銭が存在することがわかる。その大多数がやはり北宋銭であり、全体の97%を示している。南宋銭はわずか3例にとどまっている。①皇宋通②元豐通③元祐通④熙寧元⑤天聖元の順であり、「総銭種」全体における上

銭名	1段	2段	3段	4段	5段	6段	7段	8段	9段	10段	計	割合
開通元	2	3	2	1	1		1	2	2		14	1.76
乾元				1							1	0.13
大平通		1									1	0.13
淳化元							1				1	0.13
至道元			1								1	0.13
咸平元		1	1	1	1		1	1			6	0.61
景德元		1	3	1			2	1	1		9	1.13
祥符元		1			1						2	0.25
祥符通	2	1		1	2		2	1	1	1	11	0.13
天禧通	1	1	2	5	1	5	5	1	3	1	25	3.14
天聖元	11	9	4	5	2	5	4	2	4	6	52	6.52
明道元	2	1	2		1	1	2	13			22	2.76
景祐元	4		6		1		1	2	3	2	19	2.38
皇宋通	16	24	12	11	20	16	23	24	12	19	177	22.2
至和元	1	2	2	1		2		1	3	1	13	1.63
至和通	1					1					2	0.25
嘉祐元		2		1	1	2	3		1		7	0.88
嘉祐通			3			2					8	1.00
治平元	1	2				1				2	11	1.38
熙寧元	10	12	4	7	4	4	10	5	5	4	65	8.16
元豐通	21	12	13	22	18	17	12	24	16	11	166	20.8
元祐通	9	12	4	4	4	9	11	16	9	5	83	10.4
紹聖元	3		5		2	2	3	2	3	4	24	3.01
元符通		3			3	2	1	3		3	15	1.88
聖宋元	2	6	3	1	4			5	1		22	2.76
大觀通	1		1	1				1		2	6	0.75
政和通	3	3	1	3	2	4	4	5	1	1	27	3.39
宣和通	1			1			1				3	0.37
淳祐通											1	0.13
嘉祐通		1						1			1	0.13
嘉祐通											1	0.13
計	91	99	69	67	69	73	89	113	65	62	797	100(%)

表6 星形孔銭の枚数(宝字を省略)
全体における星形孔銭の割合………2.3%

位銭貨とほぼ対応していることがわかる。しかもその割合をみてみると、①22.2% (10.2%) ②20.8% (16.4%) ③10.4% (10.4%) ④8.6% (5.7%) ⑤6.5% (10.1%) であり(かっこ内の数値は「總銭種」全体の割合を示す。表3参照)、元豊通宝、皇宋通宝の割合が著しく高くなっている。

また、各銭種のうちでこのような加工銭が含まれる割合についてみてみると、皇宋通宝は西条岩船遺

跡では3460枚存在し、この内星形孔銭は177枚であるので星形孔銭率は5.1%であることがわかる。全体における星形孔銭率は2.3%であることから、皇宋通宝は星形孔銭についても多いことがわかる。一方、元豊通宝、元祐通宝の星形孔銭率は平均程度であり、天聖元宝、開通元宝はむしろ平均を大きく下回っている。したがって鋳造枚数量と星形孔銭率の高さはかならずしも一致しないことはあきらかであ

る。

なお星形孔銭以外の加工銭には①孔を円形または精円形に削ったもの（例えば3段B—祥符元、3段A—8—至道元—拓本No.17）②孔を拡大したものの（例えば、2段A—10—元祐通）③銭面に小穴があいているもの（例えば1段13—祥符通、2段A—1—開通元、2段B—4—皇宋通、5段B—8—熙寧元、5段C—10—明道元等）④中央の穴から右横にかけて円形状の削去がされているもの（例えば2段—9—天禧通、拓本No.117）⑤輪郭部を削去してあり一回り小さいもの（1段20—紹熙元、2段A—1—嘉祐元、3段B—11—熙寧元、5段C—8—嘉祐元、5段C—10—宣和通等）がある。割れた銭貨が3例のみ（1段20—太平通、8段B—9—紹聖元、10段A—3—至道元）精銭とともに銭さし中に混在していた。

5 銭さしの組成について

「ひとさし」の組成はどうなっているのか。銭貨がどのような順番で並んでいたのか。そこに規則性はあるのだろうか。こうした疑問から、本項ではサンプルとして数さしの銭さしを取り上げ、その銭種の配列順について記した（表7）。

これによると特に人為的と思われる銭貨配列はみられなかった。ただし同一の銭さしに同一の銭種が連続して並ぶ割合についてみると次のようになる。

一段22	1・2番目天聖元	3・4皇宋通	5 ~7元祐通	27・28祥符通	46・47元祐通	69・70元豐通	75・76元豐通	77・78元祐通	以上8組17枚（1枚の銭が同一種の銭貨と連続して並び存在する率17.5%）
2-A-12	37・38元豐通	52・53天聖通	94・95 皇宋通	91・92天聖元	以上4組8枚 8.2%				
2-C-4	3・4至道元	10・11天聖元	12・13 皇宋通	24・26元祐通	30・31熙寧元				

32~34天聖元	36・37元豐通	48・49 天聖元	64・65元豐通	80・81天聖元 85~87元豐通	96・97元豐通	以上12組27枚27.9%			
2-C-12	3・4元豐通	43・44皇宋通	58・59 祥符通	83・84皇宋通	90・91天聖元 以上5組10枚10.3%				
2-B-4	4・5天聖元	9・10天聖元	49・50 政和通	53・54元祐通	71・72天聖元 90・91天聖元	93・94景德元	以上7組14枚14.4%		
2-B-5	24・25皇宋通	62・63天聖元	86・87 元豐通	93・94元豐通	以上4組8枚 8.2%				
2-B-1	14・15天聖元	46~48元豐通	49・50開通元	62・63元豐通	以上4組9枚9.3%				
3-b	10・11政和通	14・15天禧通	16・17 天聖通	25・26天聖元	28・29元豐通 39・40元豐通	60・61元豐通	93・94元豐通	以上8組16枚16.5%	
3-C-10	7・8元祐通	9・10景德元	39・40 天聖元	63・64皇宋通	71・71元豐通 73・74元豐通	79・80天聖元	以上7組14枚14.3%		
3-C-11	5・6元豐通	7・8元祐通	14・15 元豐通	31・32開通元	47・48元豐通 56・57祥符元	61・62祥符元	以上7組14枚14.4%		
4-C-8	6・7元豐通	22・23元祐通	38・39 元豐通	58・59元祐通	73・74皇宋通 75~77元豐通	102・103熙寧元	以上7組15枚14.3%		
4-A-8	9・10祥符通	16・17熙寧元	40・41 皇宋通	53・54天聖元	55・56元祐通 61・62熙寧元	65・66元豐通	69・70祥符元	以上8組16枚16.0%	
4-A-9	26・27開通元	35・36元祐通	47・48						

表7 錢さしの組成

○印がある面がおもてである。

(2段C列12)	
○天祐通	○カイ天聖元
○皇宋通	○テン元祐
○テン元豊	○テン聖元寶
○元豊	○カイ天聖元
祥符元	○カイ皇聖通
○カイ熙寧元	○テン元祐
○テン皇宋通	○テン聖元
○天禧通	○テン嘉祐元
○皇宋通	?
○天祐通	○テン嘉祐元
○聖宋元	○テン嘉祐通
○カイ元祐	○カイ元祐
○カイ政和通	○テン祥符通
○皇宋通	○テン元祐
○テン元豊	?
○天聖元	○テン天祐通
○テン祥符通	○カイ嘉祐通
吉德元	○テン嘉祐元寶
○元明道元	○カイ熙寧元
○テン祥符元	○カイ開元通
天祐通	○テン景德元
祥符元	○テン天祐通
天聖元	○テン天祐通
天聖元	○テン政和通
○カイ元豊	○テン景德元
熙寧元	○テン開元通
祥符元	○テン祥符元
○テン皇宋通	○テン元祐
景祐元	○テン元祐
○テン明道元	○テン開元通
大聖天通	○カイ元祐通
○カイ開元通	○テン開元通
○カイ政和通	○テン元祐
○カイ皇宋通	○テン元祐通

(2段B列5)	
元 豊 ○テン	元 豊 ○テン
天 福 ○カイ	天 圣 元 ○テン
皇 宋 通 ○カイ	元 豊 行 通
元祐 ○行	天 福 通
○ 開 元 通 ○テン	景 德 元 ○テン
元 豊 平 元 ○行 咸	皇 宋 通 元 ○テン
元 豊 行 ○カイ	熙 寧 元 ○テン
聖 宋 元 ○カイ ○テン	祥 符 通 ○カイ
元祐 ○カイ	聖 宋 行 祐 ○テン
皇 宋 通 ○カイ	元 豊 行 祐 ○テン
○ 戒 平 元 元 豊 行 元祐 ○テン	聖 宋 行 豊 ○テン
至道 元 ○草	元 天 圣 元 ○カイ ○テン
景祐 元 ○テン	聖 宋 行 圣 ○テン
天 福 通 ○テン	元 淳 化 元 ○カイ ○テン
聖 宋 元 ○カイ	祥 符 通 ○カイ
元 豊 行 ○テン	熙 宁 元 ○テン
熙 宁 元 ○カイ ○テン	政 和 通 ○カイ ○テン
元祐 ○行	皇 宋 行 政 ○カイ ○テン
元祐 ○テン	和 宋 通 ○カイ ○テン
熙 宁 元 ○カイ	元 淳 化 元 ○カイ ○テン
天 福 通 ○カイ	祥 符 通 ○カイ
皇 宋 通 ○カイ	熙 宁 元 ○テン
皇 宋 福 ○●●	元 淳 化 元 ○カイ ○テン
大 觀 通 ○テン	至 天 圣 元 ○テン
元祐 ○行 咸	聖 宋 行 圣 ○テン
元 豊 平 元 ○テン	天 福 通 ○カイ ○テン
聖 宋 元 ○カイ ○テン	元 紹 祐 ○テン
咸 平 元 ○行	嘉 祐 通 ○テン
祥 通 ○テン	元 紹 祐 ○テン
威 平 元 ○行	元 紹 祐 ○テン

	天聖元	55・56天聖元	69~71元豊通 88・89元祐通	95・96天聖元	以上7 組15枚14.4%
5-C-12	7・8元豊通	23~25元豊通	33・34 元豊通	49・50政和通	51・52元豊通 83・84天聖元
					89・90元豊通 以上7 組15枚15.5%

錢種をみてもわかるように、枚数の多い錢貨ほどさし中に連続して存在する確立が高くなっている。平均すると1さし中7組の2枚連あるいは3枚連が存在することになる。これはおよそ1さしのうちの10~15%にあたる。つまり今回の銭さし群が均質の内容であり、人為的な施しがされていないものであると考えられる。すなはちこれが当時の流通錢貨の組成を反映していると考えられる。前述のとおり、銭さしの先端から末端まで年代的法則性もみられないことから、これら全銭さしが一括して同時に作成されたものと思われ、当該地方において銭さし341さしを一括して作成し埋納し得る勢力の想定を念頭に置く必要がある。

6 まとめ～出土遺跡の意義

今回の遺物の意義は次の2点に集約される。すなわち、

- ①銭さし341さしの保存状態が極めて良好であり、さしの枚数が確認できる。現状では7割が「97枚省百」慣用の銭さしであるが、種々の不手際を勘案すれば恐らく9割が「97枚省百」慣用の銭さしであったと思われる。これまで銭さしの枚数に言及した報告が幾つかなされているが、これはほど確度の高い例は未聞である。
- ②3万4千枚のうち94%が北宋錢によって占められている。これはA銭種に明錢が含まれていないB南宋錢の割合が少ない、ことによると考えられる。したがって埋藏時代画期は年代決定錢種からみて第2期（鎌倉時代最末期～南北朝初期）の初頭と考えられ、第2期のなかでは本邦最大の枚数を

数える例となる。

である。

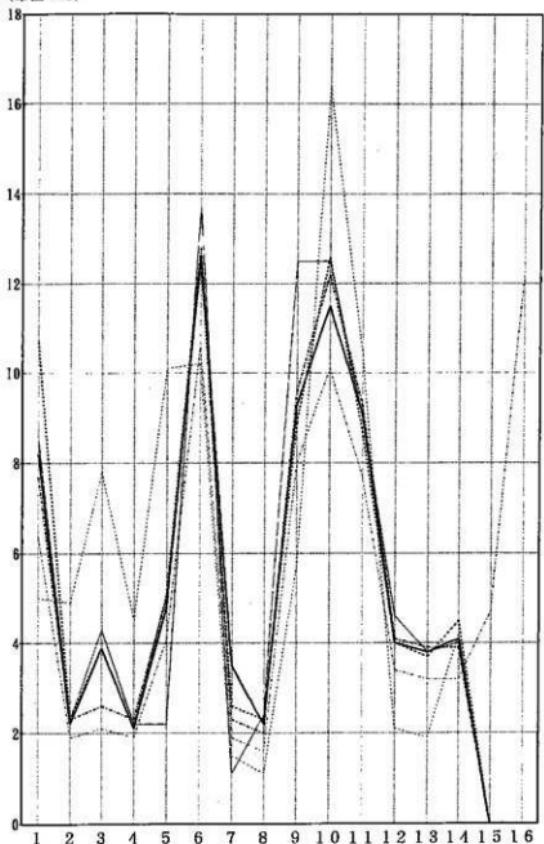
「總錢種數」は53種、10枚以上の「錢種數」は34種である。これは3万4千枚という枚数を勘案すると少ないと見える。これも北宋錢への極端な集中に原因するものと思われる。このうち主要錢種上位の傾向は全国的傾向とほぼ同一であるが、図7によればやはり北宋錢への集中がみられる。

逆に南宋錢のうち主要な錢貨の全体における占有率をみたのが図8である。志海苔・田麦・早稻田の折線がほぼ一致しているのに対し、西条岩船の場合、南宋錢各錢の占める割合が他に比して極端に低いことがわかる。また、埋藏画期が同じ第2期である下伊那箱川例をみても西条岩船より割合が高め、第3期の志海苔・田麦より低いという結果が得られる。このことは本例自体が南宋錢・元錢の流入が初期の段階で貨幣群であって、同じ第2期の下伊那箱川例・早稻田例よりも埋藏画期がさらにさかのばるものであるとができる。かなり早い時期の埋藏といえよう。このように、埋藏時代区分が特に第1期・第2期の場合、その同一期に属する錢貨群の南宋錢の比率を比較することによって、同一期内における各種錢の埋藏時代順をある程度推定することができると考える。

以上みてきた通り、出土錢種とその割合の傾向は要するに時代的・地域的にみても必ずしも同一であるというのではなく、いわば大同小異といえる。

もう一つ注目しなくてはならないのは、過去の中野市内における出土埋藏錢の多さである。なかでも中野市岩船西条境地縫では本例を含め4回の埋藏出土をみている。①本例以外はすべて珠州系の壺に収納された状態で出土している。②埋藏錢出土層位も3例は現在のレヴェルから約30~60cmさがった地点（当該地域における中世土層は地下約20~30cm付近と推定される）と比較的浅い地点での出土であるのに対し、本例が地下1m付近に出土している。この2点を勘案すると、今回の埋藏錢が他の3例とはまったく異なる性質のものであるといえる。埋納容器

(単位: %)



今後この統計グラフと中国での鑄造枚数との関係を比較対照する必要があろう。

1:開通元宝 2:景德元宝 3:祥符元宝 4:天禧通宝 5:天聖元宝 6:皇宋通宝
 7:嘉祐通宝 8:治平元宝 9:熙寧元宝 10:元豐通宝 11:元祐通宝 12:紹聖元宝
 13:聖宋元宝 14:政和通宝 15:洪武通宝 16:永樂通宝

図7 年代順上位通貨比較

としての木箱（材質は不明）はしっかりと作りであり、頑丈な埋蔵のされ方がなされていた。こうした埋蔵方法は田麦例にもみられ、傾向としては第2期よりも第3期以降の埋蔵銭に多くみられる。お

に従いこうしたダミ一種も増加することは必ずしもいえないものである。むしろ、鋳造量の少ない銭種にもみられるのである。

埋蔵銭（枚数の例を除く）についてはおよそ3つ

そらく、大量の銭貨を安全にしかも枚数の把握を容易にする為に整然と頑丈に埋蔵する必要が生じた結果、こうした方法が採られるようになつたものと思われる。したがって、こうした必要が当該地域に全国的にみても早くから生じていたことを本例は示唆するものと考えられる。埋蔵主体者ならびにその埋蔵意図を考える場合、この点を十分考慮する必要があると思われる。

加工銭である「星形孔銭」は、特に北宋銭に集中してみられる。特にそのうちで明道元宝（7.9%）や元符通宝（5.3%）、皇宋通宝（5.1%）の占める割合が比較的高かった。しかし、鋳造量が多い開通元宝（1708枚）、天聖元宝（3408枚）に占める割合が0.8%、1.5%と低いことから、銭貨鋳造量増大

(単位: %)

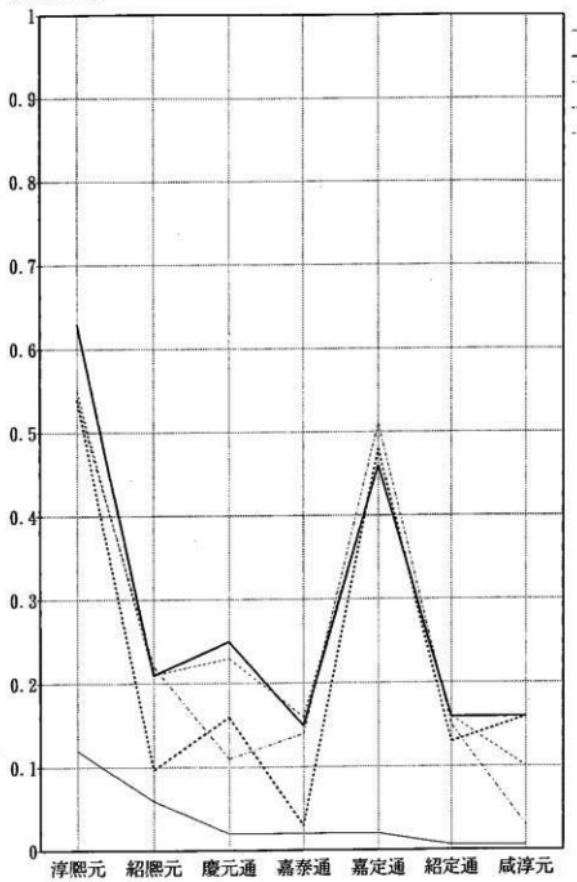


図8 南宋錢比較

の理解があり、本例もこのうちのいずれかであったと思われる。即ち、①備蓄銭②年貢代銭納・土地売買のための銭貨③神・仏への奉納銭、である。さらに①の備蓄銭に関しては、a 戦乱・災害に際しての非常備蓄 b 将来に備えた個人蓄財、等が考えられる。木箱に整然と且つ頑丈に詰めて埋納されている状態を勘案すれば①-aは除外できるが、関連史・資料

が皆無なので俄に決めがたい。一括して同時にさしが作成され、枚数把握が容易になるように埋納されている点をみれば、個人蓄財の意味合いというよりも受領客体(受取相手)の想定される厳密な場合を考えた方がよいかかもしれない。

いずれにしても当時、当該地方において莫大な銭貨流通がみられたこと、ひいてはこのような銭貨埋蔵をなし得る勢力が存在していたということだけはいえよう。

註1 例えば青森県浪岡城跡では52さし中36さしが百枚百文(調百)でみつかっている。「97省百」例は広島県草戸千軒町遺跡、新潟県湯沢町

等でみられる。浪岡町教育委員会『浪岡城跡VIII』1986年

註2 湯沢町教育委員会『伝 泉福寺遺跡』1976年
郷道哲章「小木曾庄検注雜物日記目安注文」にみる銭の計算方法について」(『長野』160、1991年)

註3 是光吉基「出土渡來銭の埋没年代」(『考古ジ

- ヤーナル』249、1985年)
- 鈴木公雄「出土備蓄銭と中世後期の銀貨流通」(『史学』61—3・4、1992年)
- 註4 日比野丈夫「長丘村出土古銭調査」(長野県教委『下高井』、1953年)
- 同 「古銭」(『新版考古学講座』9巻 雄山閣出版、1971年)
- 註5 鈴木前掲論文
- 註6 是吉吉基「草戸千軒土遣跡出土の古銭—削銭について—」(『草戸千軒』121、1983年)
- 註7 鈴木前掲論文
- 註8 鈴木公雄氏のご教示による。
- 註9 常州増井村例は史料1を参照。志海苔例は市立函館博物館「函館志海苔古銭」1973年、和光市子例は栗原文蔵「埼玉出土の中世備蓄古銭について(補遺)」(『埼玉県立歴史資料館研究紀要』10、1988年)に掲った。
- 註10 箱川例は市村成入「長野県下伊那郡山本村箱川発掘の古銭」(『信濃』4—4・5・6、1952年)早稲田例は同「早稲田発掘の古銭について」(戦前版『信濃』4—3、1955年)に掲った。
- 註11 金井汲次「長野県中野市出土の古銭」(『信濃』12—5、1960年)同「中野市内出土の古銭について」(『高井』8、1986年)などがある。
- 註12 鈴木前掲論文

錢貨拓本表

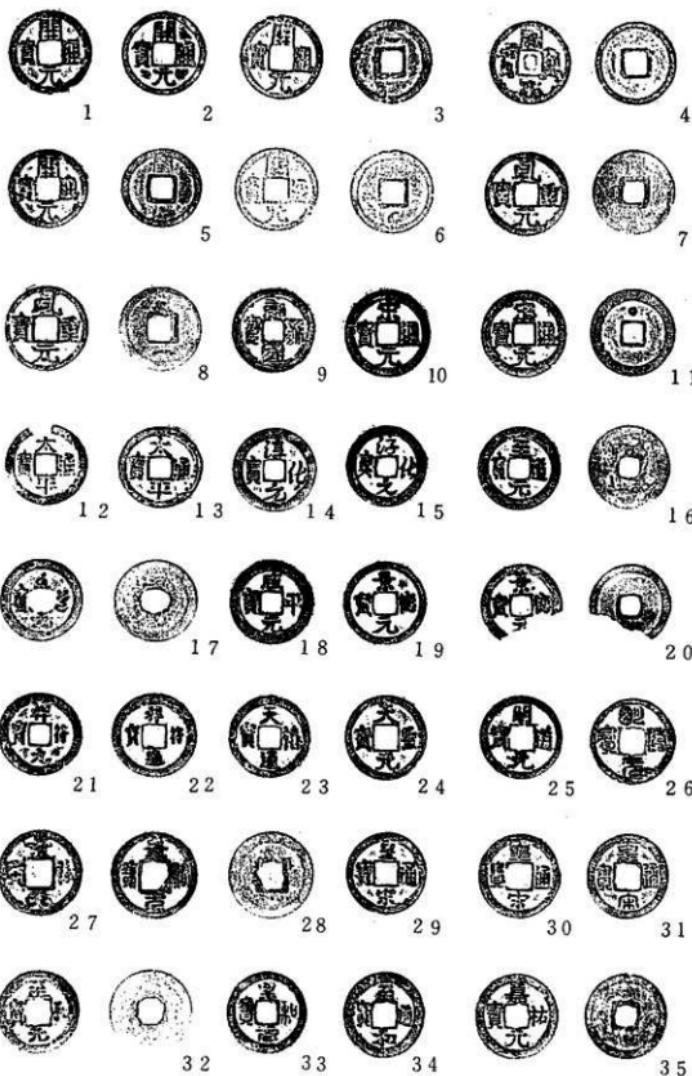
番号	鑄造年	錢貨名	書体	備考・特徴	さし番号
1	621～	開通元寶	隸	無背	9 C 9
2	"	"	"	無背 「元」小さい	10 C 5
3	"	"	"	背上に刀文	6 C 10
4	"	"	"	背左に刀文	4 A 4
5	845～	"	"	背上に「潤」江南道潤州	3 B 7
6	621～	"	"	背下に刀文	4 B 5
7	759～	乾元重寶	隸	無背	10 C 5
8	"	"	"	背下に刀文	1-7
9	959	唐國通寶	篆	無背	2 C 5
10	960	宋通元寶	隸	無背	2 C 5
11	"	"	"	背上に星文	5 A 2
12	976	太平通寶	隸	無背 上部欠損あり	1-20
13	"	度	楷	無背	6 A 9
14	990	淳化元寶	行	無背	5 A 10
15	"	"	草	無背	1-28
16	995～7	至道元寶	楷	無背 外輪幅大きい	3 A 9
17	"	"	草	無背 孔が橢円形変形	3 A 8
18	998	咸平元寶	楷	無背 外輪幅大きい	3 A 7
19	1005	景德元寶	楷	無背	10 C 5
20	"	"	"	無背 下部一部欠損あり	10 C 1
21	1008	祥符元寶	楷	無背	10 C 5
22	1008	祥符通寶	楷	無背	3 A 5
23	1017～	天禧通寶	楷	無背	10 C 5
24	1023	天聖元寶	楷	無背	3 A 5
25	1032	明道元寶	楷	無背	5 A 3
26	"	"	篆	無背	5 A 4
27	1034	景祐元寶	楷	無背	2 C 11
28	"	"	篆	無背 孔が変形(星形孔銭)	9 A 11
29	1038	皇宋通寶	楷	無背	5 B 3
30	"	"	隸	無背	10 C 1
31	"	"	篆	無背 星形孔銭	10 C 5
32	1055	至元寶	楷	無背 星形孔銭	1-15
33	"	"	篆	無背	8 C 10
34	"	至和通寶	楷	無背	5 A 7
35	1056～	嘉祐元寶	楷	無背 星形孔銭	10 C 1
36	1056～	嘉祐通寶	楷	無背 「通」隸書	5 A 9
37	"	"	篆	無背	5 A 9
38	1064～	治平元寶	楷	無背	10 C 1
39	"	"	篆	無背 6 C 10	5 A 2
40	"	治平通寶	篆	無背	10 C 1
41	1068	熙寧元寶	楷	無背	3 C 11
42	"	"	篆	無背	5 B 5
43	1078	元豐通寶	行	無背	3 A 3
44	"	"	行	無背 銀径大きい	10 C 5
45	"	"	篆	無背 外輪幅大きい	10 C 1
46	"	"	篆	無背 星形孔銭	10 C 3
47	1086	元祐通寶	行	無背 星形孔銭	10 C 5
48	"	"	篆	無背 外輪幅大きい	10 C 5

番号	鋳造年	錢貨名	書体	備考・特徴	さし番号
49	1094	紹聖元宝	行篆	無背 無背 外輪幅大きい	5 C12
50	"	"			6 C10
51	"	"	篆	背下に星文	5 A10
52	"	紹聖通宝	楷	無背 銭径小さい	8 A 9
53	1098	元符通宝	行篆	無背 星形孔銭	10C 5
54	"	"	篆	無背	6 A 9
55	"	"	篆	無背 孔が円形	8 A 8
56	1101	聖宋元宝	行篆	無背 字線が細い	1 - 7
57	"	"	篆	無背 外輪幅大きい	10C 1
58	1107	大觀通宝	楷	無背	3 B 2
59	1111	政和通宝	楷	無背	1 - 26
60	"	"	隸	無背 外輪幅大きい	10C 5
61	"	"	篆	無背	1 - 26
62	1119	宣和通宝	隸	無背 「和」偏平	3 C 1
63	"	"	隸	無背	5 C10
64	"	"	篆	無背	6 C10
65	"	宣和元宝	篆	無背	3 B 3
66	1174	淳熙元宝	楷	背上に月文・背下に星文 外輪幅大きい	8 A 8
67	1181	"	楷	背上に「劄」	1 - 20
68	1183	"	楷	背上に「十」	2 B11
69	1184	"	楷	背上下に「十一」「元」小さい	8 C 3
70	1185	"	楷	背上下に「十二」	9 A11
71	1187	"	楷	背上下に「十四」	5 C12
72	1188	"	楷	背上下に「十五」	1 - 7
73	1189	"	楷	背上下に「十六」	10C 1
74	1190	紹熙元宝	楷	背下に「元」大字	2 B 1
75	1191	"	楷	背下に「二」大字	3 B 3
76	1192	"	楷	背下に「三」大字	4 C 3
77	1193	"	楷	背下に「四」小字	2 C 8
78	1194	"	楷	背下に「五」小字	7 A10
79	1195	慶元通宝	楷	背下に「元」	7 A12
80	1196	"	楷	背下に「二」	2 C 1
81	1197	"	楷	背下に「三」	2 A11
82	1198	"	楷	背下に「四」	4 B10
83	1200	"	楷	背下に「六」	1 - 23
84	1201	嘉泰通宝	楷	背上に「元」	10B 5
85	1202	"	楷	背上に「二」	8 A 4
86	1208	嘉定通宝	楷	背上に「元」	1 - 28
87	1238	嘉熙通宝	楷	背下に「二」	7 B 7
88	1217	嘉定通宝	楷	背上に「十」	1 - 1
89	1218	"	楷	背上に「十一」	2 C11
90	1219	"	楷	背上に「十二」	7 A 5
91	1226	大宋元宝	楷	背下に「二」	2 B 3
92	1227	"	楷	背下に「三」	5 A 7
93	1228	紹定通宝	楷	背上に「元」	9 B 1
94	1230	"	楷	背上に「三」	3 - f
95	1234	端平元宝	楷	背上に「元」	5 B 1
96	1238	嘉熙通宝	楷	背下に「二」	5 B 2
97	"	"	楷	背下に「二」星形孔銭	2 C 5

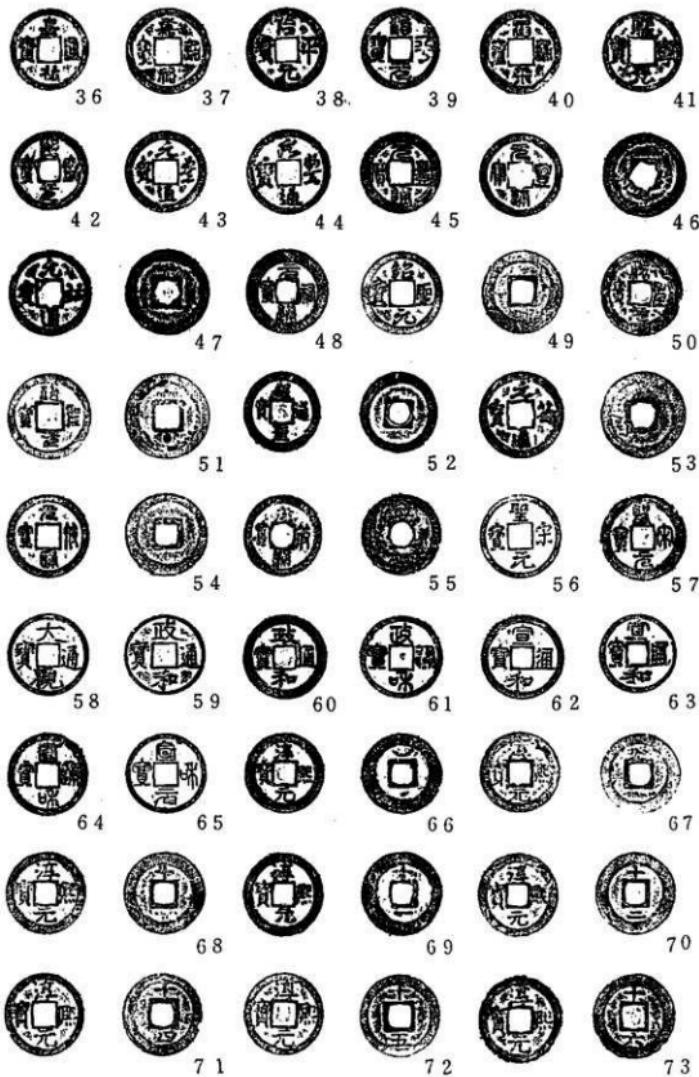
番号	铸造年	錢貨名	書体	備考・特徴	さし番号
98	1260	景定元宝	楷	背上に「元」郭ズレ	6 C 10
99	1265	咸淳元宝	楷	背上に「元」	5 C 10
100	1272	"	楷	背上に「八」	3 - f
101	1158	正隆元宝	楷	無背	2 C 9
102	1178	大定通宝	楷	無背	5 C 8
103	1310	至大通宝	楷	無背	6 B 10
104	1071	熙寧重宝	篆	無背 錢径大きい	3 A 9
105	1102	崇寧通宝	楷	無背	7 C 11
106	1158	天盛元宝	楷	無背	3 B 8
107	1078	元豐通宝	行	無背 星形孔錢	1 - 7
108	1008	祥符通宝	楷	無背 小字 星形孔錢	1 - 28
109	1054	至和通宝	楷	無背 星形孔錢	2 A 1
110	1039	皇宋通宝	隸	無背 星形孔錢	7 A 10
111	"	"	隸	無背 星形孔錢	2 C 11
112	1068	熙寧元宝	楷	無背 星形孔錢	9 C 7
113	1078	元豐通宝	行	無背 星形孔錢	10 A 4
114	"	"	篆	無背 星形孔錢	6 C 10
115	"	"	篆	無背 星形孔錢	7 A 5
116	1111	政和通宝	篆	無背 星形孔錢	7 B 11
117	1017	天禧通宝	楷	無背 郭孔から右横にかけて削去	2 B 9
118	1078	天豐通宝	篆	無背 郭孔から右横にかけて削去	5 B 12
119	995	至口元宝	草	無背 錢貨の一部欠損	10 A 3

拓本は①判読しやすい錢貨②希少な錢貨③特徴があり本文中に触れた錢貨、を探ることを大原則とし、全錢種を網羅する旨としている。しかしながら、拓本の中には文字、加工等判然としないものもあり、その点諒解を願いたい。

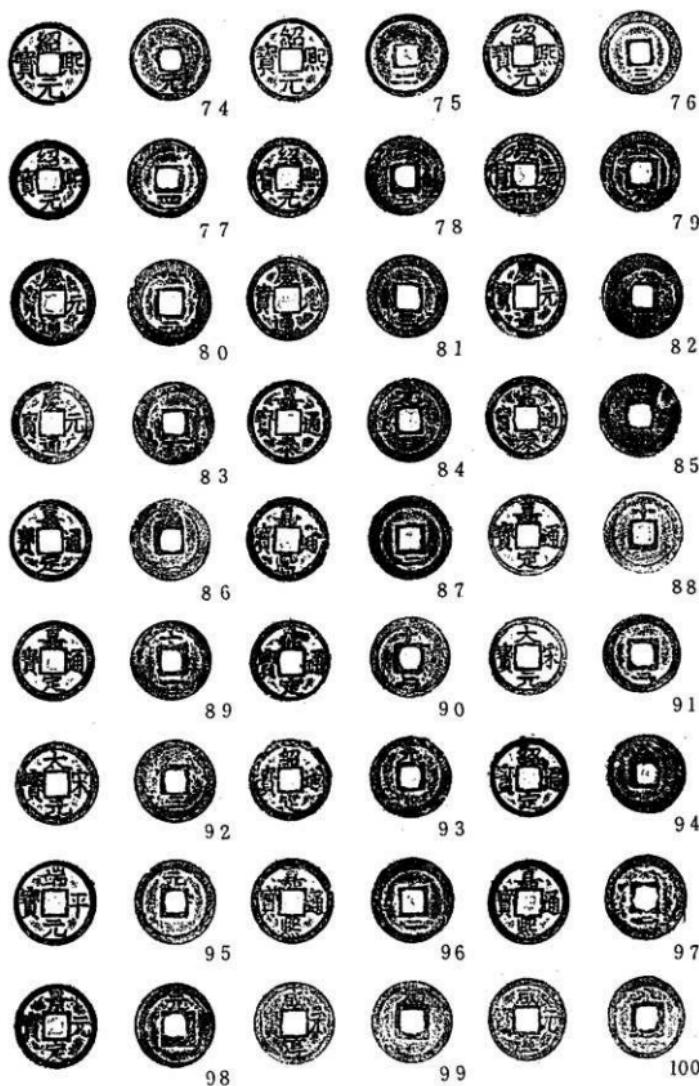
錢貨拓本

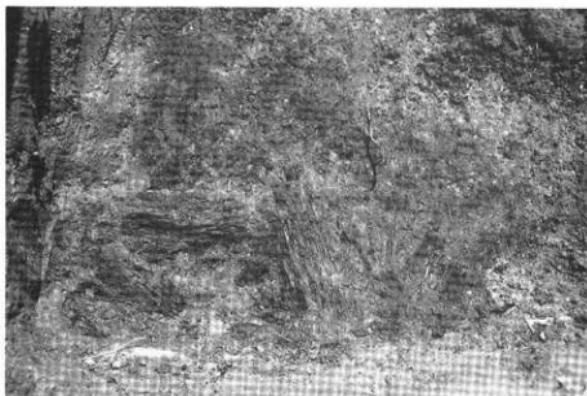


錢貨拓本

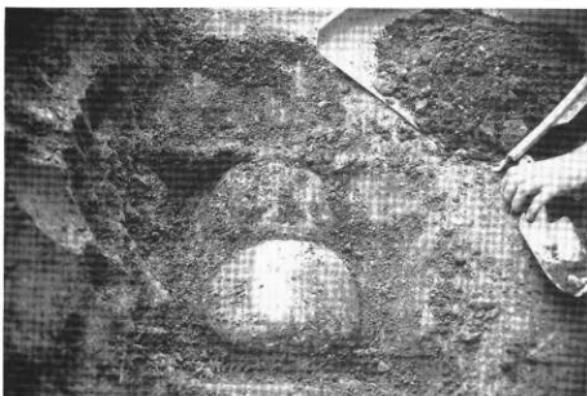


錢貨拓本





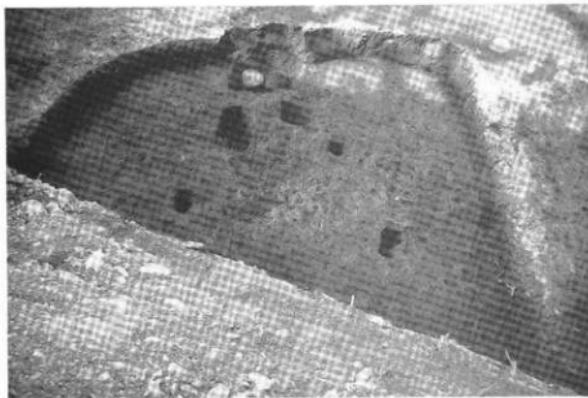
第Ⅰ号竖穴住居



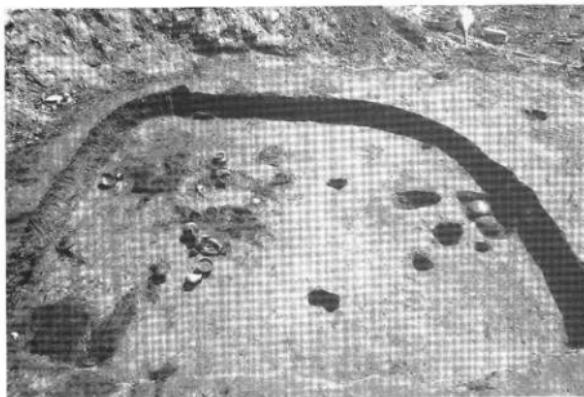
第Ⅰ号竖穴住居



第Ⅰ号竖穴住居



第Ⅰ号竖穴住居



第Ⅰ号竖穴住居



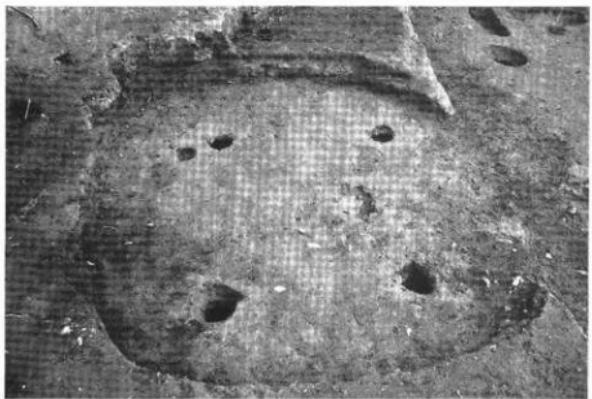
第Ⅰ号竖穴住居



第2号竖穴住居



第2号竖穴住居



第2号竖穴住居